

---

# バイオハザード・OB・FILE 『K』 ~ Nightmare without end ~

馬路キレ子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バイオハザード・OB・FILE『K』〜Nightmare  
Without end

### 【Nコード】

N5896D

### 【作者名】

馬路キレ子

### 【あらすじ】

狂気の一夜から一年が経った。全てを失った悲劇の事件の生き残りには、様々な思いを抱きながら再び死の街へと駆ける。

## 序章（前書き）

この小説は残虐描写・表現があります。  
耐性の無い方はご遠慮ください。

## 序章

西暦2008年9月22日。

その日、日本のS県にて事件は発生する。

『バイオハザード - Biohazard』

日本政府のバイオハザードレベル<sup>『4』</sup>発令により、S県境の各地域と、S県都市部周辺地域への自衛隊が派遣され、メディアへの緘口令、電話や通信などの殆どの外部情報へのアクセス禁止  
他都市部へと繋がる交通機関の絶対隔離と人的隔離も行われた。

S県全体の機能停止と交通機能の麻痺による経済被害は数十兆円とも言われたが、政府はまるで何も無かったかのように事件に対する黙秘を決め込んだ。

政府が今回のバイオハザードで公式に発表した被害規模は未だ予想数値の範囲を超えないが、その予想数値だけを見ても事件の余りにも大きすぎる凄惨さを伺わせた。

事件後、日本政府はS県に対する完全隔離を決定しS県全体を『生物感染疾患危険地域』に認定。  
周辺住民の移動と警察消防車両の全面撤退を行った。

この事件に関する生存者はゼロという公式の発表や

未だ解決していない明確な感染原因に対して各メディアがこぞつて物議をかもし出したが、現在も続く国によるS県の絶対隔離がなされているので、その真実は誰も知る事が出来なかった。

日本政府は今回の事件の凄惨さを取り上げ国内にCounter・offensive・Biohazard・Scramble・Force（対バイオハザード緊急処理部隊、以下C・B・S・F）を結成。翌年の2009年1月より政府公認のC・B・S・FによるS県周辺地域の本格的な調査活動が行われた。

その頃から、このバイオハザード災害は、その事物の不透明性からこう呼ばれるようになった・・・

d 『悪夢のような災害事故 - Nightmare Biohazard Act -』

ちょうど事件から一年後の9月22日に日本政府はC・B・S・F所属の4チームを秘密裏にS県内部へと潜入させた。

ダイヤモンド

アクアマリン

エメラルド

サファイア

Sapphireチーム

だが、人々は考えていなかった。

それは、再び始まる『悪夢』への一歩だとも知らずに。

シナリオ【追憶】 - 1

「大丈夫なの健二？」

「健二？ねえ・・・健二ったら・・・」

「・・・危な・・・！」

「キヤアアアッ！」

「アアアアアア！！グオアアアア！」

「なんで・・・こうなって・・・しまった・・・の！！」

「ケリーさん……何……か……手立て……は！」

「無理よ……彼の……銃を……引きな……さい！」

「助け……て……健二を……誰か……」

「誰か助け……て……」

「も……う……私……は……助からない……」

「はや……く……撃……て……！」

「・・・ッ！！！」

ドオン！！

10月21日 AM3時24分 C・B・S・F 訓練所仮眠室

重厚なコンクリートの灰色の壁、真っ白な天井。

窓は頑丈にロックされ、近くには外気との換気を目的とした空気清浄機がグォングォンと大きな音を立てて動いている。

壁には『C・B・S・F』と大きく書かれた宣伝用ポスターらしきものが何枚か掛けてある。

横長の長方形の部屋には、幾つかの簡易なパイプベッドが置いてあり迷彩服を着たC・B・S・F隊員らしい何人かが寝ているようだ。

人が寝るには余りにも騒々しい空気清浄機の音だが、隊員達は一人として

起きる気配もなく泥のように眠っている。

「ッ・・・！！！」

ベッドに寝ていた一人が、その黒い髪をなびかせながら

急にベッドから起きる。顔全体にうつすらと汗をかき

黒い瞳からは、いくつかの水滴が流れていた。

いつの間にか握り締めていた手には、長時間強い力で握っていたかのような、赤色を帯びている。

「またあの時の・・・夢・・・忘れたはずなのに・・・！」  
拳を毛布へ打ち付けるとパイプベッドが少し揺れる。  
だが周りの隊員が起きる気配はない。

大きな音を立てている空気清浄機のせいだろうか。

「・・・もう健二は居ないのよアヤカ。忘れるのよあの時の記憶は・・・」

自分に暗示をかけ、言い聞かせるように呟く。

思い出したくもないはずだ。その事件は余りにも禍々しく、変えられない事実。

今、生きている彼女の人生を狂わせた悪夢なのだから。

「・・・健二・・・」

ベッドに再び体を倒すと、寂しそうに自分のヘアバンドを見つめてボソツと悲しげに呟く。・・・水色のヘアバンド。

彼が好きだった色だ。

また泥のように眠りはじめる。

ベッドの横にある、小さな簡易テーブルにはペンやメモといった小物が

雑然と並べられ、その中にネームプレートが一枚転がっている。

『C・B・S・F所属

Ayakai Yumeno【夢乃 綾香】』

辺りにはまた、空気清浄機の大きな音が部屋全体を包んでいった。

PM4時55分 C・B・S・F第2ブリーフィングルーム

一日の長い訓練も終わり、C・B・S・Fの隊員達がその日の訓練の締めくくりとして、それぞれのチームの隊長から反省及び総括のくだりを聞くことになる。

第2ブリーフィングルームに呼び寄せられたのはD・TEAM『ダイヤモンドチーム』とE・TEAM『エメラルドチーム』

の隊員達だ。各隊ごとに二列で総勢数十人が椅子に座っている。

「やっと訓練が終わったぜ。どうだ？終わったら一杯やりにいこうぜ」

Dチーム後列席に座っていた薄茶色の髪の毛の迷彩服の男が

隣に座っていたEチームの隊員に話しかける。  
首から提げたネームプレートには、顔写真と文字が書いてある。

『C・B・S・F所属

F i c s h e e U I z 【フィクシー＝ウルズ】』

「じゃあ、あんたのところの隊員を呼んでくれよ。あんたのチームは、いいオンナが多いからな」

誘われた事に満更でも無さそうなEチームの男性隊員は  
Dチームのメンバーを遠めで見回しながら、訓練が終わった事で緊張感の抜けた顔を、さらに緩ませる。

「あー・・・ダメダメ。綺麗な花にはトゲがあるって言うけど、うちのチームはカタブツばっかだからな。誘うのだってガードが硬すぎて無理無理」

乗り気なEチームの隊員を尻目に、自分で誘っておきながら少し怪訝そうな表情で周りをチラチラ見る。

カタブツ。そんなイメージとは、かけ離れたフィクシーの口調が少し重くなるということ。それは彼の言葉を実質的に裏付ける証拠でもあった。

「・・・」

前列に座っている白銀色の髪の毛の女性隊員が

後列で騒ぐ二名の声を聞き流しながら、訓練が終わったあとだと言うのに、どこか張り詰めた・・・というより無表情と言ったほうが適当であろうと思われる顔で、ブリーフィングルームの入り口を見

つめている。  
首から提げたネームプレートが天井の蛍光灯のあかりに当たって光る。

『C・B・S・F所属

Pie≡Donggaa【パイ≡ドオンカ】』

そんなパイの横で何やら楽しげに会話する前列の二人がいた。

「・・・そのディレクターが、まあ自信たつぶりのキザな男だったんですよ」

「フッフ、何処にでもいるわねそういうの。アメリカにも居たわ、そういう『二枚目気取りの自信家男』が言い寄ってくるの」  
美しいブロンドをかきあげながら話す女性と  
楽しげに会話する目鼻立ちに特徴がある女性隊員。

「で、その男の人どうしたんですか？」

「この私に『俺の女にならないか？』なんて言ってきたから思いっきり右頬を殴ってやったわよ！」  
緊張感の高まる室内で、自分達だけの会話のフィールドを作り上げている二人。

彼女達も首からネームプレートを提げている。

『C・B・S・F所属

Kelly「Funk」Obrait【ケリー「ファンク」オ  
ブライト】」

『C・B・S・F所属

Kimiko「Corno」【河野 貴美子】』

・・・一年前のあの事件を生き残った二人だ。

訓練も終わり緊張感の隊員達が、各自自由に話し始める中。  
一人だけ暗い表情の隊員が居た。

・・・綾香だ。その場に居る誰とも口を聞かず。  
ただ機のほうをボンヤリと表情もなく見ている。  
大きな喪失感。

数分後

重厚なドアを開け、一人の大柄の男が出てくる。  
サングラスに迷彩服。白髪まじりの銀髪。  
まさに軍人といった体格から出る威厳、そして威圧。  
その男が部屋に入ってくるなり、今まで騒いでいた隊員達は  
急速に口を閉ざし、即座に姿勢を正して沈黙した。

その男の首からもネームプレートが掛けられていた。

『C・B・S・F・D・TEAM責任者

Ren「Archer」Mikhailov【レン「アーチャー

「ミハイロフ」』

コツ・・・コツ・・・。

男はドアを開けるなり、右手で書類を持ち。

ゆっくりだが緊張感を感じさせるブーツの音を部屋中に響かせる。椅子につくこともなく、正面にあるホワイトボードに男が立つと隊員達は座席から素早く立ち、その場で敬礼する。

隊員達の喉で「ゴクン」という唾を飲み込むような音が聞こえる。

そんな状況を見ていた男が

ゆっくりと、重い口調で話し始める。

「敬礼辞め。着席しろ」

ガタン、ガタガタ。

男が言った瞬間、まるで精密に設計された機械のように瞬時に座席に座る隊員達。

その表情は硬く、今までの緊張感の無さは微塵も感じられない。隊員達の目線も銀髪の男に向かって向けられている。

男は、再びゆっくり空気を吸い込むと

隊員達に向けて威圧しているとも思える

その口を開いた。

「C・B・S・F全隊に命令が下った。新しい任務だ・・・」

ブリーフィングルームは、とてつもない緊張感と共にどよめきの声で包まれた。

## シナリオ【追憶】 - 2

PM5時08分 C・B・S・F第2ブリーフィングルーム

ブリーフィングルーム内は、大きなどよめきに包まれた。

Dチーム隊長、レン「アーチャー」ミハイロフが言ったその言葉は特殊部隊として厳しい訓練を受けてきた彼らの不屈の心をも揺るがした。

『新しい任務』

C・B・S・F：対バイオハザード緊急処理部隊に下る命令。

それは即ち、死と隣り合わせで危険で残忍な致死感染災害に巻き込まれる事を意味する。

不安で一杯になる隊員達だったが、そんなことも言ってもらえない。なぜなら自分達は、そのために雇われ、厳しい訓練を積んでいたのだから。

「今回の概要を簡単に説明する。決行は明日2000時。『ロストレギオン』(Lost region)失われた地域、旧S県)市街地に向かい作戦目的は『現状状態の調査と単一目標施設の奪取と破壊』だ。突入ルートは地下と地上の二通り。D・Aチームは封鎖された地下道から列車による陸路で潜入。E・Sチームは空挺部隊を率いて空路をとる」

坦々と語るレンは、息継ぎのために少し間をおく。隊員達の緊張は高まるばかりだ。まるで従順な犬のように一言一句を聞き逃すことなく、真剣に聞いている。

「今までのC・B・S・F潜入作戦の中で最も大規模な作戦だ。我々特殊チームが組まれてからは、初めての潜入作戦となるが、前回、前々回の別働潜入部隊の散々な結果を思い出せ。あのような失態を二度と繰り返さないためにも諸君らには細心の注意を払って欲しい」

レンは手元にあるファイルを読みながら表情を曇らせ、少し下を向いた。

今年の1月と5月にC・B・S・F特殊研究班が行ったロストレギオンの偵察任務にて得たものに対する代償が余りにも大きすぎたからだ。報告書から見て取れる潜入作戦の結果は明らかかな作戦失敗を物語っていた。

#### 【C・B・S・F第二期偵察報告書】

『潜入偵察作戦に参加した部隊100名に対し生存22名、第一次、二次感染による累計死者70名、行方不明8名。第一次作戦の反省点を生かしKウイルスのエアロゾル（空気感染）を防ぐために開発した特殊戦闘服は役立ったものの、Kウイルスによって進化した生物達の戦闘力は未だ高く。研究室で予想されていた急激進化による肉体崩壊現象は発見されなかった。今回の潜入によってウイルスの進行度合いと進化の比例には個人差があり、突然変異した生物も多く突入した隊員達の殆どが、感染生物による二次感染してしまったことは悔やまれる。次回潜入時には、緊急処置用のKウイルスワク

チンの開発を早急に行つて欲しいと上層部に要求した。今回の潜入で気にする事でもないだろうが、県境で隔離用に設置したコンクリート壁の一部が、破損していた事が発見された。おそらく感染生物による抵抗のあとと思われる』

レンの手元にあるファイルには、燦々たる結果が書き上げてあつた。

「諸君らには明日までに遺書と死後も家族が生活保護を受けれるように手続きを行つてもらふ。今回の作戦には特別に使用火器に制限は無い。自分達が一番使い慣れた火器を選べ。今作戦に関して外部への情報流出を避けるために明日まで外出と家族等との面会は全面禁止。万が一、基地内を抜け出した時は逃亡と見て、その場で拘束などの罰則が待っていると思つて覚悟してくれたまえ。では明日1700時にこの第二ブリーフィングルームへ集合。以上、解散！」

ガチャン。

そういつと表情を曇らせていたレンは部屋を出ようとしてそれを見た隊員達は椅子から立ち上がり、再び敬礼をする。

騒然とするブリーフィングルームの中で、一人として

暗い表情を隠せるものなど居なかつた。

なぜなら彼らは、その事実を知つていた。

一年前に起きた『悪夢の事件』をだ。

「本当の任務か・・・随分と急だな」

後ろに座っていたAチームの一人が低い声を上げる。

その表情は曇り、暗い感情を隠す事も出来ずにいた。

覚悟はしていたとはいえ、まさかさつきまで飲みにも行くことになっていた

自分からは予想も出来ない結果だったからだ。

「すまないね、そういうことだから今日のお楽しみは無しだぜ」

その隣に座っていたDチームのフィクシーがヘラヘラと笑みを浮かべながら

少し残念そうにAチームの一人に言った。

まるで『どうってことない』と言っているような軽い感じで話しかけてくるフィクシーに、Aチームの一人は啞然とした。

「相変わらず楽道家だなあ、お前は」

「それだけが取り柄だね。デルタフォース時代にも良く言われたよ。

まっ、それが災いして辞めさせられたけどね」

軽々と自分の過去を語るフィクシーを少し見直しつつ

暗い表情を解く事の出来ないAチームの一人。

ガタツ！

「……辛い戦いになりそうだ」

その時前列に座っていた銀髪のパイがいきなり立ち上がり聞こえるか聞こえないかわからないほどの声でボソツと一言呟くと、部屋のドアをあけてどこかへと向かった。

ガチャン。

「相変わらず良くわからない女だなあ」

パイがドアを閉めたのを確認するとフィクシーの声が室内中に届く。この数ヶ月、一緒にチームでやっている彼でさえ彼女の動向や過去については何も知らなかった。謎を秘めた彼女に少し興味は抱いていたものの、フィクシーの殆どのアプローチは失敗だった。

どこか近寄りが見たい彼女の背中では楽天家でチャラチャラしたフィクシーのそれを許さなかったのだ。

「カワイイ顔してるんだがな、たまにゾツとするぜ」  
そうドア側に向かって呟くと、フィクシーは再び近くに居たAチームの隊員に話しかけ席を立つと一緒にドアのほうへ歩き、ブリーフィングルームを出てゆくのであった。

ガチャン。

「ついに私達にも来たわね・・・」

「頑張りましょ。このために雇われてたワケだし、今までの訓練を思い出して最善を尽くすしかないわよ」

一年前の事件を、その身で味わっていたケリーと貴美子は  
周りよりも少し違った緊張感を感じていたが  
なぜだかどこか、会話に余裕が生まれていた。  
彼女達は知っているからだ、その恐怖の意味を。

「じゃあ私は自分の武器の調整をしてくるわ、また明日会いましょ  
う。せいぜい遅刻しないで頂戴よ」

ケリーはそう言つと貴美子との話を終わらせ  
ドアのほうへ早足で歩いていき、ドアを開け外へと出て行った。  
しかし閉まるドアから覗く彼女の顔は、どこか寂しそうな顔を浮か  
べていた。

ガチャン。

数分たつと、緊張にかられていた隊員達の殆どが  
それぞれの思いを隠しながら部屋から出る。

部屋に静寂が訪れると、さえぎる物がなくなった照明が部屋全体を  
まぶしく

最後まで残っていた二人を照らした。  
Dチームの貴美子と綾香だ。

「…ねえ？あなたはどつなの綾香。やつぱ怖い？」

貴美子が周りが居なくなっても動かない綾香を心配し

綾香の肩に手をかけ、少し言葉少なに恐る恐る声をかけた。

「…怖いに決まっていますよ。でもそれ以上に…」

綾香はそういつと立ち上がり、部屋を出て行った。

「え…？今なんて言ったの…綾香？」

貴美子も綾香を追いかけるように部屋を出て行った。

ガチャン。

「それ以上に…何なのかしら？」

貴美子は、部屋を出ると駆け足で走り出した綾香を追おうとしたが途中の通路で追うのを辞めた。

最近の彼女には何処か一年付き合っている貴美子にもわからない不思議さを秘めるようになったからだ。

一年前の事件の脱出したときに基地についてから  
『彼』を撃つてからの彼女との変化を見ればわかる。  
そう、彼女は彼女なりに背負っているものが違うのだ。

「健二・・・今あそこへ行くからね待っててよ・・・」

貴美子を振り払い武器弾薬庫への通路を走る綾香は  
緊張した面持ちであったが口元は何故か不適な笑みを浮かべていた。

## シナリオ【追憶】 - 3

10月22日 PM5時15分 C・B・S・F第二ブリーフィンググループ

その日、雲はどんよりと空を包み太陽が現れる事は無かった。暗く、重く、今にも雨風が降り注いできそうな薄黒色の雲は、まるでC・B・S・Fの隊員達の感情をあらわしているようであった。

滑走路に並ぶ大型輸送機に運び込まれる武器弾薬の数々。決して止まることなく、あわただしく動く人影。

そのどれもが一つとして明るい表情はしていなかった。それは、これから始まる『下された任務の凄惨さ』を物語るようであった。

強化ガラスと防音壁で囲われた窓からは重苦しいアルミカーテンウォールが差し込む暗闇の世界を遮り、室内は煌々と光るライトで照らされている。室内には椅子とテーブルが合体した折りたたみの出来る簡易型のテーブルがいくつも並べられ、そこにはC・B・S・Fの隊員達が座っている。

中央の大型テーブルにはDチーム隊長のレンと、Aチーム隊長が赤と黒の太字のサインペンを使いながらホワイトボードに進行経路などを丁寧な、そして迅速に説明している。

「・・・ロストレギオンのビル街を抜け、そのまま目標の旧政府施設ビルに・・・この時Dチームは先行し、Aチームは退路を確保・・・」

室内に居る誰一人、緊張の表情を崩すものは居ない。  
隊長たちの声だけが室内中を包んでいる。

#### 数分後

あらかた説明が終わったのであろうか  
隊長達は迷彩服を着た衛生兵らしき人物達を部屋へと呼び寄せ  
ドアから数名の兵士が隊員達に小さなジュラルミンケースを渡し始めた。

「・・・これは本作戦において君達に支給される、対Kウイルス用消滅剤<sup>ワクチン</sup>  
『Daybreak』だ。支給数は各員二つ。  
万が一、感染生物からの二次感染（攻撃を受けて負傷し感染した場合）

これを専用の注射器で投与すれば、体内中のKウイルスを消滅させることが可能だ。ウイルスからの予防効果は24時間続くが、感染度には個人差が出るため

ウイルス感染度の高まる条件である『発熱』や『急激な体温上昇』などの症状が出たらすぐ投与するように」

配られた灰色のジュラルミンケースの中には  
二本の試験官のようなシリンダーが入っていた。

「今まで確認された感染生物などの他説明は全て今配った書類に書いてある。」

今から遂行時までには目を通しておくように」

そう言うと両チームの隊長達はホワイトボードから離れ、大きく息を吸い込むと隊員達に大声で言った。

「では各自チームごとに別れ車両に乗り込め！健闘を祈る！」

隊員達は部屋を出てゆく隊長達を見ると即座に敬礼し  
自分達もそれぞれの書類をジュラルミンケースの中にいれ  
C・B・S・Fで用意した特殊車両へと向かっていった。

PM 6時42分 ロストレギオン（旧S県）付近トンネル  
専用車両に乗り込んだ隊員達は、自分達の火器を確認しながら  
一時間ほど車両に揺られると、大きなトンネルの前で車両は停車す  
る。

窓から見えるトンネルの内部にはチタン製の壁がいくつもあり  
なんびとをも通さない、重厚な空間を作り上げている。  
外を見ると天候はさらに悪くなり、夜の闇と共に黒く重苦しい雲が  
隊員達の不安を煽る。

「まったく嫌な雲行きだぜ・・・」

雲行きを見ていたフィクシーが服の胸ポケットを開け  
隠し持っていた一本のタバコに火を灯す。

トンネルの内部へ入ったら喫煙は出来ないから、しばしの別れを惜  
しむように

大切に、それでいて寂しそうに吸う。

「嵐の前の静けさ、そんな感じかしら」

タバコを吸っていたフィクシーの横で、ケリーが言う。

専用の特種戦闘服を着込んだ彼女は、マスク兼フルフェイスメットを  
首の後ろに垂らすと、金色にたなびく髪を一度まとめ始めた。

戦闘服を着込んでいてもわかる、相変わらず優れた

そのプロポーシオンは、他の男性隊員達の目を引く。

「相変わらず綺麗ですね」ケリーさん。あー私もそんな体ほしいな  
ー

後ろでデザートイーグルのマガジンを念入りに見ていたキミコが  
髪をかきあげるケリーの抜群のプロポーシオンを見て、

自分には無いものが多くあることを実感し、ケリーを羨望のまなざ  
しで

見ると同時に少し落ち込む。

「…戦いに魅力などいらぬ。必要なのは体力と覚悟だ…」  
戦闘服に着替え、特注のタングステン・カーバイト製コンバットナイフを

鍛錬に眺めているパイが話していた二人に呟くように言った。  
ギリリと鈍い光を放つ銀色のナイフは、美しい銀髪を持つ  
パイの顔を映し出す。

氷のような瞳と表情を持つパイは、不安がる隊員達を他所に  
いつもと変わらない無表情を貫いていた。

「たしかにね。でももつと必要なものがあるわよ？」  
その言葉が少し気に入らなかつたのか、ケリーがパイに目をやり  
納得するような落ち着いた口ぶりだが、少し高めの  
まるで怒気を含んだような声でパイに言い放つ。

「・・・言ってみる」  
パイはナイフを見つめるのを一旦やめ  
氷のような瞳でケリーを睨む。  
彼女のプライドである『戦闘の哲学』を否定するものは  
何人たりとも許す事ができないといった表情だ。

「それはチームワークよ。一人の覚悟や体力が勝っていても、チー  
ムがバラバラだったら奴らとの戦闘で生き残れる可能性は低いわ。  
お互いの信頼が全てなのよ」  
ケリーが淡々と、それでいてしっかりとパイのほうを見つめて話す。

「いかにも資本主義論者が言いそうな、甘っちょろい考え方だな。言っておくが、私にとってチームなど一つの活動場所ではない。安易な団結など無意味だ。お前たちはただの人殺しの出来る人間だ。鉄の結束で守られた『仲間』とは違う」

パイは、フンッと鼻で笑うと再びナイフを手に取り自分のナイフケースにしまうと、ジュラルミンケースを戦闘服のフックにつけ

そのまま、座席につきトンネルのほうを見始めた。

「今から一緒に戦おうつてのに、それはないんじゃないかしらね」

「まあまあ、落ち着いてくださいよケリーさん」

怒気を含んだケリーの口調が、ますます声高になる。

表情さえ変えていなかったが、ケリーの声からは怒りがヒシヒシと伝わってきていた。

なだめる貴美子の声も、少し必死だ。

「ひえー怖いねえオンナの戦いつて奴は。オンナのあんたはどう思うよ？今の聞いてさ」

会話を聞いていたフィクシーが、少しあきれた表情を浮かべ、暗い顔をして銃を見つめていた綾香に軽く話しかける。

「私は・・・別に・・・」

「あんたはいつもそんな答えだねえ。別にあんたが嫌いなわけじゃ

ないんだが。何を考えてるかわからないのが魅力の一つって感じがさ、ミステリアスな感じだけど俺にはその性格はむかねえな。少しは明るくしてみたらどうだい？」

素っ気無く返す綾香に、いつもより少し忠告じみた発言をするフィクシー。

しかし彼は知らなかったのだ、一年前に平凡な人間の彼女に起きた恐ろしい悪夢の実態を。

「・・・アナタには・・・わからないわ・・・」

拳銃を戦闘服のホルスターにしまうと、深く息を吸い込んで呟く綾香。

一年前の事を思い出すといつも胸が締め付けられるように痛むのだ。最愛の人を失った悲しみは、失った人しかわからない。

そう言いたげな表情だった。

「そうかい。まあ何があつたか知らないけど、損な性格だぜえ？もつと明るく生きなきゃよ・・・」  
フィクシーがそういうと停車していた特殊車両のエンジンが切れる。どうやら作戦開始の時刻が迫ってきているらしい。

ガチャッ！

「さて、そろそろお喋りは終わりだ。この先には人間がまだ体験した事も無い地獄が待っている、覚悟しろよ！」

戦闘服に着替え、車両の前座席に座っていたレンが大声を上げる。  
外を見ると、いつの間にかトンネルを塞いでいた  
重厚なチタン製の壁は取り払われ、内部へと続く道が見えている。

「地獄への片道切符ってかい？ブラックジョークが過ぎるぜ・・・」

フィクシーの声を皮切りに特殊車両から降りる隊員達。

ポツ・・・ポツポツ・・・

空からはパラパラと雨が降り出していた。

## シナリオ【追憶】 - 4

P M 7 時 0 6 分    ロストレギオン境トンネル - 地下螺旋階段 -

トンネルの内部へと入る、肩にC・B・S・Fと書かれた戦闘服の集団。

腕には特別な繊維で出来た黒く通気性の悪そうな軍用手袋。腰にはジュラルミンケース、頭には特殊なケーブルと空気中の細菌を遮断するマスクがついたフルフェイスメット。

近場で見るとトンネルの内部は人工的なライトが永延と設置されており

暗いトンネルの中とは思えないほどの光で満たされている。

外界を威圧するその装いの集団はトンネル内部へと進むと地下へと続く硬そうな金属で出来た階段を発見する。

それが何であるか、知るものは少なかった。

今は作戦目的を達成するために、先へ進むしか無かったのだ。

カンツカンツカンツカンツ…！

小気味いい金属とブーツが当たる音がトンネル中に響く。

同時にシャツシャツとすれる様な音がし、その音は隊員達の耳にも入ってくる。

腰にさげられたジュラルミンケースが、歩くごとに戦闘服と擦れ  
ているのだ。

カンツカンツカンツカンツ！

ヘルメット越しから見える、不安と決意に彩られた隊員達の目には  
未だ地下へと続く階段が見えていた。

「・・・どこまで続いているのかしらね」

ケリーが思わず歩きながら口を開く。

階段の先のほうはまだ見えない。

もう数10mは下ったような気がしたが階段はまだ続いている。  
いったい何処まで続いているのか、ケリーには見当もつかない。

「これ以上息苦しいのはゴメンだぜ、まったく早くついて欲しいよ」  
後ろに居たフィクシーがケリーの声を聞いたのか声を出す。

階段の螺旋状に降りてゆく構造が、彼の嫌悪の琴線に少し触れたのか  
元特殊部隊らしからぬ、だが彼らしい発言をする。

「この先にはやっぱり。いるのかしら・・・奴らが」  
貴美子が暗い表情で口を開く。

一年前の事件を思い出しているのだろうか  
フィクシーとは正反対の表情を浮かべる。

「くだらん。この先に何かあるかと任務を遂行するだけだ」  
後方でパイの音がする。

この先の見えない階段に不安を覚える隊員すらいるというのに  
彼女はいつもどおりの氷のような無表情だ。

「少し口を慎め、作戦行動中だぞ」

最先端で階段を下りていたDチーム隊長のレンが  
低い声で全員に聞こえるように響かせる。

「この先に何かがあるか、知っても君達は不安がるだけだ」  
レンは素っ気無くそう言うと、足早に階段を降りてゆく。

カンッカンッカンッ！

「……（抜け出せない本当の地獄ね。この先にあるものは）」  
隊長の後ろで綾香がチームの人間達の声聞きながら  
ただ階段の先のほうを見つめ、まるで何も聞かなかったように  
速度を緩めることなく階段を下りてゆく。

無骨で重厚な黒い戦闘服とそれに取り付けられた装備が  
チーム隊員達の肌や目を包み、トンネルから階段に巡らされたライ  
トの光を  
最小限に遮っている。

階段を下りながら、隊員達のトンネルを通して地上に聞こえる足音は、しだいに小さくなっていった。

PM7時19分   ロストレギオン境トンネル   - 地下鉄道 -

永延と続くかと思えた地下螺旋階段の先から光が見える。灰色のコンクリートに包まれた大きなスペース。白線やライト、電光掲示板まで引かれた大きなプラットフォームそこには、二車線に分かれた深い溝があり、そこには列車が一つ停車していた。

どうやら、ここが進入経路の一つ。地下鉄道らしい。

地下鉄道には白い全身防護服をつけた特殊衛生兵らしき人間が何人かいた。

シューシューシューツ

ホームに止まった三両編成の一台の列車が、機関に入った熱を放出するために空気を発する。

「汚染空気を排出します。下がってください」

白い防護服をかぶった衛生兵がダクトに居たDチームの面々を

手招きで誘導すると、ダクトからグオンと言っ音と共に  
凄い力で地上へと空気が吸引されてゆく。

グオオオン！グオングオン！

汚染された空気が地上に向けて、ダクトから排出されていく。  
地上がトンネルであることもあり、どうやら空気清浄環境が悪く  
頻繁に空気の入れ替えを行わないといけないようだ。

「鉄道到着時刻まで、あと20分か・・・。」  
ホームに設置された電光掲示板が刻むデジタル時計に目をやるレン。  
どうやら予定されていた時間より早くついてしまったのか  
後ろに立っている隊員達を見て、少し考える表情をした。

「我々Aチームは作戦進行通り先行する。ドンパチはあっちでな」  
大柄の戦闘服を着た男が、レンの前に現れ敬礼する。  
どうやら今来ている列車で、都市部へと先行するAチームの隊長の  
ようだ。  
すでにホームに来ていた列車には、Aチームの隊員達らしき  
人達が乗り込んでいる。

「無線連絡は225、35チャンネルで行うぞ。お前こそ、ぬかり  
なくな」

レンはAチームの隊長にそう言うと敬礼をする。  
彼には珍しく任務とは違った、妙に馴れ馴れしく砕けた挨拶だった。

「定期連絡は10分後。忘れるなよミハイロフ」  
そういうとAチームの隊長は列車に乗り込むと  
列車は大きな音をたてて線路を走り始めた。

…ウウウン…カタンツカタンツ…

「隊長、随分と親しげでしたが？」

貴美子がそれまでのレンの動向を見て  
少しおかしく感じて質問する。

C・B・S・Fでも堅物と呼ばれた隊長にしては、  
随分と表情と声のトーンが明るい。

「あいつは『ただの戦友』だ。こんな職業をやっているれば良くある  
『腐れ縁』という奴だ」

レンは、部下に見られていたという、  
気恥ずかしくなりそうな気持ちを抑え、表情を再び硬くした。

「寡黙な隊長にしては随分と喋るじゃないですか、そんなに大事な  
友達なんですか？」

貴美子が再び突っ込んで質問する。

この緊張感の中、まるでそれを感じさせないような明るい表情を浮  
かべ

自分のチームの隊長であるレンに対しても、引く事を知らない。  
この素直さが、彼女のいいところである。

「ただの戦友だと言っているだろ。それ以上でも無ければそれ以下でもない」

「そんなこといって実はー」

まるで駄々をこねる子供のように、その質問に食い下がる貴美子。  
レンは貴美子の質問に少し困ったような表情を浮かべる。

彼女なりの緊張感のほぐし方なのだろうか  
プラットフォーム内に貴美子の明るい声が響く。

「まったく遠足じゃないのよ貴美子。もう少し緊張して頂戴よ」  
そんな光景を見ていたケリーが言う。  
だが彼女もいつの間にか緊張の表情から解かれ  
少しだが笑顔を浮かべている。

「・・・ああいうのが、日本式なのか・・・？」

「・・・いえ、彼女は・・・特別よ」

パイは作戦遂行中だと言うのに、こんなにも明るく振舞う  
貴美子を見て少し不審に思い、潰れるような低い声で  
近くに居た貴美子と同じ日本人である綾香に質問した。  
綾香も少し困ったような感じで質問を返す。

「やれやれ、電車はまだですかねー、っと」  
そんな会話を覗いていたフィクシーはボソッとつぶやく。

駅構内は衛生兵の足音と会話に包まれた。

- 10分後 -

ブーブーブー！ブーブー！

「ん・・・提示連絡の時間か・・・」  
レンの持っていた携帯連絡機から電子音がする。

しかし、その機器から聞こえてくる声は  
彼らを再び緊張と不安へと突き落とした。

「そっちに、化け物が向かっている・・・ぞー！気を・・・つける！」

次第に大きくなるその声は、  
Dチーム全員の不安と緊張を呼び覚ますには十分だった。

「・・・ッ」

その時綾香は、思い出していた。  
あの永延に続く階段を下りていた時の緊張感を。

隊員達は下り続けていたのだ。『本当の地獄』への階段を。

## シナリオ【追憶】 - 5

P M 7 時 3 2 分    ロストレギオン地下鉄道 - プラットフォーム -

地下鉄ホーム中に広がる無線の声。

談笑していた隊員達を襲う、不吉な音。

鳴り止まぬサイレンと、点灯し辺りを赤く染める回転ランプ。

背中にヒヤリと感じる氷が流れ落ちるような感覚。

そして悪夢は現実へ、絶望へのカウントダウンは始まった。

「全員戦闘準備！奴らが来るぞ！」

特殊戦闘服の胸ポケットから自動拳銃マカロフを取り出すレン。

マカロフのセーフティを解除しながら

隊員達を見回し、大声で指示する。

その表情に曇りはない。彼の眼は鋭く、一部の隙も感じさせないでいる。

「まったく！目的地に着くまでに一仕事とはね！」

フィクシーが愛銃FNファイブセブンを取り出すと線路が続いている

トンネルの暗がりに向けて銃を構え、射撃体勢に入る。

「さあ来なさい！どんな化け物でも片っ端から片付けてやるわ！」

「あ・・・あの化け物なのね・・・」

シグザウアーP226を構え、周りを警戒し始めるケリー。

後ろを見るとレンの近くにいた貴美子が少し緊張し、おぼつかない手で

デザートイーグルを取り出すのが見える。

無理もないことだろう。

訓練を受けたとはいえ、一年前に起きた事件の恐怖を直視し体感してきたのだ。

未だに鮮明に残る記憶を呼び覚まし、彼女は一年前の焦燥感と恐怖に駆られたのだ。

「…チツ、コイツだけで戦うハメになるとはな」

手に持ったトカレフを見ながらジリジリと前へ進み始めるパイ。

セーフティレバーの無い銃は無骨なフォルムを前面に押し出したがそれでもパイは不安そうだった。

なぜなら彼女達の選んだ突撃銃や大型火器は

全て次にやってくる列車に積んである事を思い出したからだ。

どこか苛立ちを覚えたパイだったが、今は手持ちの銃器で応戦するしかない。

「K I N G！…指示をください」

綾香が緊張の最中、静かに声を上げる。

K I N G。Dチームだけで使われる隊員達一人一人に与えられたコードネームだ。

コードネームK I N G（王）は隊長であるレンを指している。

手に持ったベレッタM8000クーガーを暗闇の方向へ構えながら

指示を仰ぐ彼女の口元は、緊急事態だと言うのに笑みを浮かべ

その眼は、どこか狂気に満ちている。

彼女の表情。それはまるで『化け物を待っていたか』のようだ。

「QUEEN（綾香）とACEバイは右に注意しろ！化け物が見えた瞬間鉛弾をくれてやれ！JACKフィクシーは私と共に左の線路を警戒する！ANKLEケリは後方で撃ちもらした奴を援護！CLOWN（貴美子）も一緒にいけ！全員無駄撃ちは抑えろよ！」  
手を左右に動かしながら、戦闘服ごしでも聞こえる  
レンの激しく大きな確な指示の音がホームに響き渡る。

「ついて来い・・・前進するぞ！」

「・・・やってやる・・・！」  
レンの指示が聞こえると、パイがジリジリと進めていた歩幅を増やし綾香に手招きで来るように伝える。  
張り詰めた表情の綾香は、その歩を早め  
一歩ずつ線路の見える右の車線へと歩き出した。

「列車がここに来るまで守りきるぞ！いいな！」  
再びレンが声を張り上げ、全員に聞こえるように指示をだす。  
自分達の乗る列車の来る時間が迫っているのだ。  
化け物を乗せるわけにはいかない。

カチャツカチャカチャツ！

「線路に下りて我々が化け物をけん制します」  
ホームの左側へと進むレンとフィクシーを尻目に  
その後ろで声がする。  
さっきまで空気清浄をしていた白い衛生兵らしき隊員が5、6人  
短機関銃MP5を構えていた。  
どうやらDチームの露払いをしてくれるようだ。

「すまない！」

「いえ、コレも責務ですから」  
レンの声を聞くと白い衛生兵たちは線路へとタラップを伝って降り  
MP5Kを構え、線路の続く暗いトンネルの中へと前進してゆく。

カタンツカタンカタンカタン・・・

ホームには暗いトンネルへと入ってゆく白い衛生兵達の靴音だけが  
響いた。

P M 7 時 3 8 分      ロストレギオン地下鉄道 - 線路 -

線路の続くトンネル状の内部へと白い衛生兵達が入ると

そこは予想以上に暗く。数本の蛍光灯が照らすだけであった。

トンネル状の線路は少ない蛍光灯に照らされながら

50mほどで見えなくなっている。

そこから先の線路はカーブになっていて、ますます良く見えない。

「前進する！セーフティ解除！！」

白い衛生兵5、6人の中でもリーダー格の男が

手招きで全員を前へ進める。

ふぞろいに一直線に並んだ隊列が、暗がりの中へと消えてゆく。

・・・キーン！・・・キーン！チ・・・ツ・・・ガ・・・ガッ

「・・・何か音が聞こえないか？」

奇怪な金属と金属のぶつかるような音が聞こえた衛生兵の一人が声をあげる。

「・・・？俺は聞こえなかったが」

後ろにいる一人がMP5についたフラッシュライトを縦横に振り回す。

辺りには何も無い。無機質なコンクリート製の黒ずんだ壁が続いているだけだ。

・・・キュルル・・・キュルル・・・！

「・・・まただ?!まさか・・・全員正面の壁を照らせ!」  
衛生兵の一人が声をあげると  
全員がMP5についたフラッシュライトを  
近場の壁や正面のカーブのところに照らす!

キ・・・ウ!キュキュルルキュルルッ!!!

フラッシュライトに照らされたもの。それは...

暗闇の中でうごめく赤く獰猛な眼や長い爪、キラリと鈍い色で光る

歯をつけた四足で歩く巨大なネズミの化け物たちだった！

「う、撃てーッ！！」

とっさに姿を見て恐怖した衛生兵が大声を上げて巨大なネズミの化け物に向けて

短機関銃MP5をフルオートで射撃する。

ドドドドドッ！ドドドドドッ！

キュルル！キュ・・・キュルルウウウウ！！

トンネル内に銃の爆音と化け物の鳴き声が響く！

しかしネズミの化け物の動きは恐ろしく早く、衛生兵が放った弾の殆どが

ネズミの体をかすることなく命中せずに終わった。

「く、くそ！ど、どこへいった！」

フラッシュライトで前方の壁を照らす衛生兵達だったが  
素早いネズミの化け物の動きは捉えられず

弾丸が壁を跳弾する音だけがトンネル中に響いた！

しだいに距離を詰められる衛生兵達。

すでにその距離は10mをきっていた！

キュルル！キュルルルツ！！

「う、うわあああああああ！！」

急に後ろの兵士が絶叫をあげ、暗闇に吸い込まれるように姿を消す。

プシャーッ！

「どつしたんだ！うわっ！！」

横にいた兵士が振り向くと、まるでシャワーのような血飛沫が  
白い衛生兵用の服と透明なフェイスマスクを赤く染めていた。

ドサッ…！！

となりの兵士は一匹のネズミの化け物に  
顔から肩にかけて丸ごと抉るようにかじられていたのだ。

後に残った無残な残骸は、バランスを失いその場に崩れた。

「く、くそ！野郎・・・ぐわああああ！！！」

憎しみと恐怖におびえた衛生兵は、MP5を構えるや否や  
後ろに迫っていたネズミの化け物の長くて獯猛な爪が  
衛生兵の胴体を貫いていた。

ズガガ！ドドドドッ！！

「ち、ちくしょう弾切れか・・・ちくしょ・・・おあッ！」

「今やってや・・・ギャアアアア！」

必死に抵抗していた二人の衛生兵も

後方から迫っていたネズミの化け物の体当たりをくらい  
近場の壁にたたきつけられて力なくその場に沈む！

プシャー！！ガチガチッ！

キュル・・・！キュイーツ！

まるで歓喜の声をあげるように衛生兵の血飛沫を全身に浴びて鳴き声をあげるネズミの化け物。

その爪や口には、むき出しの衛生兵達の内臓物が飛び出していた。

「そ、そんな・・・た、たすけてくれーッ！」

最後に残っていた衛生兵がMP5をその場において振り返り逃げ出す！

だがネズミは躊躇することなく、まるで残忍な追跡者のように逃げる衛生兵にトンネルの壁から襲い掛かった！

「ギヤアアアア！！」

グチャ・・・クチャッ・・・グチャッグチャ！！

飢えたハイエナのように服を噛みちぎり、爪で切り裂き

肉を食い破り、それぞれの仕留めた『エサ』の捕食を始める化け物たち。

「・・・こ、こんな・・・ありがよ・・・」

その場にいる白い服を着た最後の衛生兵は、

返り血で服が真っ赤になると同時に悪夢のような光景を見ていた。

キュイーツ！・・・キュイーツ！

ネズミは早々にそれぞれの食事を終えると、

飢えた瞳で、また獲物を探し始め

最後に残っていた一匹の『エサ』を発見し、歓喜の声をあげた。

「うわあああああああああー！！」

ネズミの化け物たちの食事で沸きあがる、  
歓喜の奇声と衛生兵の悲鳴が、トンネル中に響いた。

## シナリオ【追憶】 - 6

P M 7 時 4 3 分      ロストレギオン地下鉄道 - プラットフォーム -

「今の悲鳴は・・・？くそッ・・・やられたか」

薄暗い線路のほうから、悲鳴と共に聞こえてくる奇怪な鳴き声をレンは耳にし、状況を察した。

ギリギリと何かが擦れるような音がする…

手に握られた自動拳銃マカロフは、レン自身も気づかないうちにいつも以上の力で握られていた。

…ユルルウ…キユウウルウウ…

ガリガリ・・・ガリガリ・・・！！！！

「KING<sup>レン</sup>！音が近づいて来ますぜッ！」

FNファイブセブンを構えてフィクシーが言う。

壁の削れるような音は、非常事態には慣れていたはずのフィクシーですら

焦りを感じさせた。化け物の咆哮に背中がヒヤリと冷たさを感じたのだ。

「全員、奴らの弱点は脳髓周辺だ。それを重点的に狙え。無駄弾を撃つなんてへマをするなよ！」

そうレンが言うと、壁伝いに奴らは現れた。

キューイツ！！キュルルルルツ！！

三匹の血という赤い衣を纏ったネズミの化け物が

灰色の壁を拘束で這いずるような形で暗闇から大きな姿をあらわしたのだ！

一匹は狂ったように雄たけびをあげ、もう一匹は赤い眼を光らし未だ満たされない空腹をあらわにしている。

それぞれの化け物は巨大な歯の生えた口に、ぶらんと何か物を啜えている。

先ほどまで生きていた衛生兵の体の一部だ。

「相変わらず登場が好印象じゃないわねッ!？」

「許さないわ・・・人間をなんだと思ってるの!」

後方で待機していたケリーと貴美子だったが

化け物の姿がくつきりと見えた瞬間、大声を上げるケリー。

その化け物の陰鬱で人間の恐怖を挑発するような

おぞましい姿は、懐かしいという言葉じゃ言い表せないほど一年前をよりくつきりと思い出させるのだ。

「このおおおおおお!」

貴美子が化け物に向けて瞬時にデザートイーグルを向ける。

その無骨なフォーム、拳銃では想像できないほどの重量感。  
通称『ハンドキャノン』の名前をつけられた銃のトリガーに手をか  
け、

狙いをすますと、内部に装填された44マグナム弾が  
化け物の群れ目掛けて発射される。

カチャツ・・・ドオオン！ドオオン！

キューーッ！！キューーッ！キュルル！

マグナム弾は一匹の化け物の胸部と頭部に当たると

化け物はその反動で後ろへ吹っ飛び、奇妙な断末魔をあげた！  
近くに居たほかの二匹は、銃の音を聞くなり  
いきなり素早い動きで壁を伝い始め、視界から消えてゆく。

「ヒューー！やるじゃん！へっへっ・・・俺も徐々に燃えてきたぜ！」

「無駄口を叩くな！消えた二匹が来るぞ！」

鮮やかな二連射を決めた貴美子の銃の腕に開心したフィクシーの軽  
口を

レンの怒号がかき消す。

レンの言うとおり、まだ化け物は二匹残っている。

「あれが・・・あの化け物が・・・Kウイルスの成れの果てか」

「気をつけて、奴ら早いわ・・・来るわよ!」  
その異型の化け物の素早さを目の当たりにしたパイと綾香は  
慌てる事も無く銃を構え、見えなくなつたネズミの化け物を確実に  
捕らえられる  
射程範囲にギリギリと歩を進め、間合いを詰め始めた。

キュルルルルツ！キュウーツ！！！

大きなネズミの化け物の一匹が恐怖の鳴き声をあげると、  
素早く壁を伝いながら暗闇の線路の逆方向の壁から、  
反対側の線路を警戒していたフィクシーに襲い掛かってきた。

ガキイイイイン！ガキイイイイン！

化け物が飛び跳ねると、壁の一部が足の爪と脚力によって削られ  
そこには大きなくぼみが出来た。

ドオン！ドオン！

「うおっ！？こっちからかよ!」  
まったくの死角からの攻撃に驚くフィクシーは  
その場で体勢をくるつと変えると、体当たりをしてくる化け物を  
避けられないと直感的に思ったのか、その場で思いつき横っ飛び  
しながら

ファイブセブンのトリガーを瞬時に引き、化け物に向けて銃弾を二発発射する！

・・・キューー！・・・キューーッ！

銃弾は化け物の左足と腹を貫通すると

化け物は足を撃たれたことで、バランスを崩し

ホームのど真ん中に崩れるように倒れ、悲鳴を上げた。

しばらくするとネズミの化け物の動きが止まる。

赤緑色に変色した血がホーム中に広がる。

まだピクピクと小刻みに動いているが、しとめたのであろうか？

「へへっびびらせやがって。意外と楽勝じゃんかよ」

その場で体勢を整えると、動けなくなった化け物を見て

余裕の口調と笑みを浮かべるフィクシー。

しかし、その後ろからレンの声がした。

「フィクシー避ける！」

「なんだッ！？うおッ！！」

ブウン！ガアアアン！！

さっきまでその場でうずくまっていたネズミの化け物の長い爪が

フィクシーのフルフェイスメットを掠る！  
足の傷は、すでに塞がっており、獰猛な赤い眼で  
フィクシーのほうをギラギラとした歯を光らせながら見ている。

「死んだフリなんて悪趣味なんだよ！この野郎ッ！」

ドオンドオン！

化け物の胸部目掛けて弾丸を発射するフィクシーだったが  
ネズミの化け物は素早い動きでその場でジャンプし  
天井に張り付くと再び壁伝いに綾香たちのいる方に走っていった。

「QUEEN！ACE！そっちにいったぞ！」  
化け物を眼でおいながら倒れたフィクシーの方へ行くレン。  
その表情にフィクシーのような余裕はない。  
ひたすら緊張感だけが今の彼を動かしている。

「す、すまねえなKING。助かったぜ」

「油断するんじゃない馬鹿者が！Kウイルスの脅威的な再生能力を  
知らんわけでもあるまいだろう！」  
怒号をあげるレンを尻目にはつの悪そうな顔を浮かべるフィクシー  
だったか

レンに体を起こされると、今までの軽い表情を一変させ  
化け物を全速力で追いかけてゆく！

だが、化け物はケリーと貴美子にも近づいていた。

キュイー！キュルルルルル！

化け物がフィクシーを襲った時のように、また死角から現れ  
貴美子たちの襲い掛かった！

「キヤアッ！」

「貴美子！ふせて頂戴ッ！」

カチャ・・・ドオンドオンドオン！

キュオオオーッ！キュウウウー！

襲い掛かる化け物の長く鋭利な爪が戦闘服の肩をかすめる！

声を上げる貴美子であったが、ケリーがとっさに伏せるように言い  
放ち

すんでのところで避けることに成功する貴美子。

ケリーは、それを見るなり不安定な姿勢からシグザウアーP226の  
トリガーを引き、逃げる化け物めがけて素早く三連射すると

弾丸は化け物の背中に当たったものの、致命傷にはならなかったら  
しく

化け物はホームの壁に再び張り付くと、その場を立ち去る！

「チツ！仕留めそこなつたわ！何処に行ったの化け物はッ！？」

「綾香の方へいったわ！」

ケリーは貴美子とアイコンタクトをとると

軽くうなずき、綾香たちのいるホームの先端へと走り出した。

その時、綾香とパイは一匹の化け物と戦っていた。

キュイイイイイ！！キユオオオオ！！

ドオン！ドオン！

「早い。捕らえられない速度じゃない・・・！」

「・・・勝てない相手じゃないわ」

パイのトカレフから放たれた弾丸が化け物を捕らえ、

何発かの銃弾をうけると、また視界から消える化け物。

螺旋階段の壁際には隠れるパイと綾香は、化け物の速度を確認すると、少し笑うような表情を浮かべる。

「私が援護するわ、前に出て！」

「後ろにも気をつけろ、さっきから奴らは死角を狙ってきているから・・・な！」

冷静な口調で綾香は、パイに前進するように伝えようと再び視界に出てきたネズミの化け物目掛けて銃を構えベレッタM800クーガーのトリガーを引く。

ドオン！ドンドンドンドンッ！

キュイイイイイ！！キュルルルウウウ！！

五発の弾が一齐に化け物の体を貫く！  
赤緑の血が壁や床に汚らしく散らばってゆく！

「第& amp; #27807；鼠！死好！（消えるドブネズミがッ  
！）」

弾丸が命中すると共にパイが前進し、化け物目掛けてトカレフの弾倉に  
残った弾丸を全て化け物に向けて放つ！

ドオンドオンドンドンッ！！

キュ・・・キュイーツ・・・！！！！！！

トカレフの弾丸は化け物の頭部を貫き、文字通り『蜂の巣』にした。化け物は絶叫をあげるとその場に赤緑色の血液を撒き散らし、絶命する。

「人&amp;#23545;&#27807;鼠款待&amp;#36807;分。干酪也吃…(ドブネズミに人間様はご馳走すぎる。チーズでもかじってな)」  
パイはそう言うと、後ろに立っていた綾香に手を上げ、人間の勝利を伝える。

「ッ!？」

しかし、パイは見てしまった。

綾香の後ろの壁にいる、もう一匹の化け物の姿を。

キュイイイイツ!!!!

「避けるQUEENッ!」

パイがそう言った瞬間、ネズミの化け物は壁を思いっきり蹴り上げ綾香の背後に目掛けて体当たりをしかけてきた!

ドゴオオオツ！！！

鈍い音がプラットフォーム壁全体を響かせる。

それと同時に巨大なネズミの化け物の体がホームへと横たわる。

その横に立っていた綾香がまるで化け物の体当たりとの  
タイミングを合わせるかのように強化ブーツを履いた足で  
強烈な後ろ回し蹴りを化け物目がけて放っていたのだった。

「・・・甘いわよ、一年前のひ弱な私じゃないわ」

ドオン！ドオン！

そう言い放つと、その場に倒れていたネズミの化け物の頭部めがけて  
ためらいも無く銃を発射した。

・・・キュウウ・・・キュウウウウウ！

断末魔をあげると共に赤緑色の脳漿を飛び散らせる化け物を尻目に綾香の表情は笑っていた。

一年前、彼女は復讐を誓ったのだ。

最愛の人を奪ったウイルスという化け物への追憶の復讐を。もう過去へは戻れない。その思いだけが彼女を包んでいた。

(…道を踏み外してしまったとは思わない。私が選んだ道なのだから)

再び静寂が地下鉄道内を包んだ。

シナリオ【追憶】 終了

シナリオ【贖罪】 - 1

P M 7時51分   ロストレギオン地下鉄道 - プラットフォーム -

薄暗い線路から出てきた『悪夢の断片』を倒した  
Dチームの面々は、その後ホームへとやってきた  
C・B・S・F専用の二両特殊鉄道へと、  
それぞれの気持ちを抱えながら乗り込んでいった。

しかし、Dチームの表情は崩れることなく張り詰めたままであった。

初めての『奴ら』との戦闘。

予想もしなかった化け物との遭遇。

先行したAチームの安否。

これから出会うであろう悲惨な現状や、そこに巢食う化け物たちへの不安。

グウン！・・・グオングオン・・・！！

全てを乗せて車両は大きな駆動音を立てて走り出した。

P M 7時55分   ロストレギオン地下鉄道 - 特殊車両内 -

車両の内部は、重厚なチタンの板で何枚も覆われ  
何人たりとも近寄せない、圧迫感をかもし出している。  
列車窓は、強化された金属製の枠に囲われ  
クリアで強固な強化ガラスが、枠にガツチリとはめ込まれている。  
化け物対策なのであるうか？前の運転席で黙々と運転をこなしている  
運転手の隣には、ショットガンであろう二挺の銃器が並んでいる。

「随分物騒な物持ちだな。まるで『ココ』で化け物との遭遇が予見  
されてたみたいじゃないか」  
フィクシーが寡黙な運転手の横においてある銃器を見て  
皮肉めいた一言をつぶやく。

「少し黙らないか。危うく死ぬところだったんだぞ」  
レンは軽口を叩くフィクシーに、釘を刺すように言うと  
車内を眼を凝らし、見回してみる。

車内には、細長い小型のプラスチック製のコンテナが数十個と、  
おそらく重火器類が入っているであろう木製のコンテナが4つあり。  
それぞれのコンテナには、白いテープが貼られ  
無造作に置かれている。

「・・・銃器か」

細長い小型コンテナを見ていたパイがつぶやく。  
白いテープには、自分達が先日C・B・S・Fにて発注した  
自らの気に入りの銃器の名前が少し手馴れた感じの黒色の筆跡で  
刻んであったのだった。

「勝手に取って自分で組み立てるってコトね。まったくわかりやすく涙が出るわ」

お得意の皮肉を言いながらケリーは自分の愛銃器

半自動装填散弾銃『ベネリM4 スーパー90』の入った

小型のプラスチックコンテナを開け、手馴れた具合で様々な機材を取り付けていく。

「幸先の悪いスタートですね、ケリーさん」

先ほど化け物に襲われたことを思いだしながらケリーの方を向き自分の愛銃器『FN P90』をプラスチックコンテナから取り出し戦闘準備を始める貴美子。

その落ち着いた口調には、さっきまでの恐怖心は無かった。

カシヤツ。

「そうね幸先は・・・相変わらず最悪だわ。運が無いのかしら私」  
ベネリM4スーパーに周辺機材をつけながら

手を動かす事を辞めずに貴美子に答えるケリー。

その手馴れた動きや仕草は、流石元アメリカのエアージェントと  
いったところだろうか。素早く機材を組み立てながら  
その口調は衰える事はない。

「くだらない悩みだな、なぜもつと現実的に物を捕らえられんだ・

・・・

「くだらないとは何よ、運は必要だわ。どんなときもね」

愛銃『タボール AR21』を組み立てながらケリーを挑発するよ  
うな

言葉を吐くパイに対して、ケリーは相変わらず好印象では無い  
このチームメンバーに対してムツと表情を固めながらも、  
それを我慢し、少しやんわりとした口調で言葉を返す。

「運が必要？・・・お前、さっき見なかったのか。あの化け物の姿  
を」

「見たわ・・・だから何よ」

さらにケリーを挑発するかのように、ケリーの言葉尻を捕らえ  
声を低く、それでいて荒く吐き出すようにパイは言った。

「これから、あんな化け物がウジャウジャ出てくる所に行こうって  
いうのに

運が無いだの、何だのと軟弱な考え方で生き残れると思うか？それ  
とも強運の持ち主なら化け物に囲まれても生き残れるのかな。そん  
な笑い話に付き合えるほど私は甘くないぞ」

「ふんっ、なによ。私はただ世間話をしてただけのこと。なのにア  
ナタったら、そんなことに揚げ足をとっちゃって。アナタ相当の変  
人ね。それに、アナタみたいな考え方や息が詰まるのよ。そのう  
ち詰まりすぎて窒息死しちゃうわね」

まるで挑発を挑発で返すように、ケリーの怒気を含んだ口調が車内中を響かせる。パイは言葉を聞き終える前にフツと卑下するような笑いを浮かべ、怒気を隠しきれていないケリーに向かってこう言った。

「運なんて不確定要素を信じるくらいなら、窒息死したほうがマシだね。そんな甘い考え方の奴とチームを組んで、化け物に殺されちゃ窒息死より始末が悪い」

「なんですって・・・ッ！」

思わず大きな声を上げそうになったケリーだが、そこは彼女の気質らしく我慢し、少し息を整えるとパイに向けてこういったのだった。

「今、わかったわ。私の運が無くなったのは、アナタとチームを組んだ時からだってことにね！」

「・・・自分の実力を棚に上げて良くいう！」

「コラッ！二人ともやめないか！」  
けんか腰に会話を続けるパイとケリーを怒声で沈めるレン。二人はお互いにそっぽを向き、再び銃の調整をし始めた。

「まったく、同じチームだと言うのに…あの二人は」

「二人も、もう少しお互いに譲って仲良くなるといいんですけどね」  
レンは二人を眼で追いながら、プラスチックコンテナに入った  
突撃銃『USSR AKM』の調整をはじめた。  
近くに居た貴美子の声に、少し胸をなでおろしたが  
まだケリーとパイの二人の関係には苦悩の時間が続きそうだと思い、  
レンは再び表情を曇らせた。

「頑固だからね・・・あの二人は特に」

フィクシーが二人を見ながら少し苦笑いしているような顔を浮かべ  
プラスチックコンテナに入っていた愛銃の突撃銃

『FN F2000』を調整し始めた。

「あんたはどうだい、QUEENさん？」

「・・・」

フィクシーの声が届いているのか居ないのか

綾香は黙々と銃を調整している。

『シグ SG550』

その流麗な銃のフォルムは車内のライトに反射し、美しさをさらに  
増した。

「おい・・・？QUEENさん？・・・おい！」  
フィクシーが綾香の肩をさするように触ろうとしたときだった。

ガチャッ！！！

「ッ！」

少し驚いたように、調整した銃をいきなりフィクシーの頭目掛けて振り下ろし、まるで射撃体勢さながらの素早い動きで

フィクシーの眉間にシグSG550の銃口を向けた。

綾香の表情は、憎悪と哀しみに震え、まるで敵を睨むような表情であった。

「うおっ！？何の真似だよ！」

綾香が銃を向けた瞬間、緊張感に包まれる車内の中。

まるで凍りついたようにその場に両手をついて体をのけぞるフィクシー。

カチャッ・・・。

「・・・すみません。さっきの戦闘で少し緊張しすぎたみたいです」  
銃を降ろすと、フィクシーに謝罪の会釈をし

そのまま、また銃の調整をはじめめる綾香。

良く見ると綾香の体は、少し震えている。

「な、な、なんだってんだい。まったく！」

フィクシーは少し驚きを隠しきれない感じで綾香から一番離れた位置にプラスチックコンテナごと移動する。恐怖の表情とまではいかないが、その驚いた表情は誰の眼にも明らかだろう。

「どうしたの綾香・・・？ねえ？」

貴美子が慌てて綾香に近寄る。

どうしてそうなったのか。最近の彼女を見ていて変だとは感じていたが。

今の行動を見て、少し不安に思った貴美子は優しく綾香に語り掛ける。

「どうもしないわ・・・ほっといてよ！」

そういつて貴美子を遠のけると、綾香は後部車両へと歩を進めた。まるで誰にも構ってほしくない、そう言いたそうな表情と仕草で。

「どうしたのかな綾香・・・一年前のあのこと・・・気にしているのかなあ」

貴美子がそう言うと、綾香の後姿を見ながら

自分の銃の整備を再び始めた。

先ほどフィクシーに触れたときに見せたどこか寂しげで、怒りに満ちたな綾香の表情。

それは何を意味しているのか、まだ彼女は知らなかった。

PM 8時05分 特殊車両 後部車両

綾香が来た後部車両。

そこには様々な電子機器と決まったりズムで数値を刻んでいるアナログな機材が並んでいた。

どうやら室温や電波状態、時刻を正確に刻むための時計や外との交信状況を記録しておくためのものらしい。

グォングォン・・・カタカタカタ・・・

そこに人が座れそうな固定式の腰掛を発見した綾香はプラスチックコンテナを近場に置くと、いきなりフルフェイスメットを脱いで

黒いフェイスマスクと美しい黒髪をあらわにさせた。

ガタンッ！

「・・・こんなときに・・・なんで思い出すのよ！」  
手の平を思いっきり強化ガラスの窓に当てると、一言大きく呟く。  
そして彼女は、マスクをはいで大きく深呼吸をした。

何かに追われるように切羽詰った表情、汗ばんだ顔面。  
背中にひやりと感じる冷たいもの。

表情から隠せない焦燥感、止め処も無く流れる憎悪と哀しみ。

グオングオン・・・カタカタカタ・・・

大きく響くトンネルの中を走る列車の音、そして  
無機質に流れる電子音と何かを刻む機械の音が無常  
に彼女を包み込む。

彼女は思い出していたのだ。

一年前に平凡で貧弱な自分の人生を変えた、  
最も思い出したくも無いあの『悲劇の悪夢』を。

## シナリオ【贖罪】 - 2

一年前 9月23日 AM5時53分 S県境自衛隊基地

朝もやかかると、へりはそこへ降り立った。

大きな柵の中にポツンポツンと建物や車、そして灰色の滑走路。そこには、戦闘機や戦車が見える。

灰色の滑走路は朝もやのせいで良く見えないが、

へりのライトを当てると正面に二つの光点が出来た。

すると、丸い白線の書かれた場所が見えてくる。

私、夢乃綾香は事件に巻き込まれへりの中にいた。

今にもその場に崩れてしまふんじゃないかと思う私の華奢な体はすでに緊張と疲労のピークを達していて、まるで動こうとしない。昨日と今日は走りっぱなしでクタクタだ。

得体の知れない化け物に追いかけられ、友達を殺され

目の前で仲間が死んでいくのをただ見ていただけ。

私は必死で逃げた。足手まといにならないように懸命に逃げた。

もうダメだと思う瞬間にも幾つか出くわした。

そのたびに鉛のように重くなっていた体を必死に動かして逃げた。

『生きることをあきらめない』なんてカッコイイ言葉じゃなくて

『化け物の餌になって死ぬ事のほうが怖い』って気持ちが勝ったからじゃないかな。

でもおかげであの悪夢のような街から脱出できて、私の体には傷一つなく、無事に助かった。

私の隣には傷を負って倒れている健二。

運転席には、事件中に会った頼れるアメリカ人のケリーさん。

助手席には恵さん。マジメな顔してるけど

悲しげな表情が見え隠れする……。やっぱり飛鳥さんが死んだせいかな。

後部座席には芸能タレントらしいエキゾチックな顔をした貴美子さん。

智弘がいたくお気に入りの人だったけど……。

「さあ、みんな降りて。ここは安全よ。話は少し休んでからしまし  
よう」

「安全か……その言葉、信じられないが。信じるしかないか……」  
助手席に座った恵さんがへりから颯爽と降りると、  
ケリーさんが私達の居る後部座席を見て声をかけてきてくれた。

「綾香さん、降りるわよ？あれ？なにやってんの？」  
貴美子さんが声をかけてきた。

あれ？なんで私震えているんだろう。

・・・そうだ！横で寝ている健二がさつきから意識が無いのよ！

「さつきから健二に意識がないんです、どうしたら・・・」

「医務室へ連れてゆく？ここには、いい医療施設があるわよ」

私は横で寝ている健二の状態をありのままケリーさんに述べた。

するとケリーさんはフンと笑い、指をへりの窓のほうへ差し出し  
柵で覆われた基地内の白色の建物を指差し、そこへ行くように指示  
してくれた。

「・・・う・・・ウウ・・・」

健二は何かうめくように目を少しずつ開く。

どうやら意識は戻ったのかな？

私は安易な考えのまま、健二の体を私の方へゆっくりの起こした。

「大丈夫なの？健二」

健二が息をしているのを確認すると私は

健二を陸地へ降ろそうとへりのサイドドアをあけた。

しかしその時、チラッと健二の肌を見ると  
やけに緑色に変色し、どこかしら腐臭がする。

下水や自衛隊の基地で

あんな大量の化け物の中を駆け巡って、戦っていれば  
嫌悪感を催す腐臭の一つくらいしてもおかしくない  
私は思っていた。

そうだと信じていたのだ。

「・・・ウウウ・・・ウウウ・・・」

健二が口を開きながら、綾香に耳打ちをするように顔を近づける。

「大丈夫なの健二・・・？・・・ねえ健二ったら」

「アアアアアアアアアアア！」

切り裂くような絶叫と共に緑色の化け物へと変化していた健二は  
私の顔面を掛けて襲い掛かってきた！

「・・・危ないッ！」

その時、とっさに助手席から降りていた恵さんが異変を察知し、サイドドアの開いている部分からいきなり飛び込んできて

『健二で在った者』に体当たりを食らわした！

ガンッ！ガシャン！

すると、健二の体は私の顔面を通り過ぎ  
まるで大きな獣のように反対側のサイドドアのガラスに  
その腐り始めている体をだした。

「キヤアアアッ！」

後部座席からすでに降りていた貴美子さんの絶叫が聞こえる。  
その表情は恐怖で歪んでいて、

へりに乗ってからは忘れていたはずの焦燥感漂う  
『あの時の表情』になっていた。

「アアアアアア！！グオアアアア！」

ガシャン！ガシャアアン！

再び咆哮をあげる『健二で在った者』は、サイドドアのガラスを力任せに首と上半身の力だけで、ぶち破ると体当たりをかまして上に乗っていた恵さんを見て少しニンマリと笑みを浮かべるように見えた。

「アアアアアア・・・アアアア!!!」

「早く逃げるツ！早くツ！・・・ぐっ・・・うわアツ！」

『健二で在った者』が恵さんの手の力を押し切って

恵さんの肩に噛み付く。ブシューっと勢いよく流れる赤い血液が私の目に焼きついた。

「め、恵さ・・・ん！」

私は恵さんの体から血が出るのを見てその場にへたり込んでしまった。

恵さんのスーツが真っ赤に染まっていく。

へりの近くには私の情けない声だけが響いた。

「なんでこうなってしまったの！」

運転席を降りてきたケリーが惨状を見て愕然としている。

私のようにその場に崩れる事は無かったが

彼女にもその映像はショックキングだったのだろう

その眼には恐怖と焦燥感が漂っていた。

「ケリーさん……!!……助けて!」

情けなくか細い私の声は、空を裂いた。

一番信頼していた彼氏が化け物になってしまった事実。

そのショックは私には大きすぎて、パニック状態になってしまっている。

でも今だからわかる。事実を認識させないために逃げて誰かにすがりたかったのだ。

カランカランッ!

その時、私の前に一艇のリボルバー式の銃が転がってくる。

「ッ……そいつを……はやく撃て!……お前の手で……こいつを楽にさせるんだ!」

恵が化け物に肩を侵食されながら、健二のポケットから銃を抜き取ったのだ

これは智弘の形見。

そう、地下下水で化け物を捕らえたS&Wだった。

「……け、ケリーさん……何か……助ける手立ては!」

情けなく声を上げケリーさんに助けを求める私。

無様。弱虫。クズ。最低。

およそ自分を卑下する言葉を頭の中で浮かべながら

私はケリーさんに助けを求めた。

でもケリーさんは非情にも私にこう言った。

「無理よ！感染者はもうどうにもならない・・・彼の銃を・・・引きな・・・さい！」

「助けて・・・健二を・・・誰か・・・！」

泣きじゃくる私に、ケリーさんはチツと舌打ちをすると

周辺によってきた兵士たちを手招きで合図して、こっちに来るように指示している。

「誰か助け・・・て・・・」

涙でくれる私を見て、必死に健二を体から放そうとしていた恵さんが必死の表情で語りかけてくる。

「も・・・う・・・私・・・は・・・助からない・・・ゴフツ！」

血を吐く恵。眼も黒を失いつつあるその表情で

私に最後の台詞を吐き捨てるように言った。

「はや・・・く・・・撃・・・て・・・お前の男なんだろッ！！！！」

その時、私の中で何かはじけた。

「・・・ッ！！！！」

ドオン！

声にならない私の鳴き声を一発の銃声がかき消した。  
眉間に10円玉ほどの穴があくと、その場にぐったりと倒れる一匹の化け物。

数分後、基地の兵士らしき人が  
白い防護服を着て彼の遺体と恵さんの遺体をへりから降ろした。

私はなすすべもなく、その場で呆然としていた。  
何も考えたくなかった。私の前の事実は全て悪い夢だと思いたかった。

その後の一年間は地獄だった。

政府の関係者らしき男に毎日質問攻めにあい。

その後は白い壁の何も無い牢獄に閉じ込められ。

戸籍も住居登録も消され、ただ出された食事にありつく

まるで人間としての価値を全て失ったような生活を送った。

同じ部屋に居た貴美子さんも同じような生活を送ったが

彼女は氣質が明るい。どこでも希望を失わないその姿勢は見習うべきだと

私は思った。

そしてC・B・S・Fという組織に有無を言わず入隊させられて

一年間、民間人には地獄のような訓練を行ったのだ。

後でわかった事だが、どうやら私や貴美子さんは死んだ事になって  
いるらしい。

まあもう私には、生きている家族も友達も親友も彼氏も居ない。

ただ、そこには毎日泥のように眠り、体を痛めつけるだけの訓練だけが  
私に『生きている』という意識を与えてくれただけだった。

PM 8時15分   ロストレギオン地下鉄道   - 特殊車両 -

グオングオン・・・カタカタツ・・・

私は眼を開くと小気味良いリズムで音を立てる電子機材の横の固定座席に居た。

どうやら少し意識を失っていたらしい。

黒色の戦闘服に全身を通したその姿を見て  
ハッと我に返る。

そう、今はC・B・S・F・Dチームの任務遂行中だったのだ。

自分で投げ捨てたフルフェイスメットを拾うと

右手に持ったプラスチックコンテナの持つところをギュッと握り

私はチームメンバーの居る前の車両へと移動しはじめた。

「そう安々と死んだりしないわ。ねえ？・・・健二」

そう心の中で呟きながら綾香が前の車両へと向かう。

グォングォン・・・カタカタツ・・・

後部車両には小気味良いリズムで音をだす電子機材だけが、その簡素な音を永遠と音をたてていた。

シナリオ【贖罪】 - 3

PM 8時20分    ロストレギオン    旧S駅地下鉄プラットフォーム

チームを乗せた列車は長く暗く続く線路を突き進み  
その闇の中から覗かせる狂気の牙はまだその光を見せていない。  
列車の車窓からトンネルの壁に設置された蛍光灯が薄ら薄らと車内  
を照らす。

だがその設置された蛍光灯の中も幾つか電気が通っていないのか  
まるで死んだようにその光りを失っているのもあり、  
蛍光灯を覆ったガラスが割れて散らばった破片が列車のライトの光  
に反射して

一瞬キラッと光り、運転手の顔に緊張感を走らせる。  
そしてその光りは列車が通り過ぎると、また不気味で深い闇に消え  
てゆく。

だんだんトンネルの壁に配置された蛍光灯の数もまばらになる。  
数十分すると駆らしきプラットフォームが見えてきた。  
隊員達は、それを見るなり銃器や荷物を背負うと列車の出入り口付  
近に立つ。

キイイイ・・・！

列車のブレーキ音がホーム中に響くと

車両はホームに停車しシューと言う排気音と共に出入り口であるドアを

開放する。

「全員降車！このままホーム階段を上って地上に出るぞ！」

レンがそう言くと、スリングに通した突撃銃USSR AKMを片手に持ち、

周囲を警戒しながらゆっくりとホームへと降りた。

勇壮に構えられた突撃銃『USSR AKM』

1959年にAK47の後継としてソビエトなどで配備が始まった突撃銃。

AK47と構造はほぼ同一だが、レシーバー部を削りだしからプレス品を溶接した物に変更したため、生産効率の向上と軽量化に成功している。

またレートレデューサー（独自の速度抑制装置）を装備している為、操作性はAK47よりも良くなっている。

「やれやれ、やっとついたってワケだ」

フィクシーがFN F2000を肩で担ぐように持ちながら小さくまとめた

自分のリュックサックを背中に背負い、ホームへとおりた。

腰あたりの小型ジュラルミンケースが車内から降りた衝撃でカランと音をたてて揺れる。

## 重厚感溢れる突撃銃『FN F2000』

FN社が2001年に発表した、ブルパップ式の次世代突撃銃。IWS(Integrated weapon system:統合火器システム)の異名を持つ本銃は、その名の通り各パーツをユニット化する事で、メンテナンスや装備の変更が容易かつ迅速に可能。排莖方式もユニークで、空薬莖は従来の薬室右には飛ばさず、チューブを経てハンドガード部まで移動させた後、右前方へと飛ばす。そのため、左利きでも安心して撃つ事ができる。

トリガーガード部には銃同様ユニット化されたアドオンが用意されており、40mmグレネードランチャーを装着している。小火器としては異例のFCS(Fire Control System:火器管制システム)を内蔵しており、最初に照準器でターゲットをロックしてしまえば、内蔵されたレーザー距離計がターゲットとの距離を自動測定し、射手に対して適切な発射角度を指示してくれる優れものだ。

「不気味な静けさだ・・・」  
パイがタボールAR21を軽々と左手にマウントさせると、軽やかに体を翻し  
少し駆け足でホームへと降りる。回りを確認しながら、妙にじめじめとして暑い  
周囲の湿度と室温を肌で感じ取っていた。

## 物言わぬ山、突撃銃『タボールAR21』

IMIがIDFと共同開発し、2000年頃に実用化されたブルパップ式の突撃銃。

モデル名「AR21」は『Assault Rifle, for 21st century(21世紀の突撃銃)』の略で、「タボール」はイスラエル北部に実在し聖書にも度々登場した『タボール(変貌)山』が由来。

人間工学を意識したデザインで実用性も高く、弾倉はM16の物と共通。多数のアクセサリールがあり、パイは上部にダットサイトを、側部にはマグライトを、下部にはグレネードランチャーM203を付けているようだ。

「電気は通ってるみたいだけど・・・？」

貴美子がホームの末端に見える大きな階段を確認するととなりにある昇りと降りのエスカレーターに目がいく。

一年以上も動いていなかったというのに、二つのエスカレーターは何事も無かったように一定の間隔で作動している。

しかし、一年前は白かったであろう壁の汚れや黒く血が滲んだ具合をみると

そこで『何があったのか』容易に想像できてしまい、再び嫌悪感を煽られる。

肩からするりとスリングをかけ、貴美子が持っているFN P90が揺れる。

短機関銃『FN P90』

1980年代、ボディアーマーの普及と高性能化により、軍の後方部隊が持つ護身用火器(拳銃、短機関銃)の威力不足がささやかれ始めた。しかし貫通力に優れる突撃銃では、何かとかさばるため携行は難しい。そこでアメリカ軍は『拳銃弾より貫通力に優れ、突

撃銃より取り回しの良い銃』の製作を各社に依頼。この要求に対してFN社が1987年に要求を満たした銃を開発した。それがPROJECT-90こと「P90」である。

P90は新規開発したSS190弾を採用し、サイズこそ拳銃弾に近いが、ライフル弾を小型化した鋭利な形状をしている。そのため貫通力に優れ、

さらに人体などの柔らかい物体に命中すると、

弾が横転して衝撃を物体に最大限伝えようとする性質が有るため

ストッピングパワー（銃弾が体内に与えるダメージ）も優れており、拳銃・ライフル弾両方の利点を兼ね揃えている。

銃本体もブルパップ式の採用でコンパクトに収まり、プラスチック部品を多用し軽量かつ耐久性にも優れた銃として仕上がった。

貴美子の持っているP90は先端にサイレンサーが付けられており上部には高性能なレーザーポインターがついている。

「不思議ね・・・人は・・・人間はもう此処には住んでいないのね」

貴美子の後ろから綾香が声を出す。さっきまであらわにしていたどこか悲壮とも思える表情は少し和らぎ、声も落ち着いた様子を保っている。

だがその一言は重く。周囲を警戒する目も、まるで懐かしむように遠くを見ている。

片手でシュツと綾香が持ち抱えている銃。

突撃銃『シグ・SG550』

1985年にスイス陸軍がStg57（SG510）の後継として「Stg90」の名前で制式採用した突撃銃。性能に定評のあるシグ社だけに命中精度は高く、精密かつ耐久性にも優れている。弾倉は半透明型で外から残弾数が一目瞭然な作りになっており、さらに最初から弾倉連結用の留め具があるのでクリップや金具無しに簡単に多弾倉にする事が出来る。

構造は意外なほどに単純簡素ながら部品相互のクリアランスが高いため撃った時のリコイルショック（射撃の反動による銃身と身体の間ぶれ）は非常に軽いのが特徴で、5.56mm口径のアサルトライフルとは思えないような撃ちやすさである。

綾香の『SG550』の先端下部には40mmのグレネードランチャーを装備している。

カシャッ！カシャッ！

「今度の作戦のために政府が働きかけて電気を供給したらしいわよ、これで空調機能もバッチリだったらいんだけどね」

ケリーが背負ったショットガン『ベネリM4スーパー90』の最初の弾が装填される音が聞こえる。

ガスマスクも兼ねているフェイスマスクの機能でも、匂いまではとる事ができず

普段の生活から見ると異質とも思える異臭を再び肌で感じ取っていたのだった。

散弾銃『ベネリM4スーパー90』

ショットガンの致命的な欠点であった銃弾のセルフローディング（一度撃った後、手で弾を装填すること）による緊急時のロスを克服するために単純なガス圧作動のセミオートマチック（半自動装填）機構を採用した銃で、エージェント時代の修羅場、一年前の悪夢を一緒にくぐりぬけてきた、ケリーの愛すべき相棒の一つ。

後部の可変ストックは折りたたまれ、より携帯しやすいタイプに移行している。

標準装備のウイバーマウントレール『STD1913ピカティニーレール』には  
いつの間にか光学サイトが装着されており、近接戦闘用射撃武器である

ショットガンでありながらも精密な射撃が行えるようになっていたようだ。

「全員降りたか……。では作戦通り先行展開しているAチームと合流し、地上に用意されている特殊車両にて目的地に向かうぞ！」

『イエッサー！』

レンの声とチーム全員の声と共にエスカレーターへと走り出す5人。

カチャ！カチャ！

タッタッタッタ・・・

金属と金属が擦れる音とDチームメンバーの駆け足の音だけが

静寂な地下鉄ホーム内を奏でた。

P M 8 時 2 9 分      ロストレギオン      旧 S 駅構内エスカレーター

エスカレーターの周辺は2つ区切りがあり

一つは直高30mはあろうかと思える長い階段、

もう一つはコンクリートを隔てた隣に見える、降りのエスカレーターだ。

あたりはやけにカビ臭く、コンクリートにはこびりついた血液であるものが

時間と共に黒くにじみ、その跡を残している。

鼻につく匂い、その中には嗅いだことのある懐かしい匂いがした。

「・・・警戒を怠るなよ、もうここは『奴らの巣』なのだからな」

「心配しすぎだぜ KING さんよ。いざとなったら俺のコイツが火を噴くぜ」

フィクシーが自分の銃に指を当てる。

冗談めいてはいるが、フィクシーの表情に余裕はない。

彼の嗅覚や視覚も感じているのだ、異質な『匂い』や『痕跡』を。

グウン・・・グウン・・・グウン・・・

地下の汚れた空気を洗淨する通気口や空気清淨機は

作動しているが、まったくといって意味をなしていない。

大型の空気清淨機のプロペラだけがけたたましく動いている。

時折、プロペラの間影がちらほら見えるが天井に設置されていた大型のライトに照らされていたDチームにはそれがなんだかわからなかった。

グウン・・・グウン・・・グウン・・・

ゆっくりと進む昇りエスカレーターが中腹にさしかかるとDチームの面々は、それぞれに持った銃器を構えながら横に設置されている階段や対面の降りエスカレーターを警戒している。

グウン・・・グウン・・・カラ・・・カラ・・・

「・・・ツ!?なに!?!」  
エスカレーターの周囲を警戒していた綾香が  
今までのエスカレーター駆動音ではない異質な音を耳で感じ  
声を上げると、その場にいたDチーム全員が綾香の方を向いた。

するとエスカレーターの上から何か小さく光るものが落ちてきた。

「どうしたの!?!何か見つけたの」

貴美子が近寄ってくるとう声を上げていた綾香は、  
上から落ちてくる数個の小さく光るものを一つつかんだ。

「これは・・・空薬莢・・・？」

ガシャーン！

グオオオオオオオオオオオ！

綾香が手に取った空薬莢を見た瞬間、天井で回っていた大型空気清  
浄機の  
プロペラが壊れ、その中から何か赤黒い人のような影が、大きな咆  
哮を上げ  
綾香たちの乗っている昇りエスカレーターに落下してきた！

グオオオオオオ！グオオオオオオオ！

落下してきた赤黒い化け物は、再び咆哮をあげると  
エスカレーターに乗っているDチームの退路を塞ぐように  
上と下で挟み撃ちをかけるように襲い掛かってくるのだった。

「チツ、仕方ねえな！化け物退治と参りましょうかッ！」

フィクシーはエスカレーターにズンと踏み込むと、  
皮肉たっぷりに化け物目掛けて叫んだ。

P M 8時31分    ロストレギオン    旧S駅構内エスカレーター

深い闇の世界を抜けて、列車を降りたDチームの六人は張り詰めた表情を、戦闘服のフェイスマスクに隠しながら一年前の事件の中核である旧S駅であった『そこ』に降り立つ。

駅を降車した六人を待ち受けていたのは構内の地上へと続く長く続く昇りエスカレーターだった。一定のスピードで上っていく、その自動階段を見て電気が通っているのを確認してホッとしたのも束の間、やはりここには人間の居場所は無かった。

昇りエスカレーターの中腹に差し掛かったところで天井に設置してあった空気清浄機の大型プロペラが外れエスカレーターの床に大きな音を立てて落ちた。そして天井からワラワラと床へと不自然な形で落下しDチームを見るや否やニヤリと笑うような不敵な笑みを浮かべ赤黒い肌の人間の形をした化け物が襲い掛かってきたのだ！

「挟み撃ち！相変わらず趣味の悪いこと極まりないわね！」  
ケリーが叫ぶと昇りエスカレーターの上下を見る。  
落下したプロペラと、それをカバーし支えていた柵が  
エスカレーターの横の階段にひしゃげたように無残な形を晒している。

老朽化していたプロペラを押しつけて構内のライトに照らされて出てくる

目で確認する限り6〜8体程度の化け物が、こちらにゆっくりと歩いてくる。

「ケリーさん！エスカレーターが！」

貴美子がとっさに床を見ると、

さっきまで一定の間隔で動いていたエスカレーターが作動をやめている。

どうやら大きなプロペラが落下したせいで機能が停止してしまったらしい。

グオオオオオオオオツ！

「動きは遅いが・・・数が多いな・・・こっちに来るぞ！」

雄たけびを上げながら向かってくる化け物の動向を冷静に見ながら再び高まる緊張感をパイは感じ取っていた。

TAR21のセーフティをとくと、肩に銃のストックをあてエスカレーター下から、ゆっくりと襲い掛かってくる化け物に向かって

正確で、それでいて揺らぐ事のない狙いを瞬時に定めた。

「ANGELとCLOWNとQUEENは先行して前方の化け物を退かして進行できる道を開け！ACEとJACKは上に向かいなが

ら俺の援護をしる！」

そう言うとエスカレーターの上を向いていたレンは昇りエスカレーターを逆走するように

体を180度回転させ、下にいた化け物の群れに向かってAKMを構えて、化け物のほうへ向けて発砲する。

ズガガガガツズガガガガツ！

オオオオオン・・・オオオン！

ピチャツ！ピチャピチャツ！

AKMから発射された銃弾は、化け物の眉間や心臓を捕らえ赤黒い化け物の内臓や腐った皮膚を壁やエスカレーターに飛び散らせながら

断末魔の悲鳴をあげ、その場に崩れる化け物！

しかし倒れたあとに後列から再び化け物はこちらに向かってゆっくりと歩いてくる。

その正気を失った目、赤黒い皮膚、生きていたときに着ていたであろう衣服。

全てが醜悪で、見るもの全てに嫌悪感を抱かせるような様子。

化け物はニヤリと笑うと、ゆっくりと歩き出し

AKMを構えていたレンに再び咆哮をあげようとするが

ズガガツズガガガツ!!!!!!

ピチャツ！ピチャピチャ！

「来い！化け物ども！俺からの早めのクリスマスプレゼントだッ！」  
化け物が咆哮をあげる前に、銃声と共に放出したレンの大声が  
エスカレーター中に響く。  
放たれた銃弾は、化け物の弱点である脳髄目掛けて的確に放たれて  
いる。

声もなく倒れる化け物たちを見ながら、レンは表情を少しも変化させ  
せることなく  
次の標的に狙いを付ける。

「・・・さて、前の敵を倒してサツサと上へいくわよ！」  
レンのAKMで倒れる化け物たちを横目で見ていたケリーは  
ベネリM4を構えると、こちらに向かってくる化け物めがけて  
一発ずつ慎重に発砲しながらエスカレーターの上へと駆け上がった。

ズドオオオン！ズドオオオオン！

「思い出に浸る暇もないわね、これじゃ！」

「たしかにね・・・」

ケリーの後方を同じ速度で駆け上がっていく綾香と貴美子。その表情は強張って、どこか焦ったような感じが見受けられる。

ガシユッ！

「へッ、さっきの借りは返すぜ隊長さんよ！」

フィクシーはレンのAKMによって倒され崩れる化け物を見て

昇りエスカレーターの手すりに足をかけると

そのままエスカレーターの外枠に仰向けで寝るように姿勢を保ち

F2000の下部に設置された40mmグレネードランチャーに手をかけると

即座に狙いを定めてターゲットである化け物の群れをロックする。

するとF2000に設置された火器管制システムが働き、適切な角度を知らせてくれる。

そのシステムの指示に従い銃を上に向けたフィクシーは、ニヤリと笑みを浮かべると、化け物めがけてこう言った。

「なめんなよ！テメエらにやられるほど俺は落ちぶれちゃいねえぜ！」

ボシユーーーーッ！バァァァンッ！

襲い掛かる化け物に対して、小気味いい炸裂音を奏でたグレネードが放物線を描きながら、こちらに向かってゆっくり歩いてくる複数の化け物に  
爆発した破片を撒き散らしながら命中する！

グゴガアアア・・・ガアア！！

化け物の軟体に貫通した破片と皮膚が飛び散り  
緑の血液と赤黒い皮膚が辺りにはらまかれる。

化け物は破片をくらって一瞬ひるんだが、ピクピクと小刻みに動いたあと

再びこちらに襲い掛かってきた！

グオオオオオン！グオオオオオン！

「ちっ！グレネードがきいてねえのかよ！」  
再び立ち上がり、こちらに向かってくる化け物たちを見て  
少し不安になるフィクシーだったが、また再び同じ姿勢で銃を構えると

化け物に照準をあわせるが・・・

グオオオン！

「うおっ！？こっちもかよ！」

いきなり隣にあった降りのエスカレーターから  
上から襲い掛かってきている化け物の片割れが、数体現れると  
物凄い力でフィクシーの腕を押さえつけ、フィクシーの顔面めがけて  
その鋭く鈍い光をはなつ牙を近づけてきた！

「ちくしょう！この腐乱死体風情が！」

F2000の銃口を向けようとしますが、腕を押さえつけられている  
のと

不自由な姿勢で戦闘服を着ているせいか、足を動かそうにも  
動かせなくなっていたフィクシーは、胸ポケットにあるハンドガンを  
取り出そうとしたが、もの凄い力で押さえつけられてるため腕が届  
かないでいる！

ガッ！ガッ！

「くそおおお！どきやがれ！」

押さえつけられている腕の肘で、思いっきり化け物の胴体目掛けて  
肘鉄を当てるが、まったく効いていない。

グオオオオ！グオオオオオオ！！！！！！

焦るフィクシーに対し、不敵な笑みを浮かべた化け物は再度雄たけびを上げると、鋭い牙でフィクシーの首元めがけて襲い掛かった！

「JACK！動くな！」

ドガッ！ドガガッ！

声が聞こえると、フィクシーは体を硬直させた。赤黒い人間のような化け物の顔との距離がすでに数センチのところまで迫ると、いきなり目の前の化け物のコメカミあたりに銃弾が貫通し、化け物が血液を噴出させ、降りエスカレーターにゴロンと、まるでタルが転がるように落ちていった。

「油断するな馬鹿が！相手は人間じゃないッ！」  
パイがそう言うと、再び襲い掛かる赤黒い化け物たちを見てTAR21を構え発射する！

ドガガッドガガッ！

「まったく奴らの生命力は、まるでゴキブリだな！」

「40mmグレネードが殺虫剤以下かよ、ゴキブリにしちゃ強すぎるぜ！」

フィクシーの軽い皮肉を含んだジョーク、  
化け物へ無駄弾を使うまいと精密射撃するレン、  
後ろの綾香たちを見ながら前方を警戒するパイ。

動かなくなった昇りエスカレーターで

一人としてその表情に余裕のあるものは居なかった。

P M 8時36分    ロストレギオン    旧S駅構内メインラウンジ

エスカレーターを昇りきると、構内の大きな通りに出る。

あたりにはまぶしいライトがあたり、中央にはおよそ駅には  
似つかわしくない大きな時計台のオブジェが置いてあり

コンクリートで周りを固められたガラス張りの天井を

今にもつきぬけんばかりに聳え立っている。

辺りには券売機や清算機、窓口など見えるが人間の姿は見えない。

グオオオオン！オオオン！

ズドオン！ズドオン！

「さあ！QUEEN！CLOWN！地上までのルートを開くわよ」  
先頭を走っていたケリーがそう言うと、

前方に迫っていた化け物の群れをベネリで一気に撃ちぬいた！

「私は、周囲を警戒します」  
そういうと綾香は構内のライトに照らされた空間を  
銃を構えながら体ごと一回転されるようにその場を見回す。  
どうやら地上から落下してきた化け物以外はいないようだ。

「ふう、とりあえず化け物は居ないみたいだわ。一安心ね」  
貴美子は駆け上がったってきた階段を後ろ目で見ながら  
少しあがった呼吸を落ち着かせる。  
さすがに装備を全部つけてのエスカレーター階段は厳しかったらし  
い。

貴美子の表情には油断が見え隠れしている。

「油断しないことよ・・・」  
綾香がそう言うと、それを見ていたケリーが大きく息を吸い込み  
貴美子に向けてこう言った。

「貴美子、隊長達の援護にいきなさい！ここは二人で大丈夫よ！」

「は・・・はい！」

ガン！ガシヤアアアアン！！！！！！

貴美子が返事をした瞬間。

時計のオブジェの後ろからまるで何かが壊れるような嫌な音が聞こえた。

グオオオオツオツ！！！！

時計のオブジェの後ろからゾロゾロと歩いてくる死んだ人間の群れがこちらに向かってゆっくりと歩いてくるのが見えた。

「最悪だわ。ゾンビと化け物の挟み撃ちなんて」

綾香はボソツとつぶやくと

ゆっくりと歩いてくるゾンビ達に侮蔑の表情を浮かべながら笑みを浮かべ、銃を構えながらゾンビ達の方へと走り出していた。

108

驚異的な進化を遂げた生命を狩る狩人 化け物

街を徘徊する常軌を逸した命亡き住人 ゾンビ

そこに飛び込んだ恐怖に歪んだ異邦者 人間

Dチームは進んでいたのだ。

吐き気が出るほどの嫌悪感、見えない恐怖、付き纏うのは死の匂い。聖者も神も存在しない、死と絶望だけが溢れた悪夢の地上へと。

シナリオ【贖罪】 - 5

P M 8時45分    ロストレギオン    旧S駅構内メインラウンジ

地上への活路を切り開くDチームに襲い掛かる赤黒い狩人（化け物）と

ラウンジの時計のオブジェから現れたこの街の住人<sup>ゾンビ</sup>達。

この死人と化け物が彷徨う嫌悪感漂う死の戦場で生きる残るためには、

襲い掛かる住人をなぎ払い、人間を狩る狩人を撃ち殺し  
命も未来も希望も光りも見えないこの街で、任務を達成するしかない。

昇りエスカレーターを化け物をなぎ払いながら駆け抜けた

綾香、貴美子、ケリーを待っていたのは

メインラウンジの時計のオブジェの後ろにある

ガラスを突き破ってきた、数十体は超えるであろうゾンビの群れだった。

ガアアア・・・アアアアア・・・！！

「・・・一年ぶりの再会ね・・・待ってたわよ！この時をッ！」

周辺を警戒していた綾香が肉眼でその群れを確認すると

視覚と聴覚で獲物を感じ取るゾンビ達の特性に、まるで挑発するよ  
うな

大声でゾンビの群れを一喝すると、突撃銃SG550を構え敵の眉間に狙いを定めて、ゆっくりとこちらへと動く死体の群れのほうへと走り出す。

「綾香待つてッ！」

「QUEEN！待ちなさいッ！」  
貴美子とケリーの制止の声を振り切り、無視するかのように綾香はゾンビの群れがいる方向へと駆けていった。

アアアアアッ！！

狂気の咆哮をあげ、綾香に襲い掛かろうとするゾンビの群れの数は肉眼でも10体以上確認でき、一人の人間を襲おうと行列をなして一直線に向かってくる。  
普通の人間なら、このおぞましき光景と腐敗臭に気絶してしまうだろう。

だが綾香は、そんな光景にも微動だにすることなく。

時計のオブジェの前に設置されたレンガ張りの小さな壁のような遮蔽物を

発見すると、そこで足を止め、コンクリートで造られた若干肌触りの悪い  
白い床に膝を下ろした。

綾香は遮蔽物に隠れるように体を隠し、

銃を固定すると、やや上に向け射角を高くした。  
そして化け物のほうへ銃を構え、SG550の下部に設置された  
40mmグレネードランチャーのトリガーに手をかけた。

ガシヤツ・・・！ボオン！

ギヤアツ・・・！！ギヤアアアツ！

放物線を描くようにゾンビの群れへと飛んでいくグレネードは  
化け物の頭上で内部爆発を起こし、その破片を撒き散らしながら  
ゾンビ達の頭や腕や足を貫いた。

ドサツ！ドサドサツ！

ゾンビ達は咆哮をあげると柔い体はよろめき、その場に崩れるよう  
に倒れた。

体の緑色の皮膚組織が壁やオブジェを汚し、綾香の体を隠している  
レンガの遮蔽物にも、ピチャツと音をたてながら  
色を染み付かせ、その狂気の色を広がらせていく。

しかし、そのゾンビ達の体乗り越えて

時計のオブジェの後ろの進入路から、また新しいゾンビの群れが現

れる。

アア・・・アアアアアッ！

「・・・そうね！このくらいで終わったら私が生き残った張り合いがないわ！」

咆哮を上げ、再び襲い掛かるゾンビの群れを肉眼で確認した綾香はフツと笑みを浮かべ吐き捨てるようにゾンビ達に大声で言うと、SG550をフルオートに変換しゾンビの群れへと乱射した！

ウイイイン・・・ドドドドドドッ！！

ギヤアア・・・アアアア・・・！

SG550から火花を放ちながら発射された5.6mm弾が

一瞬ラウンジの天井につるされたライトにより空中で光り

その光りはゾンビの頭や首を一瞬にして10円玉程度の黒点を作つて貫通し

ゾンビ達は断末魔の叫びを上げながら、無残な体をその場に崩し小さく静かに奏でられた彷徨える狂気の命の譜にピリオドを打つ。

ドドドドドドドッ！カツカツ！

「償ってもらおうよ、あんた達にはね！」  
綾香は銃から伝わる音で弾切れを確認すると、  
即座に空になったマガジンを抜き取り戦闘服の  
ポケットに入っていた予備マガジンを付けて  
レンガの遮蔽物から立ち上がって三度襲い掛かるゾンビの群れへと  
弾丸を発射しながら飛び込んだ！

ドツドツドツ！ドツドツ！

ギアアアアアア！アアアア！

「……めざわりなのよッ！どいつもこいつもッ！」  
右から襲い掛かってきたゾンビに強烈な蹴りを食らわせると  
ポロポロの衣服を纏ったゾンビは綾香の蹴りに一瞬バランスを崩し  
て怯み、

怯んだ瞬間に体の方向を変えた綾香の持っているSG550の弾丸が  
ゾンビの眉間を一瞬にして貫く。

ゾンビを撃つ綾香の目に、ためらいや迷いはない。

一年前の彼女では考えられないような決意や、どこか悦楽に満ちた  
表情。

それは憎しみをぶつけたときに得る快楽に似た何かだった。

ピチャ！ピチャピチャッ！

綾香の被っていた特殊プラスチックフレームを用いたフェイスマスクに  
化け物の緑色の組織が付着し、べったりと透明なフレームを濃い緑  
色が  
侵食していく。

ガチツ！ガタタツ！ガタンツ！

「くっ！こんなもの・・・邪魔よ！」

綾香は前面の見えなくなったフルフェイスマスクつきのヘルメットを  
左手で脱ぎ捨て、右手で銃を打ち据えながら、  
左手で思いつきりゾンビ達に投げつけた！

アアアアツ！オオオオオ！

ヘルメットを外し視界が消えたその一瞬、  
いきなり左側から咆哮をあげたゾンビが一匹、綾香に襲い掛かって  
きた。

ガツ！ドカツ！

「クツ・・・このツ！」

綾香は咄嗟に右手だけで構えていたSG550をゾンビに向けるが  
マガジン部分と銃身を驚異的な腕力で押さえつけられ、

その場に大きな力で押し崩された。

アアアアアアアッ！

「グッ・・・いちいち不愉快なのよッ！あんた達は！」

綾香はゾンビの手に押さえつけられ、負荷のかかっていたマガジン部分を

抜き出すと、化け物は今まで強い力で押さえつけられていた箇所が外れ

バランスを崩し、横たわる。

綾香はとっさに体勢を立て直すとSG550の内部に装填されていた一発だけの弾丸をゾンビの眉間にぶち当てた。

カチャツ・・・ドオン！！！！！！

ギヤオオオアアア！！

ガチャンッ！カラカラカラ・・・

ゾンビの叫びに振り返る事もなく、綾香はSG550を床に投げ捨てると

瞬時に胸ポケットからハンドガン『ベレッタM8000クーガー』を取り出した。

そして、再び次々に目の前に現れるゾンビ目掛けてこう言い放った。

「いいわ・・・やってやるッ！やってやるわよッ！あんた達のうめき声が消える『その時』まで・・・とことんね！」

M8000クーガーを両手で構えながら、再びゾンビの群れへと走り、突っ込んでいく綾香。

アアアアア・・・アアアアア！

「来なさいよ化け物・・・ハハッ・・・アハハッ・・・ハハハハハッ  
ッ！」

狂気の笑い声が、ゾンビ達のうめきと叫びに重なるようにラウンジ中に聞こえた。

…カチャッ！ズドォーンッ！…ドドドッドドドッ

エスカレーターの頂上付近で、重厚なショットガンの音と短機関銃の弾丸が撒かれる音がゾンビの声と共に聞こえる。

「あ・・・綾香・・・」

「貴美子ッ！ポーっとなしいッ！KINGが来るまでここを死守す

るのよ！」

エスカレーター前で時計のオブジェの後ろから流れてくるゾンビ達と戦っていた貴美子とケリーは、ゾンビ達の咆哮と共に聞こえてくる綾香の狂気の笑い声に気づいていた。

襲い掛かるゾンビ達に気を抜く事も出来ないケリーと戦うことで変化していく綾香に心配する貴美子。

しかし、どこかでケリーも貴美子も

あの狂気に満ちた綾香の戦い方、その姿を見て思ったはずだ。

『一体何が、誰が、あの娘をああまで変えてしまったのだろうか？』と。

持っている銃器を使い、眼前に襲い掛かるゾンビたちをなぎ払う二人の顔は、焦燥感にかられる表情の中に何処かくぐもったモノを感じざるえなかった。

シナリオ【贖罪】 - 6

P M 8 時 5 7 分    ロストレギオン - 旧 S 駅構内エスカレーター -

迫る狂気の牙、愕然たる死の恐怖との対面に  
か細く震える体は、レンズ越しにその目で異質な狩人に狙いをつけ  
けたたましく鳴る音と共にその目の前に見える化け物の顔面目掛けて  
数える事も出来ない無数の鉛玉を食らわせる。

額に穴のあいた無残な化け物の最後を見るたびに  
張り詰めた表情がより硬くなるような気がした。  
目に見える化け物を取り払い、恐怖を麻痺させ、  
狩人を狩る事で生きていることを実感する。

しかし、その目には化け物と「同じ」狂気が目が宿る。

狩人たちの目や牙は、脳からアドレナリン分泌させるには十分だっ  
た。  
次第に体は極限の興奮状態へと導かれ、その目はまるで狩人と同じ  
ような  
キラリと鈍い光を放つようだった。

・・グオオオオオ！グオオオ！

…トトツッ！…トトトトトツッ！

奇妙なうめき声をかき消すかのように弾丸が放たれる。  
天井から現れた赤黒い化け物と動かなくなった昇りエスカレーターで  
戦っていたレン、パイ、フィクシーの三人だったが、流石にとめど  
なく現れる

化け物達に不安の色を隠せずにした。

ドドドッドドドッ！

「上まであと、どのくらいだ・・・」

AKMの銃弾を迫ってくる化け物に浴びせながら

徐々に少なくなる残弾を見つめて、上りエスカレーターを一歩ずつ  
化け物に対して正面を向きながら上がっていくレン。

チラッと後ろを見るとパイとフィクシーが数m先にいる。

「KING！早く上へ！」

TAR21のマガジンを変えてながらパイの声

エスカレーターの上部から聞こえる。

化け物が進入してきた天井を見ると

まだ雪崩のように化け物が落ちてくるのが見えた。

エスカレーターの上へと駆け上がるパイは「チッ」と舌打ちをすると  
下にいる化け物に照準を合わせ、再びトリガーを引く。

グオオオオ！グオオオオ！

少しずつ後退するレン達だったが、だんだん天井より落下し  
その場に増殖し続ける化け物の数に押されつつあった。

カチャツ・・・！

「まったくキリがねえ！これが・・・最後のマガジンだぜ！」  
F2000の最後のマガジンを交換しながらフィクシーが  
皮肉めいた台詞を吐きながら少し苦笑いを浮かべる。  
しかし、その時フィクシーの表情は焦りに曇り  
その瞳は焦燥感は隠し切れていない。

ドドドツドドドドドツ！

「絶望か・・・今の言葉にふさわしい言葉じゃないか」  
レンがフィクシーの言葉を聴くとボソツと一言漏らした。  
手に持ったAKMがカラカラと音だけを響かせると  
空になったマガジンを捨て、AKMを化け物に投げつけると  
ポケットに入ったマカロフに手をかけた。

その時・・・

ドガシャアアアン！！！！

パイとフィクシーの後ろのコンクリート張りの天井が崩れる。  
まさかと思って音のする方向へと三人は振り返ってみると

そこにはギラリと牙を鈍く光らせ、足部分が肥大化した3mを越す  
巨大な赤黒い四足の化け物がいた。

目は光りを失い、ヒダヒダにささくれ立った黒い獣のような皮膚に  
毛細血管のような赤い線を張り巡らせたような姿は荒く息を荒げて  
獲物を探している。

頭には槍のようにとがった角があり、その姿はまるで巨大な闘牛の  
ようなフォルムをうかがわせる

「な・・・なんだあの化け物は！」

「おいおい・・・こんなのって・・・ありかよ！」

「絶望の上に絶望か・・・つくづくクソツタレだなッ！！！」

三人は化け物に対し思い思いの言葉を投げつけると

その赤黒い牛の化け物は三匹の獲物を確認すると、その四足を  
まるで野生動物のような荒々しい動きを伴う形で動かし始めた。



ありつただけの弾丸を命中させたために巨大な赤黒い化け物の動きは鈍くなったものの、その頑強な甲冑のような肉体にはまるで効き目も無かった。

「・・・奴の装甲を見る限り・・・既存の武器じゃ無理だな・・・ちっ、こんな所で使うハメになるとは！」

レンはそう言うとエスカレーターの床に背中に背負っていた荷物を降ろし

中から何かのパーツを即座に組み立て始めた。

「おいKING！なにやって・・・」

「JACK！余所見をするな！何か仕掛けてくるぞ！！」  
一瞬フィクシーがレンの行動に気をとられて余所見をする  
とパイがフィクシーに向かって怒号のような大声を放つと、  
化け物の奇妙な咆哮が再び、エスカレーターを震わせた。

ギュル！ギュルギュルギュルツ！

牛の化け物はフィクシーを見るとニヤツと笑うような笑みを浮かべると、

フィクシー目掛けて物凄い跳躍力を使ってその場からジャンプしたのだ！

「チツ！！」

フィクシーはそれに気づくなり、エスカレーターの上目掛けてブーツに全体重を乗せ、思いつきり横へと跳んだ。

ズドオオオン！

グアアアア・・・アアア・・・

グシャ！グシャグシャ！！

ギユル！ギユル！ギユル！

巨大な牛の化け物がフィクシー目掛けてのしかかった部分はまるで巨大な鉄球が当たったかのように大きなクレーター状のくぼみが発生し

化け物の大きくのびた二本の槍のような角には粉々になったセラミック部品がきらりと光り、

その横にいた人間の形をした赤黒い化け物は巨大な牛の化け物の下敷きになり、無残な肉片を残しながら断末魔の悲鳴を上げる。

グシャ！ピチャピチャ！！

巨大な化け物は下敷きになっている赤黒い化け物を無視するかのよ

うに  
まるでスイカか何かを割るように下敷きになっている化け物を  
その肥大した足で踏み潰した！

ギユル？・・・ギユルギユル・・・

「へっ！にわかマタドールにしちや良くやってるだろ！牛野郎！」  
そう口では余裕そうに言っていたフィクシーだったが、  
間近で潰された化け物の屍骸や、その周りに出来たクレーター状の  
穴を見る限り  
当たったらひとたまりもない。確実な死が待っている。

「おい！JACK！・・・だ！！」  
レンがフィクシーに声をかけて何か合図するように赤黒い化け物達が  
ウヨウヨいるエスカレーターの下のほうを指差した。  
その手には、さっき組み立てていた武器が出来上がっていた。

「へっ・・・わかったぜKINGさんよ！」  
フィクシーはレンの合図を見ると、それまでの焦ったような表情を  
やめ

何か覚悟を決めたような硬い表情で、背中に背負った荷物をその場  
に降ろすと

いつもニヤけた顔からは考えられないくらい真剣な面持ちをし  
牛の化け物の狂気の目を見て、ゴクリと唾を飲み込む。

ギョル！ギョル・・・ギョル！

「・・・（・・・次が来たら死ぬな）」

そう考えたフィクシーは背中に冷たいものを感じながら再び襲い掛かろうとする化け物にたいし中指をたてながらこう言った。

「ついてきな化け物！俺と一緒に地獄にいこうぜ！」

そう言うとフィクシーは、今まで上ってきた上りエスカレーターを全速力で逆走し始めた！

ギョル！ギョルル！！！！

鼻息を荒くたてた牛の化け物はフィクシーの走る方向へ

荒々しく床に足をガッツとたたきつけると、フィクシーの後ろ姿を見て

獲物を捕らえるように床を蹴飛ばし、エスカレーターの遙か空中を跳躍した！！

カチャツ・・・

「今だJACK！横に避けるー！ーッ！！！！」

レンの怒号が聞こえると、フィクシーはその場で横っ飛びをした。

カチャ！

「残念だったな化け物。地獄に落ちるのは、お前一匹だけのようにだぞ！」

レンは、そう言うと手に持った武器のトリガーを跳躍している化け物の腹部目掛けて引いた。

バシューー！！！！ズゴオオオオオン！！！！

ギユア・・・ア・・・ルル・・・ア・・・ギユルル！！！！！！

物凄い爆音と共に、空中で勢いを失った牛の化け物の腹部には大きな穴があき燃える肉体を断末魔の声と共に、下にいた化け物の群れを轢いていくように落ちていった。

「・・・やっと終わったか・・・」

レンは下に落下する燃えている牛の化け物を見るとフツと表情にゆとりを持たせた。両手に持った武器は煙を出しながらレンの手の中でゆっくりその役目を終わらせるように消沈していく。

『USSR RPG7』

個人携帯可能な肩付け式対戦車、軽装甲火器である。  
命中すれば300mmの装甲をも打ち破る威力を持つ武器である。

「ふう・助かったぜKINGさんよ！」

「・・・」

「グズグズしてる暇はない！先を急ぐぞ！」

レンがRPG7をしまうと、それぞれの思いを秘め  
上りエスカレーターの上へと向かい始める三人。

武器を再び手に取り、全速力でエスカレーターを駆け上がると  
メインラウンジの大きな明かりが三人を包んだ。

PM9時08分 ロストレギオン - 旧S駅構内メインラウンジ -

ラウンジにはすでに無数のゾンビ達の屍骸が、そこら中に撒き散ら  
され

時計台のオブジェや華やかな壁の模様には、おびただしい血液や肉  
片が

べっとなりとくっついていてる。

「遅くなってすまない！各自散開して敵を排除しつつ目的地まで進  
むぞー！」

「お待たせ！って・・・ここにも化け物かよー！」

「くっ・・・まだ敵が」  
エスカレーターを駆け上がってきた三人が目の当たりにしたのは  
未だ数を頼りに迫ってくるゾンビの群れだった。

「私達より・・・綾香を！」

「なんだと・・・？どういう事だ・・・ッ?!」  
貴美子にそう言われてレンが時計のオブジェのほうを見ると

そこには綾香が様々な切り傷、擦り傷、噛み付かれたような牙の跡  
を残して

未だ迫り来るゾンビの群れに向かって、肩で息をしながら銃と格闘  
術で

戦っている姿が見えた。

ドカツ！ガスッ！

「ハアツ・・・ハア・・・ッ！・・・ゲッ!!」  
周りにいるゾンビに、臆することなく強烈な右回し蹴りを浴びせる  
綾香の目は、ライトに鈍く反射するように光り、それはまるで  
奴らと同じ『狂気の目』だった。

ドオン！ドオン！

「おまえたちに・・・なんか・・・負けない・・・んだからッ・・・」  
手に持った銃を苦しそうに片手で撃ちながら、綾香の肩からフツと力が消える。

まるで重力に逆らう力を失ったかのようにゾンビが群がるその中で糸が切れた人形のようにへたり込んでしまう。

人間の限界・・・彼女にもそれは普遍のものだったのだ。

「やら・・・れる・・・わけに・・・は・・・」

そう言ってみたものの、まるで体に力が入らない。

通常の人間の数倍の力をもつ化け物と対等に渡り合った肉体はすでに限界。その限界をゆうに超えていたのだ。

アアアア・・・アアアアア！！

せまりくるゾンビになすすべもなく、綾香はその体を死者達に明け渡してしまふ。

「綾香ーーーーッ！！」

ブウウウウン！ドツドツドツドツッ！！！！

貴美子が叫んだ瞬間、けたたましいエンジン音と共に銃声が聞こえた。

ウギヤアアア・・・！！

ゾンビの断末魔が聞こえると共に  
ゾンビたちの肉体は黒い車体に汚らしく踏み潰された。

「はやく乗れ！こっちだDチーム！」  
黒い車体の窓からフルフェイスマスクをかぶった男がこちらに向けて  
大声で言い放った。

ガーツ！

それと同時に車体のサイドドアが開き、そこから黒い戦闘服を着た  
CBSF隊員達らしき人間がゾンビを銃器でなぎ払い始めた。

「助かったツ！援軍かツ！」  
レンはそう言うと、Dチーム全員に指示し  
目の前に現れた黒い車体に取り込んでいく。

「けが人を搬送しろ！一気に脱出するぞッ！」

ブウウウン！

倒れた綾香を車内に搬入すると、黒い車体は轟音をあげて駅構内を走り出した。

「・・・こんなところで・・・ダメ・・・なの・・・まだ・・・薄れ行く意識の中で綾香はボソボソと口を動かしながら黒いワゴンの後部座席に体を置かれた。

未だ迫り来るゾンビの幻影と戦い続けているのだろうか？その表情には狂気に似た何かを感じざる終えなかった。

「綾香・・・」

隣の座席で見守っていた貴美子は考えていた。

綾香が何故あのような自殺行為とも思える行動を起こしたか憎悪や悦楽にも似た表情でゾンビたちを殺害していたのかたとえ力尽きて殺されそうになっても、どうして彼女の表情には殺意が満ちているのか。

思い浮かぶ『答え』は一つだった。

一年前に彼女が自らの手で銃弾を放ち命を断った恋人への贖罪。  
出会った仲間達を殺した化け物達の憎悪。

貴美子は確信していた。彼女のこの戦いにかける覚悟を。

シナリオ【贖罪】 終了

## シナリオ【再会】 - 1

P M 9 時 2 3 分 旧国道 4 6 3 号線 - C・B・S・F 専用大型車  
内 -

夜の闇に包まれた亡者と死者と化け物達の街

『ロストレギオン』

この死の領域を輝かしいライトをつけながら走る黒い特殊装甲車。  
窓やタイヤには、化け物やゾンビをなぎ倒しながら走ったような跡  
があり

白と黒の美しい曲線をあしらった装甲板には、  
鈍い赤色がふんだんに塗りたくられている。

旧S県の国道 4 6 3 号線に入ると、駅前のような  
死者たちの群れに遭遇することもなくなり  
あたりには誰も住まなくなったことにより『閑静になった』住宅街  
だけが

周りにポツポツと見えるだけだ。

サイドとフロントに『C・B・S・F』とデカデカと書かれた特殊  
装甲車は

道の緩いカーブに差し掛かり、少し減速しながらカーブを曲がる。  
カーブに設置してあった電光掲示板が、むなしく

『この先、事故多発注意』と照らし続けている。

すでに、この街に走る車など  
この生きている人間達を乗せた特殊装甲車だけだと言うのに。

「目的地まで、あと何分だ？」

「このまま行けば30分程度ですね」  
助手席に乗っていた戦闘服の男が運転席で運転をしている男に尋ねる。

特殊装甲車のセンターにはナビゲーションシステムと思われる液晶画面に

特殊装甲車の現在位置と目的地までの到着予想時間と距離が赤い文字色で書かれている。

「後ろのDチームの負傷兵の容態はどうなんだレナ」

「・・・今後ろで応急処置が終わりました隊長」  
後部座席とのしきりである緑色の布製カーテンがフツと動く  
後ろから肩にCBSFと書かれた戦闘服を着た部隊の一員である  
レナと呼ばれた女性隊員がニュツと上半身を出し、助手席の男に報告する。

「外傷は多いんですが、どれも致命傷を避けていますね。少しすれば意識を取り戻すでしょう」

レナが淡々と容態を言っていく。

その報告を聞いていく間に、助手席に居た隊長と呼ばれた男は

深いため息をつきながら、少々水滴のついたフロントガラスの一方を見続け  
こう言った。

「我々Aチームが既に戦死者2人を出しているというのに、あの巨大なネズミの化け物とゾンビの群れを退けて生存率100%か・・・」

「隊長と呼ばれた背の高い男が呟くと、口調と合わせて  
どンドン暗くなっていく表情がそこにあった。」

化け物達に部下を殺されたことで、うろたえる様な隊長では  
部下に不安を促すだけだと思って冷静な素振りをしてはいるが、  
瞳はギラツとした光りを放ちながら据わっている。

押し殺しているその深い怒りと憤慨感は、瞳からヒシヒシと伝わってくる。

「あの化け物の群れに一人で立ち向かってあの程度の傷で済むなんて・・・たいした逸材ですよ・・・」

レナがそんな隊長と呼ばれた男の心を知ってか知らずか  
チラチラと車の後ろに居るDチームを確認しながら

聞こえないように小さな声で一言漏らす。

「戦争とは違う兵隊の層の厚さか・・・そういう意味では、一番『場慣れ』している我々が・・・皮肉なものだな」

「パツシヨーナ隊長。我々はただ任務を達成するだけです。任務に犠牲はつき物ですよ」

部下であるう運転席に座る男にそう言われると、  
遠くへ目をやっていたパッショーナと呼ばれた男は  
自分を納得させるように、フロントガラスに向けてコクリとうなず  
いた。

しかし、その表情は暗く、曇っていた。

ザザアーッ・・・

急に外の雨が強くなり、装甲車に当たる雨の音も次第に激しくなっ  
ていく。  
まるでパッショーナの心のように。

P M 9 時 2 7 分      特殊装甲車      後部座席

ポツポツと重量感のある雨粒が窓に当たっているが見える。  
普通装甲車というと、窓ガラスも重圧な装甲で覆われるものだが  
この特殊装甲車の窓は、外の光景を眺められる透明な特殊装甲版で  
覆われ、  
外が見えるようになってる。

キュルキュルキュル・・・ガタガタ・・・ガタガタ・・・

タイヤ周りには、隙間から『何か』が詰まらないように戦車のようなキャタピラが取り付けてある。

スピードは普通の乗用車より少し遅い程度であろうか？

だが、もし道中で化け物に襲われても咄嗟に対応できる武器や装備が無尽蔵に後部座席にはあった。

クリアな装甲板も、このためのものであるう。

ブウン・・・ブウウウン・・・カタカタ・・・カタカタ・・・

エンジン音と機材が揺れる音だけが後部座席を包んでいる。

人では無いゾンビ達のうめき声が聞こえなくなった、

この後部座席にはそれぞれ重い表情を浮かべる

Dチームの六人がいた。

後部座席の後ろのほうで仰向けで苦しそくに寝ている綾香。

その周りを囲むようにサイドについた固定座席に座るレンやケリー達。

重苦しい雰囲気が続く中、Dチーム隊長のレンが声をあげる。

「QUEENは外傷からの二次感染を引き起こしているかもしれん。よって彼女に対クウィルス用消滅剤『デイブレイク』を投与する。

24時間の効果時間を全員で一律に時間合わせをするために各員専

用注射器で投与せよ」

そう言うとレンは綾香の戦闘服についていた小型のジュラルミンケースから

専用の注射器を出し、綾香の戦闘服の袖をまくりあげ、素早く静脈注射をする。

「『デイブレイク Daybreak』・・・夜明け・・・か・・・」

「軍が考えた薬にしては、いいネーミングセンスよね」

「くだらんな、所詮クスリだ。弾一発ほどの信頼度も無い」

「・・・綾香は大丈夫かな」

それぞれの気持ち声をに出しつつ、まくりあげた腕へデイブレイクを投与していくDチーム。

これで安心ということではないが

ひとまず二次感染による被害は防げるといふ安心感がDチームの表情を緩ませた。

「流石に焦ったぜ、化け物とゾンビの挟撃なんてな」

あの駅のエスカレーターでの闘いを思い出しながら

フィクシーは自分の意識ではないところで少し震える右手を左手でギュッと抑えている。

彼のブーツには、まだ牛の化け物が突っ込んできたときの

金属のカケラがべたつくブーツにくっつくように乗っている。

「奴らもKウイルスの恩恵で少しづつ行動に進化をしていると言っ  
ことか・・・」

レンが地下でのネズミの化け物との戦闘を思い出しながら  
少し感慨深げに頭を垂れる。何か考えるようなその一言一言は  
チームメンバー達に色々な考えを沸かせる。

「これからの奴らは、より効率的により確実な方法で攻めてくると  
いうことですか？」

ケリーがレンの言葉を聞き取って、自分が体験してきた  
Kウイルスの傾向を思い出しながら、レンに質問する。

一年前の事件では、人間になりきる化け物や、体表を変化されるも  
のなど

その傾向は様々だった。

「さあな。だがあの見計らったかのような動きは何かおかしい・・・

」  
訝しげな表情を浮かべたレンは、聞き取れないような小声で何かを  
呟き

その場を立ち上がると、Dチームメンバーに指で合図をし  
運転席のある前の座席へと向かった。

そのとき、会話を聞いていたサイドの座席に座っていたフィクシー  
が口を開く。

「こっからの闘いは、いつ何処で化け物に襲われてもおかしくないという覚悟はしておいた方がいいということだろう」

「私、そんな咄嗟の動き出来るかしら・・・」

いつも陽気なフィクシーにしては重苦しい言葉に

貴美子は動揺を隠せず、思わずケリーになきついた。

「貴美子なら出来るわよ。自信を持ってやりなさい」

「は、はい」

ケリーにそう言われると、貴美子の表情も和らぐ。

二人ともお互いにお互いを信頼し合っている証拠だ。

この二人の信頼はDチームの中でもぬきんでている。

その時、後ろで愛銃の整備をしていたパイがゆっくりと、  
それでいて重苦しい言葉を口にした。

「臆病者の足手まといに言っておく。咄嗟に動けない奴への答えは簡単だ。動けない奴から、その場で化け物に食われて死ぬだけだ。おいCLOWN。私の周りでへマをやってみろ。その時は化け物より貴様に弾丸を浴びせる」

「・・・!!」

その言葉を聴いた貴美子はがっくりと肩を落とす。

エスカレーターの前で一人で戦う綾香の姿を確認しながら

綾香を守れなかった、援護できなかったことが脳裏に  
フィードバックしていたからだ。

(・・・あのとき私が強引に綾香を止めていたら、綾香はこんなに  
傷つかずにすんだんじゃないのかな・・・)

貴美子の表情が硬くなるのを見て、ケリーが

怒りの表情をあらわにしてパイに向けてキツと口を開く。

「あなた、なんてことを言うの！何度も言うけど私達はチームなの  
よ！信頼無しでは任務も出来ないわッ！」

怒るケリーとは対照的に、まるで氷のような表情を浮かべるパイ。

「本当に甘い考えだなあんた達は。今まで化け物との闘いで、あん  
たたち生きている事が不思議なくらいだよ。忠告しておくよ、信頼  
とか友情とか『そういう甘い考え』を捨てない限り、そのうち後悔  
することになるよ。絶対にね」

ガタッ・・・

そう言うと座席にもたれかかるように目をつぶるパイ。  
ケリーは、今にも泣きそうな貴美子をなだめるのに必死だ。  
フィクシーは暗い顔を浮かべながら、車の後方で寝ている綾香に目をやる。

「・・・あの数のゾンビ達を倒せる・・・Kウイルス・・・進化の恩恵か・・・」  
ボソツと呟きながら、再び座席に座りフィクシーは  
レンからの命令を待つのであった。

バシャバシャバシャ・・・！！

窓に当たる雨粒はいつの間には多く重くなり、  
窓を叩きつけるような音が聞こえる。

P M 9 時 3 0 分    ロストレギオン    - 研究施設『タルタロス』 -

強い雨が降り注ぐ中、暗闇に閉ざされた森の中心部に光りが見える  
雨粒が叩きつける大地には、くぼみに広い池が出来ている。  
その池の先に、白い壁でまだ真新しい建物が見える。

研究施設『タルタロス』

広大な敷地の中に十数個の建造物、研究施設が並んでいる。

ゲートには、巨大な電磁柵が張り巡らされており  
外敵を寄せ付けない雰囲気をかもし出している。

タルタロスの建物の中の一つの地下施設で、何かが  
激しく打ち合うような音が聞こえる。

ガンッ・・・！ガンッ・・・！

ギャッ・・・！ギャアッ・・・！

ライトの当たった灰色の壁の部屋で  
緑色のトカゲのような化け物の2、3体が  
黒い衣装を着た、人間のようなものに襲い掛かっている。  
化け物の動きも早い、化け物が攻撃をしてくる間に  
人間の方は瞬時に体勢を翻し、化け物達の攻撃を余裕とばかりに避  
けている。

ギヤオ！ギヤオオオ！

トカゲの化け物が飛びかかろうとした瞬間黒い影が動く、キラツと  
光りが  
見えると、いつの間にか緑色のトカゲの化け物の動きが止まってい  
る。

ギヤ・・・ギヤアアッ！！

ピチャ・・・！ビタビタッ！

断末魔の悲鳴と共に、トカゲの化け物の肢体が切り刻まれるように  
その場で無残な残骸を残しながら、ほとばしる緑色の血液を  
壁や床にばら撒いていく。

カキン・・・。

「……」  
黒い衣装を着ている人間らしきものは  
手に所持した光っているものを収めると  
部屋の強化ガラス越しに目をやっている研究員らしき二人の  
前で指示を仰ぐように立ち尽くし、待っている。

「……あれが……ヘラクレス。凄まじいですね……」

「複合的生物兵器H・BOW（Hybrid Bio Organ  
ic Weapon）の試作品だからな、目を見張らなければ意味  
がない」

ガラス越しに熱狂的な視線を送る研究員の一人。  
黒い衣装を着た人間らしきものは、それを見ても微動だにしない。

もう一人の研究員が、ガラス越しに見える  
トカゲの化け物の死体を見て、吐き気を催しながら  
呟くように声をあげる。

「唯一の実験成功例……ヘラクレス……」

その声を聞いた研究員が、フウと大きな呼吸をすると  
口を開き、淡々と語り始める。

「間に合ってよかったよ、最新型のKウイルス適用H・BOWが。今こちらに空から向かっているこの国の強襲部隊に使用して、その結果を見て、それを最終演習とする。この事件の真相が世界に流れたら大変だからな。情報を知っている奴は全員始末する。それが組織の決定だ。君にも研究で苦勞をかけたな、自室に戻ってゆっくり休みたまえ」

ガタツ・・・ボタン！

もう一人の研究員が部屋のドアを出ると、少し緩んだ表情で黒い衣装の人間らしきものを見つめ再び息を吸い込む研究員らしき人物。

「ヘラクレス・・・私の最高傑作・・・組織など関係ない・・・私は私の研究を・・・ククク・・・フ・・・フフ・・・フウハハハハーツ！！！」

狂気の声が研究室の室内中に響いた。

## シナリオ【再会】 - 2

P M 9時51分    ロストレギオン    - 旧Y市街山間部 -

CBSFの特殊装甲車は、一年間放置され荒廃した国道をひたすら  
進み

ついにロストレギオンのビル街がある中央部を抜けて  
旧Y市街の山間部へと差し掛かったのだ。

特殊装甲車の走る道路は、大小様々な物体が転がっており  
白かったであろうガードレールは焦げた茶色や黒、緑に変色しており  
金属製のガード部分はところどころ衝撃で湾曲、または破壊されて  
いる。

落石注意と書かれたアルミ製の掲示板とそれを支える白いポールは  
まるで進行を邪魔するかのよう道路側に向かって無残にひしゃげて  
その姿を晒している。

ポールの下には、赤黒いモノが二つ見える。

それは、まだいくつかカタチを残している人間の上半身の一部で  
覆いかぶさられるように何匹かのゾンビの屍骸が  
その上に力なく倒れている光景だった。

未だゾンビの手には自分の下に狂気表情で眠る人間の下半身脚部  
の一部が

ゾンビのその性質を表すかのように、力強く握られて硬直している。  
濃く滲んだ赤色の脳漿を道路側に撒き散らしたゾンビの屍骸から見て  
突然落下してきたポールに頭をかち割られたのだろうか？

それらの残骸は、一年前ここで何が起きたのかを説明するには十分すぎるほどの証拠だった。

山間部への道はさらに暗くなり、一時だけ復旧している街灯や電光掲示板が  
むなしく、それでいて儚げにこの死人巢食う街を照らしている。

パシャツ・・・パシャツ・・・ブウン・・・ブウン・・・

道路のくぼみに出来た穴に水がたまり、そこへ装甲車の大きく重量感のある  
キヤタピラのようなタイヤが進入すると、道路は一面水浸しとなった。

濡れた地面の周りに這いずっていた亡者たちの亡骸は  
隊員たちの恐怖を一層煽り、その不安は止め処も無く増幅し続けるのであった。

…トウトウ…トウトウ…

特殊装甲車の助手席から、いかにも機械的な電子音が聞こえる。

ガチャッ！

「…そうか…EとSチームの空挺部隊は配置についたか…こちらはAチームの半数がやられているが作戦には支障はない。遂行可能なレベルだ。我々地上部隊が配置につき次第、作戦を決行する」  
電子音の出ている機材から受話器のようなものをつた  
助手席に座っていたAチームの隊長パッショーナは、流暢にそれ  
いて明確に  
話している受話器の向こうの相手に情報を伝えていく。

「交信終了。Rincontrare（また会おう）！」  
落ち着き、少し震えるような低音で最後にイタリア語で再会を意味  
する言葉を  
吐くパッショーナ。どんな時でも楽しむイタリア人の気質だろうか？  
運転席にいたAチームの隊員の一人は、そんなパッショーナの事を  
知ってか知らずか若干の笑みを浮かべる。

「なんだ？何がおかしい」

「隊長。そろそろ目的地です」  
パッショーナが運転席の隊員に声をかけようとしたところ  
後部座席からニユツと顔を出したAチームの女性隊員レナが  
冷静に場所を通告する。

パッショーナの目が一瞬にして再び凍りついた。

「よし、後部座席のDチームの連中にも言っておけ「装備をつけろ」とな」

パツシヨーナが低い声で全員に伝わるように目を配りながら言う。そして再び息を吸い込むとフロントガラスの前に置いてあったフルフェイスメットを取り、ガチャガチャと装着する。

ポツポツ…ポツ…ポツ…

いつの間にか外の雨は止みかけて、  
辺りは再び音の無い漆黒の闇へと姿を変えていた。

P M 9 時 5 5 分    特殊装甲車    後部座席

いつの間にか後部座席には最後部に並べたコンテナが座席の部分にまで寄せられ、何個かのコンテナのフタがぁいている。窓は暗い夜道を映し続けていたが、ときどき浮き上がる街灯の光りにDチームの六人の顔が鮮明になっていく。

Dチームの面々は、それぞれ装備を纏って最後のチェックをしてい

る。

運転席にいたパッショーナの声が届いたのだろうか？素早く後部座席に

用意された小型のコンテナから使用武器を選び、各銃にセッティングされた

スリングを肩のベルトに通している。

六人は、各々張り詰めた表情をしており

重くのしかかる任務へのプレッシャー、死との対峙、生存の確率。

緊張を隠しきれしていない、それぞれの表情は

それらを表すのにそう時間は要らなかった。

六人の中には、先ほど応急処置を受けた綾香の姿もあった。

「ねえ綾香、本当に大丈夫なの？」

貴美子が短機関銃『P90』を肩からぶら下げながら

さつきまで苦悶の表情で気絶していた綾香に話しかける。

いくら軽症とはいえ、あれほど数の化け物との闘いで

無痛で無疲労ということには無いと思ったからだ。

「痛覚や疲労感なんて一年前の訓練からもう忘れたわ。立てて走れて親指と一指し指が動けばそれでいいの」

そうどこか冷静さと緊張を超えた範疇で冷たく貴美子に言い放つと綾香は、手元の灰色のコンテナから『H&K MP5』を取り出す。外観は殆ど変わらないが、マズル部分に特殊な加工がしてあり

銃口径が本体と比べ大きくなっている。どうやらカスタムされた銃のようだ。

スラツと長方形にのびたカスタムマガジンを見るところ

どうやら、その銃弾には特殊な加工がしてあるらしい素振りが見える。

「へえ、コルトのM4A1じゃない」

「弾が効かない化け物に遭遇して死ぬなんて、洒落にもならねえからな」

ベネリM4を抱えたケリーが、もの珍しそうにフィクシーの銃を見つめる。

フィクシーがコンテナから取り出した銃はコルトM4A1。

M16系のショートカービンモデルの完成形、一つの頂点を形成する銃だ。

駅での牛の化け物との戦闘での教訓を生かし、これもマガジンと銃弾に

特殊な細工がされているような様相をうかがわせる。

「フツ、随分と物々しい様相だな。銃に頼るといのがどれだけ愚かなことかわからないのか」

パイがフィクシーたちの装備を見て嘲笑の籠った笑みを浮かべる。

手元には短機関銃IMIウージーが握られている。

どうやら彼女のモノもカスタムされており、不要なパーツの削除や砲身が短くカットされていること、マガジンの材質が別の素材になっているなど

全体的に動作を殺さない軽量化がなされているようだ。

「全員、作戦の確認を行う。整列」

手の幅ほどの可動式ホワイトボードを持ったレンが隊員達を呼びか

けると、  
それまでバラバラだった5人が武器を持ち駆けつける。

「これから我々は旧政府施設へと向かう。目的は事前に話したように『Kウイルスに関するプロジェクトファイル』の確保だ。失敗は許されない」

そう言うとレンは、手元にあるホワイトボードに何か建物らしき構造物を書いていく。

「まず特殊装甲車で政府施設の電磁柵門を突破し、我々Dチームは直進し施設内部エレベーターへと進行する」  
レンは深く息を吸い込むと、図に描いた建物の簡易的な内部構造を指し示し、わかりやすく全員に説明していく。

「後方から回ってくるAチームが退路を確保し、我々はエレベーター前の安全を確保後、空挺部隊のE、Sチームと連絡を取り最下層8Fフロアにて待機、その後合流し、目的のファイルがある場所に辿り着き次第、奪取せよ。奪取後はそれぞれのルートに別れ安全を確保し退却する」

淡々と言葉を連ねて話すレンの一言一句を聞き逃すまいと  
真剣に聞く5人。その表情に余裕は無い。

ただその言葉の裏に隠れた『安全を確保』という不確定な言葉が少し気になったが

5人には、すでに任務成功という重いプレッシャーとのしかかる不安に耐える。

そのことだけが頭にあり、それ以外はかき消されるように消えていった。

「ここらが正念場だ！いいか、生きるとは言わん！非情になれ！甘えを捨てる！いくら這いずろうが、泣こうが、喚こうが、目標の物を手に入れるまでは『その地獄』から出れないと思えッ！以上！」

『了解ッ！！！！！！』

五人の声が特殊装甲車中に響く。

五人の隊員達はサッと敬礼し、各自表情を固め座席へと散らばっていく。

その大きな了解という声の中に秘められたものが  
これから味わう抜け出せないような地獄を頭で眺めながら  
恐怖と嗚咽と焦燥に駆られる自分を殺すためのものであったとしても。

ブウウウン・・・キーツ・・・！！！！

車が停まる。目的地に着いたのだろう。

横から見える透明の強化ガラス窓からは電磁柵に覆われた目標の建物が見える。

奥歯を噛みしめる五人の声にならない音が静かに装甲車中に響く。

ガチャツ、ガチャガチャ…トウトウ…

すると助手席からパツシヨーナが再び交信用の機材をとりだし、その受話器をとり声を上げるようにこう言った。

「こちら地上部隊A、Dチーム。これより作戦を遂行する！」

スウツと独特の呼吸で深く息を吸い込み、パツシヨーナは乗車している全員に聞こえるようにこう言った。

「さあ…EnergunnoaDisfare!（悪魔退治だ!）」

ブウウウウン!!!

けたたましいエンジン音を上げて装甲車は  
暗闇の中を速度を上げて建物を覆う電磁柵の途切れ目である門へと  
向かった。

ドガガシャアアアアン！！

重厚感のある金属製の門が大きな音を立てて真つ二つに弾け飛ぶの  
を窓越しから  
見ていた隊員達の脳裏には、その後確実に訪れる『地獄』という言葉  
葉がよぎった。

## シナリオ【再会】 - 3

P M 1 0 時 0 5 分 旧政府施設敷地内

サイドに大きく『CBSF』と書かれた特殊装甲車は、  
高圧電線の張り巡らされた柵を一周し、けたたましいエンジン音と  
共に

助走をつけると、来るものを拒む金属製の重厚門を突き破った！

ドウルドウ・・・！グウウン！グウイイイイーン！！

「何かに掴まれ！一気に目的地まで突破するぞ！！」

「・・・ッ！」

力づくでこじ開けた門への衝撃が車体に恐ろしいほどの強振動を起  
こし

乗車しているメンバー全員の身体は否がおうにも激しい衝撃に襲わ  
れる。

強化ガラスの外に見える闇の世界を眺めることもなく装甲車は  
エンジンをけたたましく鳴らせると止まることなく中央に伸びた通  
路を

躊躇することなく、まっすぐ進んだ！

ガサツ！バリバリッ！バキッ！バキバキッ！

通路をふさぐように生えた大木に装甲車がぶつかると、大木は音を立てて

その大きな体を四散させ、激しく破片があたりの通路や壁や電磁柵に当たり

無残な残骸を撒き散らしている。

ガンッ！ガンガンッ！ガッッ！

大量の軽金属や木の破片が、装甲車の強化ガラスの窓にあたる。

これには強行突入には慣れていないはずのDチームの隊員達も

強化ガラスに当たっているものを見て無意識に視線が運転席に行く。

Dチームのメンバーはその光景に声や表情さえ変えずにいるが、

内心、ドライバーのその『過ぎる荒運転』に動悸を隠しきれない。  
い。

なぜなら、今現在装甲車が受けている衝撃の多さには、

今までの突入作戦では感じたことのない驚くべきものがあつたからだ。

装甲車後部座席の一部にもたれ掛かるように

掴まっていたレンもこれには動悸を隠しきれなかったのか

助手席にいるパッショーナに大声を張り上げた。

「もうちょっと安全運転できないのか！」

「激しいのが性分だね！嫌いじゃなからうー！」

「空挺部隊との連絡もあるし、少しゆるめたら・・・」

ガンッ！ガガガッガッ！

レンが喋ろうとした瞬間、大木の破片がフロントガラスにぶつかる！強い衝撃が座席を立て喋っていたレンを襲い、レンはそのまま衝撃で

座席にスッポリ入る具合で座ってしまった。

「無駄口言ってるよ舌噛むぞロシア野郎！」

「ぐっ・・・なんだと！運転手！早くスピードを緩める！」

「わかってねえな。俺の部下に貴様の命令が聞けると思うか？」

「化け物に殺されるのもゴメンだが、スピード違反で味方に殺されるなんて冗談じゃない！」

「冗談？そいつは人生において一番愉快なことだぜ！スピードあげな！地下で遅れた分、取り戻すぜッ！」

グイイイインツ！グウイイインイン！

さらにけたたましいエンジン音を上げ、スピードに乗る装甲車。

「ロシア野郎は、メインがくるまで御上品に黙って座って待ってやがれ！」

「チツ・・・楽天家のクソイタリア野郎がッ！あとで始末書覚悟しておけよ！」

二人の怒号とも思える言葉の掛け合いが装甲車を包む。

およそ今回の作戦に対して緊張している全員へのリラックスを促したいのだろうか？それにしても荒療治だ。

レンの言葉に少し笑みを浮かべると正面に見えてきた円柱状の建物を発見し

何かを制する様にスツと息を吸い込むパツシヨーナは、視線を前へともって行き、

息を吸い込むと空に向かって放つように口を開いた。

「へっ上等！なさけねえ理由だが、生き残ってやるよ！始末書のた

めにな！」

パツシヨーナの声が聞こえると、車はスピードを緩め始める。どうやら目的地に着いたらしい。

二人の隊長達のやり取りを見ていた隊員たちの目にも、その円柱状の巨大な建物が確認できた。

PM10時15分 多目的研究施設「ガイア」入り口

外の暗闇を切り開くように

装甲車がなぎ払った大木などの破片が当たりに巻き散らかされた通路の終わりには、巨大な円柱型の施設が存在した。

### 政府公認多目的研究施設「ガイア」

旧S県の統合化が囁かれていた時に建築が完了した、国立の多目的研究施設である。

当時最先端の科学技術の粋を集めて作られた総合研究施設としては最大のもので、

半径400m、全長80mの円柱型のデザインで全10階層構造。地上2階層と地下8階層に分けられた建物内部には直径200mもある温室、マイナス50度まで完全に室温を下げられる冷室、

人工的な擬似太陽を作り出すライトと変異型土壌を用いた

ケミカルバイオ農場などなど、150もの専門的な研究室がありそれぞれの研究にあつた施設設定をするために、独自の発電システムや  
3000もの排気塔とコンデンサーによる排気清浄循環システムを備えており、  
空調システムも24時間、選出されたスタッフによって完全管理されている。  
地上2階層の屋上にはヘリポートが完備されており、  
どうやらここから空挺部隊が進入するようだ。

ガイアの周りの視界は割と開けており、ぼつぼつに伸びた雑草や死体が平然と横積みされていた一般道とはまた違う  
人の手が入っているような印象を抱かせる。

「なぜココだけ整備されているのか？」

隊員達は目の前にそびえる巨大建造物ガイアを見て一斉にそう思った。

一年間ほぼ放置状態であつたこの地域にあつて  
深く生い茂る森林地帯の真ん中に整備された区画。  
隊員達が疑問を抱くのも当然であつた。

比較的新しそうな白色の壁は少しくすんでいるが  
まだその白さを保っているところを見ると  
何か特殊な加工をされたものなのだろうか？

「全員突入開始！」

隊員達はそれぞれ怪訝そうな表情を浮かべていたが、チームの隊長であるレンの言葉で一気に現実に戻され、張り詰めた表情に一瞬にして戻る。

「いくぞ！」

「了解！」

総勢9人の隊員達は声を合わせると、張り詰めた表情を浮かべ、それぞれの決意を固めると、次々と足音を立てて、その物言わぬ建物『ガイア』の入り口へと吸い込まれるように消えていくのだった。

戦いは始まる。目的の物を奪取するまでは脱出をも許されない。非情の作戦。命の保障はない。

あるのは確実に襲い掛かってくるこの『ガイア』の中にある化け物との戦いだけであった。

PM10時18分 多目的研究施設ガイア1F 西側入口

ガイア内部に突入すると、全体的に白を基調とする配色の壁が通路に沿って永遠と伸びるように配置されている。内部は外とは違い煌々とライトが点灯しており、相当の明るさを保っている。

発電所も兼ねているこのガイアならありえる話だが、外の暗闇の状態から考えると、どこか不思議だ。

西側入口から入った9人の前には、道が3本に分かれており正面に直線に伸びる通路は、中央に設置されたエレベーターを降りるためのものだろう、天井に設置された道案内の白いプレートに、矢印で『中央エレベーター』

『実験室101』『110』という名前が指し示されている。

もうひとつの道は円柱状の建物を反るような

二本のカーブラインを描いていることから

他入り口や、側面に設置された研究室に行くためのものだろう。

天井に設置された白いプレートには『研究室111』『124』

『ロッカー室』『研究員用休憩所』『警備員詰所』と書かれている。

「エレベーターに向けて前進！周囲警戒怠るな！」

「さて、いきますかねっ・・・と」

「さっさと行くわよ貴美子！」

「あ、ケリーさん待ってくださいよ」

レン、フィクシー、ケリー、貴美子が正面の通路に向けて走り出す。それを後ろから見ていた綾香はポツンとつぶやく。

「…出てきなさい化け物：一匹残らず丁寧に『狩って』やるわ…」

「…」

怪我も気にせず銃を持ちながら軽々と走り出す綾香を尻目にパイは緊張感をものともせずは無表情で綾香の後ろにつくように平行して走っていく。

「…死と対峙してるにしては元気すぎる」

深くため息をつくようなその言葉をポツンと放つとパイは再び口を閉ざし、通路を走っていく。

しかしパイのその表情には、なぜだかわからないがこの作戦を通して見たこともない何か『陰り』のようなものを感じざる終えなかった。

「パツシヨーナ隊長、我々は後方で退路確保を」

「…三人で確保するってのも難しい話ですね」

「Retrしんがりoguardiaは任せなDチーム、さっさとブツを手に入れてきな」

Dチームの後方をゆっくりと動き出すAチームのパツシヨーナ達三人。

不安や焦燥感で一杯な心の中の暗闇とは反対に  
まばゆいほど煌々としたライトだけが彼らの全身を照らしていた。  
これから起こる惨たらしい悪夢のような出来事をまるで皮肉るよう  
に…。

P M 1 0 時 1 8 分 多目的研究施設ガイア屋上

ダダッ！ダダダダダッ！ズガガガガッ！ダララララッ！

屋上の一つのヘリポートに暗闇を照らすライトの下

外の静寂をぶち壊すような、とてつもない数の銃声が聞こえる。

『C・B・S・F E・TEAM』と背中に書かれた黒の戦闘服の  
何人かが巨大な何かを囲むような姿が見える。

巨大な何かの周りには何人かが血を流して拉げた様な無残な姿で絶  
命している。

「撃ち方やめ！」

銃声が鳴り止むと火器を使うことによって起こった  
白い粉塵煙がだんだん引いていく。

粉塵煙から出てきた一つの巨大な影。

それは人間に酷似したものであった。

屈むように手に持った

人間が持つには大きすぎる、幅40cm長さ2mほどの剣のような  
金属の塊が

野外用ライトに反射して鈍く光る。

「馬鹿な・・・！あれだけの銃弾を受けて平気だと・・・！？」

「再掃射用意しろ・・・」

うろたえるEチームのメンバーを尻目に、真ん中の影は

ゆっくりとその大きすぎる大剣を背中の中のほうへ持っていく。

「グオオオオッ！」

震えるような雄たけびと共に疾風のように飛び出した影は

正面にいたEチームの隊員の一人に向けてその大きすぎる大剣を  
いとも簡単に振り下ろした。

グシャッ！

ブシュルルルッ・・・

鈍い音を立てて物言わぬ肉塊へと変わる戦闘服を着た人間。  
吹き出る大量の血は大剣をひりつくように赤く染めていく。

「ッ・・・うつ・・・撃てッー!!」

思わず声にならない声を二、三度あげる指揮官らしき人間が言葉を  
放つ前に

隊員達は恐怖からか、その巨大な影に対して銃を放つ。

ダラララッ！ダラララララッ！！！！

キンッ・・・キンッ・・・キュインン！キュイイイン！

ブンッ！

ドグシャ！

ブンッ！

ズガッ！

ズゴオオッ！

グベシヤッ！

ビタビタッ！

ビタビタビタッ！！

銃弾が金属にあたって跳ねる音が聞こえると

そこに居た4人の隊員がまるで虫けらのように全身からほとばしる血を撒き散らしながら一人は真つ二つに、一人はたたきつけられて肉の塊と化し、横に陣取っていた二人は横なぎに払われた大剣に足ごと斬られ、おびただしい血流を冷たく湿った床へと流している。

「た・・・たすけて・・・たい・・・ちよう・・・たすけ・・・  
ぐわあああああああああ！」

銃を持ちながら隊長と呼ばれた人間のほうへ向き、助けると叫ぶ隊員。

だが、その言葉はむなしく空に放たれ次の瞬間には

すがるように這いずっていた胴体は大剣を突き立てられていた。

「・・・そんな・・・ばかな・・・」

隊長と呼ばれた人間は、大剣によって部下の体を開けられた穴から噴出する血を浴びながら、隊長は目の前にいる化け物めがけて震えるような

声でこういった。

「ハツ・・・ハハツ・・・馬鹿げてる・・・こんな化け物が・・・この世に存在するなんて・・・俺は馬鹿げた夢を見ているんだ・・・そうに違いない・・・早く夢から覚めろよ！！！！」

最後に残された隊長が銃に手をやると、巨大な影は躊躇することなく隊長の体を大剣で貫いた。

ブシューウウウウ！

血と硝煙の臭いが充満するヘリポートで

その巨大な影は、落ち着き払った様子でその場を立ち去る。

野外用ライトに影が着ている服の胸の金属製プレートが光る。

『HBOW - 01 ヘラクレス』

それは人間が生み出した地上最強の神の名を持つ悪夢だった。

PM10時26分 研究施設ガイア1F 中央エレベーター

巨大な研究施設ガイアの1Fは不気味な静寂に包まれていた。内部は程よい数のブルーを放つ蛍光灯に照らされ通路の隅々まで綺麗な青白色を反射させている。

その眩しさは、化け物の出る地下鉄道や死人の出歩く駅の『闇の世界』とは比べ物にならないほど明るく、今にも奥から人がゾロゾロと出てきそうな長い通路は照明機材と相まって、どこかひと気のある都会のスタジアムに来たような錯覚を覚えさせるほどだった。

中央エレベーターに続く長い一本の道の両側には、それぞれ目的の違う研究室であろう部屋のドアがあり一つ一つに金属のプレートがはめ込んである。

『109 - 水耕栽培実験室』

『110 - 水棲生物実験室』

と書かれたドアを、大小様々な銃火器を軽々と持ちながら周囲を警戒し小走りに通り過ぎた九人の前には巨大な三つの白と銀塗りのエレベーターが現れるのであった。

「これがガイアの中央エレベーターか：流石に大きいな」  
隊長であるレンが足を止め、突撃銃AKMを肩にかけるとじつくりとエレベーターの外部を見始める。  
どうやらエレベーターの端末を探しているようだ。

エレベーターは、通路ごとにそれぞれ三方面に分かれていてその壁やドアには白と銀の二つの色がバランスよく配色されておりともすれば機械的になりがちなエレベーターという素材を古代の西洋の神殿を思わせる美しい円柱に仕上げている。

「なかなか良いセンスの内装じゃない？外から見たときは威圧感さえあつたけど」

ケリーが散弾銃ベネリM4スーパーを腕で抱えるように持ち

エレベーター周辺の通路を警戒しつつ、

目に入った美しい白と銀の美しい円柱のデザインに

一瞬目を奪われ、任務中だと言うのに私語同然の率直な意見を浮かべる。

「化け物の巢のど真ん中にしちゃ豪華すぎるぜ。意外っちゃ意外か？」

ケリーと同じ通路を警戒していたフィクシーは

ケリーの率直すぎる感想に対して、緊張感をほぐすためにも会話に応答する。

しかし、肩から提げたカービンタイプの突撃銃M4A1は下ろさずに常に腰より上の位置で構えている。

少し震える利き手の右指が、まだ化け物と遭遇したときの恐怖心を他の隊員ほど拭い去れていないことを無言で知らせている。

ズツ…ズツ…

「…静か…過ぎるわ」

「そうだな…そろそろEチームとSチームの足音が聞こえてもいいころだが…」

重苦しく逆側の通路を見張る綾香とパイ。

たしかに自分達より早くここにたどり着いているはずの

EチームとSチームの姿はまだ見えない。

二人の表情は重く。瞳は氷のような冷たさを保ったままだ。

「…？何かしらこれ…この通路だけひどく濡れているわ…まるで誰かが歩いた跡みたいだけど…アッチの通路へ続いている…？」

綾香は大量の水滴がついた床を発見し、不思議そうな表情を浮かべる。

二、三回周りを見ると、どうやら水滴がついているのはこの通路だけらしい。

「どうしたQUEEN、何か見つけたか？」

綾香の不審な行動に、パイが話しかける。

まるで食い入るように床を見る綾香の姿は

パイでなくても怪しがる場所であろう。

「いえなんでも…ちょっと、この床の濡れ具合が気になっただけよ」

「…外は雨だったのを忘れたのか？ボケるのはまだ早すぎるぞ」

パイのいつもは見せない素っ気無い軽い応答に、

綾香は納得するような表情を浮かべたが、内心は納得していなかった。

たしかに外はさっきまで雨だった。

そう思えば普通なのだが、あまりにも大量の水滴が人の足を象ったように

通路にびっしりとくっ付いていることが不思議でならなかった。

自分達を通ってきた通路にそれはない。

それが、ますます綾香の気持ちに疑問を抱かせていたのだ。

ガンツ！ガタンツ

そのとき、レンが何かを発見したように

エレベーターの壁の一部を食い入るように見つめた。

付属の小型コンソールで静寂のフロアを前に

カタカタと小気味いい音を出しつつ何か作業をしている。

「…これがスイッチ端末か。一号機用、二号機用・・・チツ、どれも破壊されている。どういうことだ？」

円柱状のエレベーターの白銀の壁の中央に

基盤が丸のまま投げ出されたような形で露出する。

レンの憤り加減を見る限り、どうやら破壊された形跡があったようだ。電気は通っているが、エレベーターは正常に作動しない。

「基盤が壊されているということはSチームかEチームか・・・？」

レンは少し考え込むと、フツと基盤の周りを覗き込む。

化け物が傷をつけたような傷跡じゃない。

2、3の部品を削り、回線を切り基盤をショートさせている繊細さ

から

それ相応の技術をつんだ技能者か、回路に詳しい人間であることをその基盤は示唆していた。

「隊長、こんなものが…」

その様子を後ろから見ていた貴美子が、研究室のドアから1m程離れたあたりに落ちていた比較的新しそうな長方形の2枚綴りの

メモのようなものをレンに見せた。

「うん…？これは…？」

メモを渡されると、レンは文章を読み始めた。

#### 【研究員のメモ1/2】

『110 - 水棲生物実験室レルネの沼で保管していたH・BOW試作品

H・BOW・P2ヒュドラがチタン製の防護壁を破った。

レルネの沼で報告を行っていた研究員4名の死亡を確認した。

非常事態として地下8層のメイン管制実験室タルタロスに連絡をとったが

まったく連絡が取れない。いったいどうなっているんだ。

チーフと相談した結果、状況が飲み込めない現状の

危機が去るまで1Fの研究員全員は

全員地下7層のシエルタールームで待機することにした。

念のため、中央エレベーターの1F外部基盤は破壊した。

知能の発達したヒュドラが下の階層に来ては厄介だからな

もしこれを読んでいる逃げ遅れた研究員が居たら

警備員詰所の非常用貨物昇降機を使ってくれ

あそこなら非常時でも稼動しているし、我々が空調を操作して  
今頃50度以上除湿の高温状態にしておく。

これなら、あのヒュドラも迂闊には近づけないはずだ。』

「・・・(H・BOW:すでに開発段階だったか)」

沈黙し始めたレンは、何か考え込むようなそぶりを見せると  
何かに焦るような感じで少し表情が暗くなる。

「おいKINGさんよ！ちんたら読書に浸ってる時間はねえぜ。エ  
レベーターはまだ動かないのかよ」

フィクシーの声が周囲に響くと、レンは慌ててメモをベストの内側  
にしまう。

そして、部下達が周りを警戒する中ようやく二枚目のメモを見る。

### 【研究員のメモ2/2】

『番号 H・BOW・P2

名称 【ヒュドラ】

識別 水棲生物複合媒体型

体長 182cm (首を含めた) 全長335cm

体重 265、8kg

食欲 非常に旺盛 日に200〜220kgを摂取

知能 中(レベル4程度の機材は使用できる模様)

性格 凶暴。濃硫酸を吐きかけることあり。

特徴 9つの頭を持つ。生命力高。低温多湿を好み、乾燥高温を

嫌う。』

「…むう、しかたないか」

少しため息まじりの声と共にレンは立ち上がり

そこにいるメンバー全員に伝わるような声で言った。

「どうやらここで『緊急事態』が起きたようだ。エレベーターの復旧は外部からは無理のようだ」

「K I N G、復旧ができないって…おい、どういうことだよ？」

あまりにも唐突な話で、少し面食らっていたフィクシーが声をあげる。

フィクシー以外の他の隊員も、同じような表情をしている。

たしかに納得できない話なのだ。

前情報で聞かされていた話だと、このガイアには『生存者』は居ないはず。

たとえば化け物がここに来てエレベーターそのものを破壊したならわかる、

だが美しい白銀の壁や清掃状況を見ても、化け物が通ったような跡は無い。

「我々は警備員詰所の貨物昇降機から地下8Fへと向かう…」

ドガガッ！ドガガガッ！！

そうレンが言いかけると、後ろでけたたましい銃声が聞こえた！  
Aチームが守っていた後方から聞こえる銃声の意味。  
それは『倒すべき敵』が現れたことを知らせていた。

スタツタツタツ！

Aチームの隊員と思われる三つの影が、激しい足音をたててこちらに向かって走ってくる！

「逃げるDチーム！コイツは我々の手に負えない奴だッ！」  
パツショーナらしき声が聞こえると、三人の中の一人の人影が立ち止まり  
後ろから来る何かに対して突撃銃を発砲し始めた。

ズダダダッ！ズダダッ！

銃弾の先が照明に照らされ、その奥に存在する化け物らしい  
巨大な人影に向けて発砲されたが、空薬莖が床にむなしく落ちる音  
だけが  
研究室の壁を反響して聞こえる。

ピチャツ・・・ピチャツ・・・ズル・・・

人影は何も無かったかのよう

Aチームの隊員めがけてゆっくりと歩いてくる。

だんだん照明に照らされて、人影の全容がうつすらと浮かんでくる。

その姿は人間に酷似していたが、

全身が黒ずんだ緑色と灰色に分けられ

上半身には2つのか細い腕が存在し、

人間の顔半分のようなものが首の付け根に生えている

下半身には何か藻のような鱗が張り付いていて、

足元からは粘度の高そうな水適らしきものが

ポタポタと落ちている。

顔半分の上には巨大な蛇のような太く長い九つの首が

天井に向かって伸びていて、口らしきものを開閉させて

照明に当たってギラリと光る鋭い牙が光り、ニョロニョロと

物体一つ一つが嫌悪感を掻き立てるような動きをしている。

「この化け物野郎が！！その長つたらしい首を狩ってやる！」

Aチームの隊員が弾丸の切れた銃を化け物のほうへ投げると、

ベストから大型のナイフを取り出し、まるでヤケを起こしたかのよう  
うに

化け物に向かっていく！

「ダメ！その化け物に近づいちゃ・・・」

Aチームの女性隊員のレナが化け物近づいていく隊員を横目で見ながら

声を放つが、すでに隊員は化け物の首の近くまで寄っていつていた。

ピチャツ・・・ベチャツ・・・

「この野郎ツッ！！！」

ブンツ！

隊員がナイフを振りかざした瞬間だった。

シュルシュル！シュルシュルシュル！

化け物は蛇の首を隊員に向けて

高速で放つようにしならせて、隊員の体に巻きつけた。

「な、なんだ！くそ！身動きが・・・うじツ！ぎゃあああッ！」

バキッ！・・・バキバキバキバキ！

骨がきしみ、折れる音が聞こえると蛇の首は巻き絞めるのを止めて、絶叫をあげる隊員の軟体生物のように崩れ落ちた砕けた体を見てまるでニヤツと笑うように口元を動かすと、その隊員を再び蛇の首で持ち上げた。

ピチャツ・・・ピチャツ・・・

「た・・・す・・・け・・・て・・・」

隊員の言葉にならない声もむなしく蛇の首は隊員の体を空中に投げると、容赦なく体をくねらせ体をむさぼり始めた。

見るに耐えない光景がD、Aチームの目の前に広がった。

隊員の体は化け物の首に残忍にばらばらに食いつかれ腕や足や首が食われると、最後には真ん中に存在した化け物の首に体ごと丸呑みにされてしまったのだ。

「あ・・・あ・・・」

「止まるんじゃない！お前もああんりたいのか！」

光景を目の当たりにし、いつの間にか足が止まっていたAチームのレナを

隊長であるパツシヨーナが無理やり腕を引き、逃げさせる。

「全員警備員詰所まで退避！あいつには構うな！」

レンがそう言うと、光景を見ていたフィクシー、貴美子、ケリー、パイは

作動しないエレベーターの先に見える通路を走り始めた。

その表情に、誰一人余裕は無かった。

目の前で行われている化け物の狂気の宴を見ていたからだ。

しかし、一人だけそこに立ち尽くす者が居た。

「あんだ達化け物は一匹残らず狩ると決めたのよ…例外は無いわッ  
！……！」

怒号にも似た一言を放つと、綾香の体はすでに化け物のほうに向かっていた。

「あ、綾香何をッ！」

「貴美子ッ！振り向かないの！早く行くわよ！」  
綾香の走る姿を見て貴美子は振り返ろうとしたが  
ケリーに腕を引っ張られ、方向を変えられてしまっ  
た。ケリーの表情に決して余裕はない、今行ったら貴美子もやられてし  
まうと  
思ったからだろう。

「QUEEN…チツ馬鹿がッ！」  
綾香の姿を横目で見たパイは舌打ちすると  
綾香の後ろを追いかけるように体を翻し  
化け物のほうへ向かっていく。

ピチャッ・・・ピチャッ・・・

逃げてくるパッションナたちをも追い抜き  
綾香とそれを追うパイは、  
ゆっくりと近づいてくる化け物の前へと歩を進めるのであった。

## シナリオ【再会】 - 5

PM10時40分 多目的研究施設ガイア1F 西通路

果てしない闇の中を任務のため走り出す隊員達が  
エレベーターの作動に手間取っていた時、  
すべての命を刈り取るために、死神は隊員達に  
蛇の首を九つ持つ神話の生物の名を持つ奇形の化け物  
【ヒュドラ】を差し向ける。

陰鬱で奇怪な化け物が垂らす死を意味する不気味な水滴の音が  
静寂な通路に共鳴して嫌がおうにも耳につく。

そして隊員達に死を覚悟させるには  
十分過ぎるほどの光景が目の前に広がった。

人間の体がまるで隊員達の恐怖を煽るように  
ヒュドラの巨大な九つの蛇の頭に肢体を食らわれ  
残った胴体は丸呑みにされたのだ。

己の目を疑いつつも、何度も心の中で覚悟していたはずの  
『不条理な現実』を目の当たりにすることで  
人間はすべての神経を一瞬凍らせる。

それは純粹な恐怖への表れ。誰にも止めることのできない恐怖への  
反応。

しかしそれを振り払って感情を爆発させるものがいた。  
化け物を見るや否や、いつの間にか体を瞬時に化け物のほうへ向け  
加速をつけて走り出した綾香、その人だ。

瞬間的に彼女は一つの感情に支配される。

おびただしいほどの化け物への憎悪。

すでに人間としての己の限界など考える余地もないほど

彼女は憎悪を増幅させて、化け物へと駆けていく。

神話の生物の名を持つ化け物に、人間としての彼女の抵抗が始まる。

ズドドドッズドドドッ！

綾香の持っていたMP5Kカスタムから轟音をあげ数十発の弾丸が  
放たれる！

開け放たれた銃口からはまるで堰を切ったように火花が上がり

同時に硝煙と火薬の匂いがあたりに立ち込め始めた。

「・・・ビュビュウウ・・・ヒュウウ・・・」

風が共鳴するような不気味な声が上がると

弾丸はヒュドラの右胸と左足に当たるが、小さな爆発が起きると共に  
褐色半透明な化け物の体に吸い込まれるように形状がわからないほ  
ど変形し

まるで蒸発するようにポロポロになっていく。

そのゼリーのようなヒュドラの体から少量の蒸気が立ち上ると  
嫌悪な腐臭があたり一面に漂ってくる。

ピチャ・・・ピチャ・・・

何事も無かったようにヒュドラは綾香たちの方へと歩を進めてくる。ゼリー状の体内から少しずつ垂れている奇怪な褐色の水滴が床に落ち静寂になった通路全体を響かせている。

九つの蛇はニヨロニヨロと活気に動いていて、四方八方にその長い首を伸縮させている様は貪欲に次の獲物を探しているという感じだ。

スツ・・・カチャツ・・・

「喰い足りなかったようね...いいわ、ありったけ注ぎ込んでやるわよ！」

すばやくマガジン抜き、予備マガジンを入れ替えると

再びMP5Kカスタムを構える綾香。

Kウイルスに犯された脅威の化け物用に製造された特殊火薬弾丸でさえも

利かなかった相手だというのに、綾香の表情は嘲笑するような卑下た笑みを

浮かべている。

ガッ・・・グッ！！

「待て！QUEEN！奴は一筋縄でどうにかなる相手じゃないぞ！」  
後ろから走ってきたパイが綾香の肩に手をかけグイッと引き止める。

「だからこそ『狩り甲斐』があるってものよ！」  
しかし、綾香はそれを振りほどくように肩をならせると  
パイの手を強く振り払い、ヒュドラのほうへ再び銃を構え持っていた  
MP5Kカスタムを撃ち放った。

ズドドドッズドドドドドドドッ

ガガッ！ガチッ！チュイン…ジユワァ…！

果てしない轟音と嫌悪な蒸気が通路全体に共鳴と充満を促し  
ヒュドラの周辺には蒸気で白い霧のような爆煙が巻き上がり  
その周りの壁はヒュドラの蛇の首にあたって跳弾したと思われる  
弾丸の跡がヒシヒシと残り、床には得体の知れない褐色の液体が  
ビタビタと大きさまざまな池を作り、薄汚く広がっている。

シューシューウ…カランカランカラン…

ズウウウン…

MP5の先端から火花と轟音が鳴り止むと、  
水蒸気と爆煙から巨大な影が沈むように倒れ、巨大な物体が  
地面に落ちる音が聞こえた。

うつすらとヒュドラの特徴的な蛇の首あたりがぐったりしているのが見える。

「…これで終わり？意外とあっけなかったわね」

大きな影が倒れこむのを見た綾香は「つまらない」と言いたそうな表情で

後方で立ち止まっているパイのほうに向かって体の方向を変えると空になったマガジンを無造作に床にポロツと落とす。

キイイイン……

「…？（なにこの音？）」

綾香は聞きなれない音を耳にする。

キイイイン……

「…そうか、撃ちすぎて耳鳴りがするのね」

さっきまでフルオート射撃を行っていたMP5Kから立ち上る

煙を見てようやく綾香は自分の耳の鼓膜が共鳴し

聞こえにくくなっていることに気づいた。

スツと方耳を左手でふさぐと、なるほどたしかに

音叉で軽く叩いたような共鳴音が聞こえる。

「やったわよACE。化け物を倒したわ」

綾香がパイに向けて手を上げ、少なからずな笑みを浮かべる。彼女は自分の心の中で『憎き化け物を倒した』という言いようもない達成感に包まれていたいたのである。

「おい！…後ろを見…奴…まだ…… QUEENッ！」

パイはこちらに向かって何か合図をするようにせせこましく手と指を使って指示をしているが

今の綾香の耳には殆ど聞き取れなかった。

どうせパイの話は聞かなかった事に対する、

どうでもいい皮肉の台詞だろうと綾香はフツと笑顔のまま持っていたMP5Kに手をやる。

スチャッ…

再び空になったMP5のマガジンを手ごたえで感じた綾香は素早く次のマグチェンジを行おうとした…

…その時、パイの絶叫ともいえる大声が通路中に響いた。

「化け物はまだ生きてるぞッ！」

「な!？」

その声が聞こえるや否や、後ろからとてつもない轟音と共に何かがつごめいている気配を感じた綾香は即座に後ろを振り返った。

フシユアアアア!・・・フシユウウウツ!

今まで死の静寂を守りきっていたヒュドラが爆煙の中から抜け出しゼリーののような体は弾丸が当たったことで変形したのだろうかまるでいびつに膨らんだ風船のような体型になり今まで手であったものは足へと変化し、四足歩行動物のような動きで再びその奇怪な体をしならせ、両足を床に弾かせ九つの蛇の頭をくねらせて綾香の方へ突っ込んでくる!

「く...!そっ！」

間に合わないと思って地面を思いっきり踏み込み後ろへバックステ  
ップ

しながら急に銃を構えようとした綾香だったが、

化け物のスピードはそれを上回るほどに格段に上がっており、まるで獲物を付けねらう恐ろしい肉食獣のようなスピードでこちらの動きを捕らえ、蛇の首をしなければ銃を支えている綾香の左手に襲い掛かった！

フシユアアアアア！！

「間に合わな…！」

うぐっ…あああああああ！！

おびただしい鮮血が通路へと放たれると同時に綾香の絶叫が通路に木霊した。

巨大なヒュドラの蛇の頭の一つがギラギラと光らせた牙を突きたて綾香のか細い左腕に噛み付いたのだ。

「QUEEN ツ!!!」

パイは絶叫すると通路の床を蹴り上げ、化け物に飛び込むようにジャンプした！

ガシンッ！ダララララッ！

「ち…QUEENから離れろ!!!化け物め!!!」

パイは空中で、とてつもない痛覚に絶叫する綾香に噛み付いている蛇の頭の

根元めがけて、手に持っていたUZIカスタムを構え撃ち放った！

ダンッ！ダンダンダンダンッ！ボンッ!!!

ヒュドラの蛇の頭の根元をUZIカスタムから発射された特殊弾薬が貫通し、瞬時に小爆発を起こした！  
緑とも赤とも見分けのつかない気色の悪い液体が再び通路の床をぬらす！

フジュ！・・・フジャアアア！

ヒュドラは絶叫を上げると綾香の左腕を離し  
その巨大な蛇の頭を床や壁に向けてのた打ち回らせる。

ドンツ！ガンツ！ガシャンガシャンツ！

あたり一面にブルーの蛍光灯や、研究室のドアを開けるために用意された

簡易型機材がけたたましい音を立ててバラバラの破片になって床に落ちていくのが見える。

すさまじい粉塵が首が動くたびにおこり、  
ヒュドラのゼリーの体は崩れ、しばらくすると再び蛇の頭は物静かに床にズシンという大きな音を立てて崩れる。

「ぐツ・・・あああああ！！！！！」

「おい！くそっ！・・・QUEEN！！」

遠目からでもわかる綾香の左腕から流れる鮮血。流れ出す血量と大きく開いた傷痕から見てもその危険性は、日ごろナイフなどの殺傷武器を使っているパイからすれば致命傷とでも呼べる大きな傷であることは明白だった。

「あぐッ…！ぐッ…！」

「QUEEN！大丈夫なんて聞かないぞ！泣いて喚いてもいいから今は走れ！」

蛇の頭に噛み付かれた左腕から血を流しながら

その場に痛覚を堪えるように体を震わせている綾香に駆け寄ったパイは、

綾香を見ると一言だけ一喝するように声を上げると無傷である右手をとり、そのまま綾香に肩を貸すと立ち上がらせ、背負うように早足で進路を変え、隊長達の待つ警備員詰所へと走ろうとした…

タツ…タツ…タツタツタツ…

しかし、走り始めたその瞬間

何か大きな液体が物凄いスピードでパイ達を横切るのが見えた。

ビシャッ！ジュワジュワワワッ！！！！

液体は重厚で強固そうな床に落下放物線を描いた後ぶち当たり  
その床は多量の蒸気を発生させながらそこだけポツカリ穴の開いた  
ように融解してしまう。

そして、パイは恐る恐る液体が放物線を描いてきたと思われる場所、  
つまり後方に倒れているはずのヒュドラのほうへ目をやった。

フシユルルッ！フシユウウウッ！

「こ、この化け物・・・！不死身かッ！」

パイの眼前に広がる巨大で奇怪な形態の生物。

いつも強気な発言や行動で他の追隨を許さなかったはずのパイが  
思わず、その恐怖に一瞬顔が引きつってしまっている。

パイの中で刹那『絶望』という言葉が浮かぶ。

このような生物がこの世に存在すること、それこそ絶望ではないか。

生物と呼ぶにはおぞまし過ぎる

その巨大な蛇の頭を持つ化け物の姿は  
先ほどパイのUZIで受けた銃弾で、再びゼリーのようなボディが  
変化し  
すでに形状は動物からアメーバに近くなっているようにも見える。

フシユルルルル・・・フシユシユシユ・・・

九つの蛇の首をまるで愉快そうに躍らせているヒュドラ。  
パイの肩には、今にも絶命してしまいそうな綾香が一人。

「…絶体絶命か…」  
ポツンとつぶやくパイは綾香のほうを見る。

「ツッ！…え…ACE…は…やく…わたし…ぐ！…置い…て…逃げ…  
て！」

綾香は激痛に耐えながらも、パイに向けて  
一つ一つの言葉を精一杯言い放った。

自分の油断と独断が招いた危機。

過失は自分にあると認め、早くパイをレン隊長の元へ  
少しでも『絶望を和らげる』場所へと向かわせるべきだと思ったか  
らだ。

「ぶっ…」

パイは綾香の顔を見ると、何かを悟ったようにスツと綾香を通路の壁の影に立てかけるように置いた。

「生き残るぞ…必ずな！」

必死の状況で、パイは思いつめるような表情を浮かべると、何か覚悟を決めたように深呼吸をし、氷のような表情を再び張り詰め始めた。

「馬鹿げた悪夢に終止符を打ってやるよ！こい化け物！！！」  
UZエカスタムを構えると、パイは化け物めがけて絶叫するように言い放った。

フシユルルルルッ！！！！

巨大な化け物の体が再び  
通路を共鳴させるような咆哮をあげながらパイに向かって動き出した！

## シナリオ【再会】 - 6

PM10時47分 ガイア1F 東通路

薄暗い夜の闇を背景に電灯が煌々と光る東通路には次第に白衣を着たここの研究員であろう死体の破片とおびただしい血液が、通路中に縦横無尽に広がっている。それはまるで血液のプールのようにであった。

パシャン！パシャン！パシャンパシャン！

隊員達が走るたびに血液が跳ね上がり、一步一步と踏み込むたびに嫌な水滴音がなり、黒塗りのブーツは赤紫色で染めていく。

東通路の行き止まりに差し掛かり、警備員詰所へと移動しようとする。続きの別の通路へと進路を変更した。

PM10時51分 ガイア1F 共通周回通路

ガイアの周回を描くように長く伸びた通路へと出た隊員達は絶句した。

そこにはさつきであった異型の狩人に為す術も無く獲物が『狩られた後』があった。

そう。

絶望と呼ぶに相応しい、まるで地獄のような光景が。

「……………！」

目を疑うような赤紫色の血液の絨毯が目の前に広がり先頭を走っていたパツシヨーナとレンは思わず歩みを止めてしまった。

彼らが見たもの。それは…

衝撃で首と胴体が変形した死体や、上半身だけ化け物に食われてしまったように通路の真ん中に転がる下半身だけの死体、その横の死体は必死にファイルを抱えながら

もがき苦しんで死んだ表情の人間の体は肩腕と片足が融解しており激痛のためかプラスチック製のファイルがひしゃげている。

数十人以上の人間が壁にたたきつけられて内臓が口から飛び出しまるで抉り出されたように頭部がグシャグシャに叩き潰され無くなり脳漿をあたりに飛び散らせ、ぐたりと床に倒れた死体の上には首から放出された赤紫の血がまるで美しいタペストリーのように壁に打ち付けてあったのだ。

「…ば、ばけものめッ！」

「…今ここで立ち止まることは出来ない、全員前進だ！」

焦りの表情を浮かべるパツショーナに対して  
レンの冷静な判断の音が全員に渡る。

隊員達は、その凄惨な狩りの後を目の当たりにしながらも  
躊躇せず、足を止めずに走り始めた。

よく見ると壁や床には、所々クレーターのような大きな掘跡が出来  
てあり、

別の場所には、ただれるように金属で出来ているはずのドアが  
融解しているところもある。

そこら中に散乱した赤褐色の妙な水滴が、おびただしい血液と交じ  
り合い

ジュワジュワと泡がたち、蒸気となって空气中に噴出されている。  
その泡から放出される蒸気が、とてつもない腐臭が通路中に漂って  
いることから

どうやらあの蛇の化け物の吐き出したものようだ。

「ひ、ひでえな・・・」

通路を走りながら耐え難い腐臭と

余りにも凄惨な光景にフィクシーが声をあげる。

「ああなりたくなかったら早く走れ！」

Aチームのパツショーナが目の前に広がる光景に目をそらしつつ  
ドアについているプレートをチェックしながら走っている。

その声と走る素振りから、必死さが伝わってくる。

どうやらレンの提示した下の階層への入り口である

警備員詰所を探すのに、血眼になっているようだ。

「パツシヨーナ隊長！後続との連絡は！？」

Aチーム所属であるレナが先を走る隊長に注意を促す。

これから1Fへと突入するかもしれない空挺部隊のE・Sチームに不死身の化け物がいることや、エレベーターが動けないこと

現在位置や、兵員の損失などの情報を渡せば

なんらかの別の手段で突入条件などを言い渡してくれると思ったからだ。

しかし、パツシヨーナは焦りの表情を浮かべ、こう言った。

「そ、そんなものは後でも出来るはずだ！今は下の階層に行くことだけを考えるッ！」

「は、はい・・・」

大きな声をレナに向けて言い放つとパツシヨーナは再び前を走りはじめた。

不思議そうにしぶしぶ引きさがったレナの表情など見る間もないほどに。

しかし、パツシヨーナを必死にさせていたのはそれだけではなかった。

「…（この俺が化け物相手に怯えているだと…！？くそつたれッ！）」

純粋な化け物への恐怖、目の前で部下を殺されて

憎しみよりも先に恐怖が先立ってしまったのだった。

目の前の凄惨な光景がパツシヨーナの心を煽るように

絶望への導きに一層拍車をかけるようだった。

その時だった。

銃声と奇妙な爆発音が西通路のほうでけたたましく鳴り響いたのは。

205

先頭を切って通路を走る、Aチーム隊長のパツシヨーナ。

その後を追う同チーム隊員のレナとDチームの隊長レン。

最後尾を走りながら、しきりに後ろを確認し

周囲を警戒しているフィクシー。

その前を走る貴美子とケリー。

全員に今の音は聞こえていたが、何も言わず再び走り出した。

その銃声と爆発音が何を意味しているのか

音を放っている者がこれからどうなってしまうかを

目の前の凄惨な光景を見ていた全員は感じてしまった。

どうなってしまうかを…知らざる負えなかったのだ。

「……（綾香……）」  
貴美子の隠し切れない不安は表情に表れ始め、走りながらもその体が小さく震えているのがわかる。

「貴美子しっかりしなさい！走るのよ！もっと早く！」  
ケリーは、震えているそんな貴美子の手をギュッと掴み  
貴美子が後ろを振り返り立ち止まりそうになるたびに  
何度も力の限り、グイッと手をひっぱり我に返そうとしている。

「……今度は……死ぬかもね……」  
誰にも聞こえないような小声を貴美子に聞こえないように呟くと  
ケリーは再び走り出した。

黒塗りの柔軟性のありそうな皮製のブーツが  
床をけたたましくけりあげると、パシヤンと跳ねるような音が  
通路全体を包んでいった。

P M 1 0 時 5 6 分    ガイア 1 F    西通路

フシユルルルツ……フシユゴアアア……

怒声とも思えるヒュドラの咆哮が聞こえると、通路に大きな影がうごめく！

Aチームの隊員や綾香、パイのUZエカスタムなどに  
今まで相当量の弾丸を食らったためか  
姿全体はもはや人間というより無機物アメーバーのようにな  
なっていたヒュドラが、その巨大な九つの蛇の首を振り回し、  
通路の真ん中にUZエカスタムを構えているパイに向けてゆっくり  
その巨大な体を  
引きずりながら、突撃をしかけてくる！

「形は変わっても動きはノロマのようだな…問題は『アレ』か…」  
パイは徐々に通路から迫ってくるヒュドラを冷静に観察していた。  
視線をヒュドラから伸びている蛇の首に向けるパイ。  
あの太くて長いロープのような首は、人間を丸呑みにするほど獰猛で  
うっかり首の射程内に進入すれば、先ほどのAチームの隊員のよう  
にとんでもない怪力で絞め殺されて捕食されてしまうだろう。

そしてさっき放ってきた金属を融解させるヒュドラの酸化液体。  
現在、唯一のスキであるアメーバー状態ヒュドラのスピードの遅さを  
カバーするように、パイとの間合いを牽制するには  
十分なほどの威力を持った武器であったからだ。

ズズズ…！ズルズル…！

重苦しくてそれでいて重厚な音が通路に響く。  
アメーバー状のヒュドラのその質量を語るには十分すぎるほどの  
威圧感のある音が嫌がおうにもパイの耳へと伝わってくる。

「……」  
その威圧感ある音に表情を歪ませること無く  
冷静さを保っていたパイは、引き続き観察を続けていた。  
しかし、じっくりと見ている場合ではないことはパイが一番良くわかっていた。  
なぜなら後ろには負傷した綾香がいる壁があるからだ。

『間違つて化け物の酸化液が綾香のいる壁に当たつたら……』

背筋が一瞬ピンと張り詰めるような気分だった。

化け物の金属が融解する酸化液がどんな強さかは  
大まかにしか記憶していないが、さっき放った酸化液の威力からい  
つて

壁ごと綾香を殺すことくらいのことには出来るだろうとパイは確信し  
ていた。

フシユルルッ！

「ちっ！考える暇は無いか……」

だんだんと近づいてくるヒュドラに対し、パイは姿勢を保ったまま  
手に持ったUZIカスタムをトリガーをうまく指きりによって調節し  
単発で箇所を変えてヒュドラに向けて射撃した。

ダンッ！ダンッ！ダッ！ダッ！

銃声は通路を反響させ、銃弾は虚空を真っ直ぐにヒュドラの蛇の首アムバーとなつて残っている半身の部分、かすかに残っている蛇の首の根元部位に

それぞれ急激な速度と共に飛んでいった！

フシュ・・・フシュルル・・・

ボンッ！・・・ジュワワ・・・

銀色の弾丸がパイの狙い通りの箇所を捕らえるが

弾丸はヒュドラの体内に沈んでいき、小さな爆発を起こし蒸発する！

半透明なアムバー部分に当たった弾丸に至っては

弾丸が溶解する光景までが鮮明にパイの目には映っていた！

そしてヒュドラは、声をあげることもなく

静かに九つの蛇の首をニヨロニヨロと散開させて、

弾丸が当たったところに首を集中させ始め、

うずくまるような格好になっていた。

「少しは食らっているが・・・」

パイは弾丸が当たったところを蛇の首で庇うようにする動きからして、どうやら

少なからずだがCBSF特製の特殊弾薬によるダメージもあるよう

だ。

今ので空になったマガジンを、パイは即座に入れ替えると化け物の様子を見つつ、胸ポケットに入っているナイフを取り出す。

フシユルルル・・・フシユルルル・・・

ヒュドラは湧き上がる蒸気と共に醜悪な匂いを放ちつつむくりとその息を吹き返すように首をぴくぴくと動かし再び体制を整えるとその巨大なアーマー部分をズシリとナイフを構えるパイのほうへ向けて進み始めた。

「やはりな・・・！ 奴に弾丸は有効ではない・・・しかし間合いに飛び込むにはあの蛇の首を突破しなくてはならないな・・・」

今までのヒュドラの行動や、攻撃の受け具合を念頭においてよりの確な戦闘方法を選択していくパイ。

いくら訓練で過酷な条件の戦いに慣れていとはいえ相手は弾丸の利かない新種の化け物。

思考をフル回転させるものの、いい答えは浮かぶはずも無い。

しかし化け物はいつの間にかアーマーの半身部分への蛇の首でのガードを解き、獰猛な蛇の首の先端をパイのほうへ向けると共に急激に首を後方へ仰け反った！

ウシユルル・・・ゴオオオオオ！！！！

「ッ?!しまった射程内か!」

ヒュドラの空気を飲み込むような奇妙な吸引音が聞こえるとパイは何かを覚ったかのように通路の右側に向けて思いっきり飛んだ!

ギョババアツ!ギョバアツ!

ヒュドラの蛇の口から半透明の液体が放たれる!

空気に触れた液体は赤褐色となり、放物線を描くと

さっきまでパイがいた床へと叩きつけるような音と共に落下する!

…シューツ…ジュワジュワ…

ヒュドラから放たれた液体はしばらくすると、

硬そうな物質で出来ていた床をまるで熱くただれた溶岩のように瞬時に液化、融解させる!

「あ、危ないところだった……チツ!とんでもない化け物だ!」  
壁に倒れむように飛んだパイだったが、なんとかそのまま体勢を立て直し

すでにヒュドラとの距離を保ってUZエカスタムを構えている。

フシユルルルッ!!!

奇妙な怒声とも思える咆哮をあげると、ヒュドラはパイのいる壁に向かって移動し、いつの間にか壁際に蛇の首を忍ばせて迫ってくる！そして液体を口から放ったとは違う蛇の首が、パイ目掛けて突っ込んでくる！

「このパイドオン力をなめるなよ化け物め！」  
そういうとパイは、急速に接近してくる蛇の首に対して体を回転させて蛇の首の下にもぐりこみ、流れるようにナイフを逆手で蛇の喉元へと突き立て流すように切り込む！

「噛む相手を間違っ たな！ 蛇野郎！」

さらにパイは右手にもったUZIカスタムのトリガーに手をやると銃口を上に向け、蛇の喉元目掛けて特製弾丸を2、3発発射する！

ダンッ！ダンッ！ダンッ！

ウギョツアアツオオオ！！

切り開かれたむき出しの内部に特製の炸裂弾丸を撃ち込まれ  
怯んだと同時に絶叫を上げるヒュドラの蛇の首！

それと同時に突き刺さったナイフを瞬時に抜き払い  
再び接近する蛇の首を避けるために華麗なバックステップを決める

パイ。

まるでその動きは、舞の達人が変幻自在に動作を変えるように流麗であった！

ズズツ・・・ズウウウン！

赤褐色の液体を流しながら蛇の首はその生命力を失うようにぐったりと

その場に重厚な地響きをたてて沈む！

シユルシユルーツ！！シユルツ！！

しかし、一本目の蛇を倒したのもつかの間

もう一体の蛇の首がパイの足を捕らえるように突撃してきた！

ウジュルルルルツ！

「フツ！さつきまでよく観察させてもらったからな蛇野郎！次はここだろウツ？」

パイはそういうと、目の前にいるヒュドラのもう一つの蛇の首が迫ってくる

ことに勘付いていたかのように再び体を反転させ、その場で大きくジャンプすると今までパイがいた場所に蛇の頭がちょうど出現しパイはニヤリとその光景を確認すると、落下速度も威力に加え

左手のナイフを思いっきり蛇の頭に突き立て！切り裂く！

シュルシュル…！

「次はここッ！」

刺したナイフの下でぐったりとしているヒュドラの蛇の首を逆手にして

持ち上げると、まるで自分の盾として使うように前に差し出し再び迫ってきていた一体の首に噛ませた！

ダンッ！ダンッ！

ウジャアアアア！！ウジュ・・・ウジュールル！

噛ませた蛇の首目掛けてUZIカスタムの弾丸を放つとぐったりとなった蛇の首に刺さったナイフを抜く！

ブシュッ！ザグシュッ！ボタボタッ！ボタッ！

けたたましいとも言える、その蛇の首から落とされる大量の血液の音は

床を鳴らし、通路に君の悪いヒュドラの絶叫がこだました。

「フンッ、どうした化け物！それで終わりか！？」  
その場でクルッと左へ回転したパイは、ナイフを思い切り握り締め  
痛覚に震えているアメーバーの本体を見て、蛇の首がガードしてい  
ない

露出したヒュドラの顔面部分に目掛けて放った。

ザグシュツツツツツ！！

放たれた鋭利なナイフは、直線を描きヒュドラの本体の人間でいう  
顔面の露出した部分にヒットした！

グギヤアアアアアア！！

今までにあげたことの無いような物凄い大音量の  
絶叫を上げるヒュドラを取り囲むように蛇の首がジタバタと  
その場の壁や天井にのた打ち回る姿がパイの目に移る。

「…そこが弱点かッ！！！」

パイは大声をあげると、右手に持っていたUZIカスタムを両手でしっかりと狙いを定めるように固定し、トリガーを全力で押し出した！

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダッ！！！！

放たれた銃弾は爆音を上げるとヒュドラの露出した顔面の部分を中心にして  
ありつたけの弾痕を残しヒュドラの体内を貫通し、炸裂し！爆発した！

ギョガアアアアアアアア…！！

ブシュツ・・・ブシュツ・・・ジュワワワツツ・・・！！

最後の断末魔をあげるとヒュドラは崩壊するように  
その場にドスンと大きな音を立て沈んだ。

アメーバーの半分は見る見るうちに固体であることを辞め  
醜悪な褐色の液体を床にぶちまけて、広がっていく。  
その際に酸化液の元であるものも同時に流れていったらしく  
床の液体がジュワジュワと勢いよく蒸発していくのがわかる。

「終わった…もう蛇は見たくないな…」  
パイは崩れ去るヒュドラの肉体を見つつ、ぐったりと  
その場に倒れる蛇の首にどことなく安堵の表情を浮かべ  
綾香の待つ壁へと歩き出した。

あたりには溶液がけたたましく蒸発するヒュドラの死骸と  
UZIカスタムから放たれた弾丸が放つ硝煙の香りが  
ガイア1Fの西通路全体を静寂と共に包み込んだ。

タツ…タツ…タツタツ…

綾香のいる壁へと移動するパイの胸には  
何か達成感と同時に恥ずかしさに似たものが宿っていた。  
『仲間を見捨てても先へ進む』といていた自分が  
真つ先に『仲間を助けた』事実は、彼女の胸の中に  
何かムズ痒いものを感じさせるのには十分な出来事であった。

- 数分後 -

壁に横たわる綾香の傷口を消毒し応急手当をしながら  
パイはぼそっとつぶやくように言った。

「…いつまにか忘れていたな、自分にもこんな感情があることを…」  
傷つく綾香にその言葉は聞こえていなかっただろうが  
どこかぬくもりを感じさせるパイの手は、化け物への  
憎悪だけで戦っていた自分の冷えた心に十分すぎるほどの暖かさを  
感じさせた。

この死者と化け物だけが徘徊する、この闇の巣窟で  
硝煙の匂いと化け物の悪臭のする、この冷たい通路で  
生命在る物のみが持つ『ぬくもり』に綾香とパイは  
久々にお互い【再会】を果たしたのであった。

限りない絶望が漂う悪夢も、必ず覚めると信じて。

シナリオ【再会】 - 終了 -

## シナリオ【悪夢】 - 1

P M 11時08分    ガイア1F    通路

床から浮かび上がる不気味な蒸気と、それに伴う

むせ返るような刺激臭は、鼻腔を震わせ嗚咽を催させ

命在る者達の目の前の危機を促し、その使命感を揺らがせる。

肩から提げた武器、全身につけた装備が進むごとに酷く軋む。

さつきまで軽々しく動いていた二本の足は鉛のように重い。

一步一步、朱色に漬された床を踏みつける音は鈍い。

視界から広がる恐怖は伝染し、いつの間にか平常心を奪っていった。

巨大な力で頑丈そうな研究室のドアは、全て屈折して押し込められ  
通常より強度な材質で出来ていると思われる透明のガラスは辺りに  
散乱し

それが褐色の液体に触れると、まるで蠟でも溶かすように  
見る見るうちに液体となって、蒸気を伴った気体となっていくのが  
見える。

真っ赤に染まった床に倒れた、白を纏った無残な肉塊を踏み払い  
奇妙な色の壁画が続く通路を駆け抜け  
陰鬱な小部屋へと歩を進める命在る者達。

だが…恐怖は感情の掌握を既に完了していた。

命在る者達は、顔にこそ出さないが怯えていた。目の前に広がる大層大掛かりに出来た『非日常の現実』にこれから必ず訪れるであろう『予定調和の絶望感』に誰もが『ある思い』にすがりたかった。

これが極稀に見る『性質の悪い悪夢』だと……自分が早く平凡な日常に目覚める事を願っていたのだ。

P M 1 1 時 1 2 分    ガイア 1 F    警備員詰所

警備員詰所と書かれたプレートを見たレンは駆け足気味の足を止め、隊員達に指で「警戒を怠るな」と指示すると閉じているドアの隣に移動し、何かを発見したような素振りを見せる。

レンは戦闘服の胸ポケットの一つから小さな携帯電子機器のようなものを取り出しドアの隣の壁の中ごろに飛び出た、四角い開閉端末の挿し込み口らしき所へ持っていた機器を差し込む。開閉端末の隅には、閉鎖中を示唆する赤色が放たれている。

「化け物にやられてないのが、せめてもの救いか」  
周辺には化け物が存在してたであろう暴力の全てが存在していた。

散乱した強化ガラス、削岩されたように抉られた壁。  
所々朱色に染まる床に跳ね返る光が、妙にキラリとあたりを照らす。  
レンは、そんな周囲の状況を見ながら電子機器に何かを打ち込んで  
いく。

ピーッ！

生命を感じさせない無機質の音が通路に響くと  
赤色を発光させていた開閉端末は、緑色に変わり  
それまで重く静けさを保っていたドアが徐々にスライドしていく。

ボワワ…

室内からゆらゆらと陽炎に似たようなものが湧き上がる。  
どうやら警備員詰所の室内は相当高温だったらしく、冷たい外気に  
触れ  
室内にある熱を持った物体たちが反応して、陽炎に似たものを  
発生させているらしい。

「さあ、行くぞ！」

指で全員に指示すると、室内へと慎重に進んでいくレン。  
重厚な金属の壁に囲われた内部には、どこか安心感があったが  
レンの右手と左手の指は、ガッチリと銃のグリップを握り

勇壮に前進する身体の前には、しっかりと銃が構えられていた。

それを追いかけるように、背後からの敵の強襲を防ぐために一人ずつドアに背を向けて

駆け込むように室内へと進むAチームの二人とDチームの面々。後ろ目で身近に近寄る絶望を感じながら。

P M 1 1 時 1 4 分 警備員詰所 コントロールルーム

…ブウオオオン…ブウオオオオン…

無機質な灰色の室内に、外の通路とは一味違った付け替えたばかりの青色の蛍光灯が室内を照らしている。巨大な空調機器から発せられる音が聞こえる。どうやらエアコンが作動しているようだ。

ポタ…ポタツ…

あたりを見ると簡素な椅子やテーブルがあり、上には書類がばら撒かれている。

テーブルの上にはマグカップが転倒し液体がポツポツとたれている。立ち上がる香りからコーヒーとは想像できたが、ここにいた人間がどういふ状況でこうなったか考えると寒気すらする。

室内を中ほどまで進むと、このフロアを監視していると思われる

数十台のビデオモニターが壁に埋め込まれているのが見える。しかし、どれもザーツという電子音がするだけで映像は出ていないのを見るに作動はしていないようだ。

妙に室温の高い部屋は、それまでの続いていた不気味で冷たい通路から想像も出来ないほど暖かく。

恐怖に煽られ、いつの間にか強く握り締められたそれぞれの銃も暖かさによる安堵感だろうか、気持ち一つ分程緩められているように感じる。

「荒れてはいるが…外の通路に比べて見る限り…化け物はここには来なかったらしいな」

レンが辺りを見渡し静かに声をあげる。

その表情は未だ厳しいが、さっきまでの張り詰めた緊張感はない。むしろ落ち着いているといった感情さえ見受けられる。

冷たい通路で異質な化け物に追われ、肉塊を踏み散らし抑えることの出来ない嫌悪感を起こさせた腐臭のする血の池で出来た廊下を進む

さっきまでの状況と比べれば『まだ人間的な範疇』であると思っていたのだ。

「これが昇降機のキーロックだな。…よし、これで動かせるぞ」  
ビデオモニターの前に並ぶコンソールに目を配っていたレンは昇降機用のキーロックのスイッチを見つけると、即座にロックを解除する。

ガシャン！グウウウン…！！！！グウウウン…！！

奥のドアからけたたましい音が聞こえる。  
どうやら昇降機が動き出したらしい。

「…昇降機はあのドアの向こうか。レナ、行くぞ」  
パッショーナが指差した人が二人ほど入れる自動開閉型のドアのプレートには

【この先、貨物用昇降機】と書かれている。

「あ…隊長！一人では危険です…まってください」  
さつきから生きた心地のしないパッショーナは、レナを自分が呼んだにも

かわらず、自らが先んじてドアのほうへズカズカと向かっていく。

224

「銃声が止んで…？綾香達は大丈夫かな…」  
貴美子が周りを警戒し銃を構えながら、いつの間にか  
遠方で聞こえていたはずの銃声が止んでいることに気づき  
不安そうな表情を浮かべ口ぶりを浮かべる。  
綾香が、上手く逃げてくれることを願っているが  
今の化け物に対する憎しみに歪んだ綾香の事を思うと  
最悪とも言える杞憂が安易に想像できる。

「案外、上手く化け物を倒してこっちに向かっているかもな」  
テーブルの上の書類をチラチラと横目で見ながら  
貴美子の独り言を聞いていたフィクシーが話しかけてくる。  
顔面には、さつきまで恐怖にひりつかれていた表情はなく。

その口調は、どこか穏やかだ。

「この状況に置かれて随分と樂觀的ね？ やっぱり色男はそういう所  
『図太い』のかしら」

出入り口付近を警戒していたケリーが、余りに樂觀的なフィクシーを  
皮肉るように、手の人差し指と中指を突っ立てて左右に振って挑発  
というより

馬鹿にしている風に声をあげる。

「ケツ、毎度毎度お姉さまはキツイお言葉で…まあ物事ってのは楽  
観的に考えたほうがいいぜ。いつまでも悲壮なツラしてっと、お嬢  
さんの綺麗な顔が台無しさ」

「それって口説いてるつもりですか？ フィクシーさん」

女たらしのフィクシーらしいと言える『いつもの調子』の台詞が

貴美子の心にどことなく響き、余裕を生ませたのか

いつもは真に受けないジョークも、聞き流すことなく  
パツと言い返すことが出来た。

「おいおい、今のは掛け値なしの俺の本音だぜ？ まあいつもの俺が  
やってることから見ればたしかに誤解も招くわなあ…」

フィクシーは、いつもの行動を後悔するように目を下にやり唇をす  
ぼめる。

銃を構えていた片手を解くと、頭を気恥ずかしそうに何度もかきむ  
しる。

その光景は、どこか滑稽で彼らしさを感じさせる。

「ハハッ……」

貴美子はその光景に耐え切れず、笑顔がどつと吹き出る。久しく忘れていた笑うという行動と笑顔。

笑いながら彼女は、どこかで実感していた。

『自分は、まだ生きている』と。

「そそ。その笑顔だよ。俺が見たかったのは。ソレなの！生きている限り、あんたのその笑顔だけは忘れないでくれよな！」

フィクシーが指を指して貴美子を見つめながら声を大にして言う。

「あなたは本当に……フツツ認めるわよ、どんな状況でも微笑ましいその考え方だけは」

あきれたような声を放つケリーにも何時の間にか笑みが戻っていた。その声は張り詰めることなく、完全に『いつもの』ケリーだ。

正直、この状況で楽観的になれる彼に少し妬くような気持ちもあったが

貴美子の沈んだ心をなんともなしに浮き上がらせる彼の能力が

本当は少しうらやましかつたのかもしれない。

「と、とにかく！良くも悪くも前向きな気持ちってのは、どんな時でも人を成長させるもんだってことがいいなかったんだよ！」

フィクシーが、ばつが悪そうに一言を言うと再びドツと笑いが起こった。

彼の表情や口調は明るく快活で、見るものにどこか安心感を与えた。しかし、笑っているフィクシーの脳裏には嫌な言葉が浮かんでいた。

(…樂觀的か…今回はそう思おうには余りにも『絶望的』すぎるがね)

「さあお喋りはそこまでだ。さつさと目的の物を回収するぞ」  
レンは、どことなく笑っている隊員達に対して冷徹に接するようにドアのほうへ右手の親指でまるでヒッチハイクをするように移動を指示すると  
その親指を下に向けて「駆け足」と言わんばかりにせかした。

すでに昇降機は到着していたらしく隊員達は再び銃を構え  
貨物用の昇降機がある隣の部屋へと移動する。

…ゴオウウウン

「…伝えるべきではないな…混乱するだけだ。これが事実なら…」  
レンは隊員が居なくなつたところを目で確認すると  
テーブルから2枚のメモを荒々しくとり、コントロールパネルで  
何か一つ二つ操作をすると、ビデオモニターの画面に文字が浮き出  
る。

『H・BOWプロジェクト試作品の研究室脱走が各層で発生。原因は今のところ不明だがH・BOWの戦闘能力に各自十分注意し地下へと移動されたし』

「神は…どんな時も気まぐれだな。しかも無慈悲すぎる…」  
意味深な台詞を吐くと、厳しい表情を崩すことなくレンは左手に持っていたメモを胸ポケットにしまい昇降機の部屋へと駆け足で移動した。

P M 1 1 時 2 1 分 貨物用昇降機

ゴウンゴウン…！ゴウンゴウン…！

隣の部屋一つ分ほどある巨大な昇降機は七人が乗り込むと地下へと向かって軋むような巨大な音を立てて動き出した。昇降機が降りていく円柱型のスペースは薄暗く、外のような眩しいほどの光は無い。周囲には申し訳程度に蛍光灯が配置しており、下先の様子は暗くて見えない。

昇降機の周りの壁は、よく見ると傷ついている。  
使用回数による劣化であろうか？とどこどころ金属を  
削り取ったような部分がある。

昇降機の先端にある操作版には、大きな操作マニュアルが置いてあり  
その厚みからして専門的知識なしで動かそうとすると相当大変なよ  
うだ。

マニュアルから察するに、この昇降機は地下から地上まで

1層ずつ各階へ資材を運搬するためだけではなく

中央エレベーターが使用不可能となったときに緊急手段として  
人間を乗せることも想定していたらしく、金属製のケージの横には  
人間が座ることの出来る簡易ベンチのようなものが設置してあった。

「無事に目的地までいければいいが…」

「たしかに、ここで襲われたらひとたまりもないな」

操作版の前に立っているパッショーナの声が低く響くと  
それに呼応するようにレンが言う。

「縁起でもない…冗談は…今は辞めてくれ」

「ああ…すまない。だが最悪の状況だけは考えておくことだ」

どこか不安そうなパッショーナに、そう言うとレンは距離を置き

先ほど警備員詰所で拾った2枚のメモを胸ポケットから出して眺め  
はじめた。

【警備員の日記 8月15日】

『まったく嫌になるぜ。この職場。』

この仕事についてもうすでに6人も同僚がやられた。

ただの警備員にしては給料が法外だと思ったんだ。

しかも有給なんてシステムもないし、ここからの脱走も出来そうに無い。

これじゃあ監禁じゃねえか！くそつたれが！

しかも眠りにつくころには決まってあの声が聞こえやがる。

実験場の最下層に住んでる科学者どもが作ったものらしいが…

一体何の研究をしてるんだろうか？戦争でも始める気かよ…

まあ、あと1ヶ月もすれば契約もきれるし。

早く帰ってまっとうな仕事につきたいもんだぜ。

『

【観察員のメモ】

『番号 H - B O W ・ P 6

名称 【コカトリス】

識別 鳥類生物複合媒体型

体長 82 c m (翼を含めた) 165 c m

体重 15、3 k g

食欲 時期別 日に3〜5 k gを摂取

知能 下(敵、味方の識別出来ず)

性格 薄暗い場所を好む、テイトリーに進入されると凶暴化する

傾向

特徴 常に集団で行動し鋭利な爪や頑丈な嘴を持つが、ある周波の音に弱い』

「チツ…暗がりをおむか…」

響めるようにレンがそう言つと、まるで予兆していたかのように昇降機が降りている空洞の地下から奇妙な声が聞こえる。

…バサツバサツバサツ

ク…アツ…ク…ワア…

「なんの音だ…？」

パツシヨーナが操作版から手を離し、銃を構えると周囲を警戒し始める。

バサツバサツバサツバサツ！

クワア…ツ！クワア…ツ！

「来たか！全員周囲警戒しろ！」

レンの声が響くと、羽ばたくような音と鳴くような音が空間に共鳴して

さらにでかく聞こえてくる。

クワアーーーーッ！クカーーーーーッ！！

黒く羽ばたく影が操作版の近くから、とんでもない速度で現れた！

逃げる思いで飛び乗った部屋の中にあつた

地下へと向かう轟音を立てて進む昇降機だったが。

地下に向かった隊員には、さらなる悪夢が待ち受けていた。

度重なる恐怖に煽られ、絶望的な状況を飲まざる終えない人間達。

落ちていく暗闇の坩堝に蠢く得体の知れない異形の化け物。

…勝つのは命在る者か、命無き狩人か。

## シナリオ【悪夢】 - 2

PM 11時24分 貨物用昇降機

クワアーツ！クワアーツ！

地下へと潜っていく昇降機の下からひどく甲高い奇声が聞こえる。申し訳程度に設置された外壁の電灯に照らされて何かがギラツと光る。

バサツバサツと羽音のようなものが聞こえ、その音が聞こえるとあたりに広がる暗がりから幾つもの影が躍りだす。

「悪い冗談が的中したな・・・レンツ！」  
人間達を取り囲むように羽音を立てて移動し始めた影めがけてすかさずパッショーナは手に持ったG36Cのセーフティを外し足をその場にガツチリと固定すると、影の見える方向へと乱射した！

ドドドドツ！ドドドドドドドドドドツ！！！！

マズルフラッシュと共に数十発の特殊弾丸が直線に放たれスピードを得ると、降下していく昇降機の暗闇と化した天井を滑空するかのよう飛んでいく！

クワアーツ！クワアーツ！

放たれた特殊銃弾は、影に数発命中し小さな爆発を起こすと爆発による閃光が暗闇に包まれているあたりを照らしだす。人間とも動物ともわからない苦悶の音が構内中に聞こえる。

バサツ！バサツ・・・！ガンツ！ドスン！

「やったかッ！」

やがて苦悶の声を上げていた影の一体が昇降機の実操作板に居るパツシヨーナめがけて力なく急降下し、操作板に激突するようにその場に、その『奇怪』で『おぞましい』姿を晒す。

地面にずり落ちた翼の生えた化け物の全体は人間に酷似していた。翼からは長細く伸びた腕の先の手首は三つ又に分かれていて奇妙に繋がった指先は強固な物質組織を形成している。

胴体からは奇妙にスラツと伸びた足が不気味にピクピクと動いている。

その先には鋭利な金属を思わせる巨大な爪が生えていて、暗がりのライトに反射すると鈍い光を放っている。

頭部には鳥で言うトサカの部分が形成されていて、顔は人間に近いが、目が飛び出すように前に出ており、人間でいう口の部分は硬く強固な金属のような嘴が生えており獲物を狙うが如く、そこから汚い血液とだ液が混ざったものが零れている。

そして全身を覆う筋肉組織の白と赤の繊維が剥き出しになっており銃弾で傷ついた部分から千切れた筋肉組織が見え隠れし、見た目以上のおぞましさを煽り、再び隊員達に嫌悪感を催させる。

「汚え肢体しやがって・・・吐き気がするぜ！」

余りの醜さに、思わず押さえていた嗚咽の感すら言葉にし、硬いブーツに覆われている右足で化け物の胴体を思いつきり踏みつけると

次の化け物の影めがけて銃弾を発射しようとした…その時

クワア・・・グビヤボオオオオツ！

「…ツ！？！？！？！？！？」

絶命したと思われる化け物の死体の口から

まるで水流のような褐色の液体が放たれ、パツシヨーナの戦闘服にシャワーのように浴びせられる。

全身が朱色に染まり、少し動揺したパツシヨーナだが次の標的に向けてG36cを構え、マガジンを取替え即座に操作板を離れ、射撃できる有利なポジションへと移動する。

ババツ！カッン！カッン…！

しかし、四角く薄い鉄製のケージしかない昇降機には

外にあった頑丈な壁も、盾になりそうな巨大なコンテナも存在しないため

無数の鳥の化け物から隠れられるような場所はなく

襲ってくる化け物に対して、どうしても背後を含める全方位から攻撃を受けてしまうような不利な態勢に追い込まれるのは必死だった。

パッションナの硬いブーツが床を激しく蹴り上げる音が空しく聞こえ上空から際限なく襲ってくる鳥の化け物に弾丸と労力を消費したのだ。

ギャワーツ！ギャワーツ！！

ダツダツダツダツダツダツ！！！！

「多いな。目視でざっと20〜30匹はいるぞ」

次第に軽くなつていくマガジンを確認しながら、上空から襲来する鳥の化け物に対する的確な射撃を行うレン。

「全員密集隊形！360度！各個防衛空域を減らしながら化け物を撃退しろ！」

手ごころな遮蔽物が見つからず、圧倒的な不利に持ち込まれている状況だが

未だレンの目と命令する口調に冷静さは失われていない。

「貴美子こっちは私がやるわ！あなたはそっちを！」

「ケリーさん！Aチームの人たちがあつちに・・・」  
ケリーが化け物に向けて散弾銃を向け警戒しながら、  
中央に頓挫しているAチームのほうへ向かう貴美子を  
こちらにくるようにグイッと強く手繰り寄せるように手を引っ張っ  
た。

「あの人達はあの人たちでやるでしょ！私たちはDチームなのよ！」  
ケリーの怒号が窟内中を伝達するように大きく響く。  
形相は未だ強張っていて、どことなく苛立ちさえ感じられる。

「そんな・・・ッて！？ケリーさん！後ろ！！」  
貴美子が振り返ると、ケリーの背後の物陰から鳥の化け物らしきも  
のが

飛び出すのが見え、とっさに声をあげる！

クワァーックワァーッ！

上空に群がる鳥の化け物達が一斉に甲高い奇声をあげると、  
物陰から狙い済ましたかのように、死角であるケリーの背中目掛けて  
一匹の化け物が飛び込んできた！

「まったくウザったいわね！！」

ドンッ！ババシューッ！

ギャワアアア！ギャワアアア！

「話してるときに横槍いれなくて頂戴ッ！」

肩と腕を曲げると散弾銃を後ろに向け、小うるさい鳥の化け物に対して

散弾銃を容赦なくお見舞いするケリ！。散弾に当たってその場に崩れる

鳥の化け物には目もくれず、まるで鬼のような形相で貴美子の腕を引っ張る。

「完全にキレちまつてるなあ・・・まあコイツが利く分キレる余裕もでるって話か！」

突撃銃を高く上げながら、次に襲来する鳥の化け物に対してフィクシーがお得意の余裕をたっぷり含んだ声をあげる。

圧倒的不利な状況に追い込まれはしたが、たしかに用意された銃器武器が利くという点では、先ほどの化け物よりは

まだ希望が持てると思える展開だった。

…だがそんな希望、その余裕さえもこの暗闇は飲み込むのであった。

カツツカツツタッタツ・・・ボタン！！

「・・・ぐく!!!」

中央で鳥の化け物を迎撃していたパッショーナが移動しようと走ると走っているうちに何か全身に纏わり付くような感覚がし次の瞬間、思いっきり躓くと、そのまま体勢を崩してしまった!

クワーツ・・・クワーツ・・・!

それをまるで見知ったかのように、ギラリと鉄のような大きな牙を鈍く光らせると、暗がりから奇妙な声を上げ

数匹の鳥の化け物が群れを成してパッショーナに向かってまるで円を描くように陣形をなし、ゆっくりと降下してくる!

「くそつたれ!!!」

すかさずパッショーナが鳥の化け物の群れに向けて転んだままの射撃体勢を取ろうと突撃銃を構える!

又チャア・・・ベトオ・・・

「・・・ツ!!!」

パッショーナはその時、何か全身に違和感を感じる。転んだときにも感じた違和感と同じもの。

体全体に纏わり付くような感覚が全身に広がる。

視界をそらすといつの間にか真っ黒であった戦闘服には赤いスライムのような凝固したものが、所々くっ付いているのが見えた。

「こ、これは!」  
そう、さきほど全身に浴びせられた化け物の血が、  
いつの間にか凝固剤のように体の各関節を縛り  
パツシヨーナの体の自由を奪っていたのだ!

ダダダッダダダダッ!!

「チツ、こんなところで死ぬわけには・・・!」  
フルオートでけたたましい弾丸を放つ突撃銃だったが、暗闇から迫る  
無数の鳥の化け物たちは、すでにパツシヨーナを取り囲むように  
襲い掛かってきている。

体全身に渾身の力を込めて思いつきり体を反転させようと力を入れ  
るが

動けば動くほど化け物の体液はスライムのように纏わりつき  
戦闘服を通してパツシヨーナの関節を固め、身動きを取らせない。

クワアーーーーッ!

化け物の群れの中の一匹が、パツシヨーナ目掛けて  
奇声を上げながら恐ろしいスピードで急降下してくるのが  
パツシヨーナの肉眼に確認できた。

金属のように鈍く光る嘴は、真っ直ぐにパツシヨーナの心臓部分を  
狙う!

「ここまでか・・・ッ！」

ダダダッダダダダッ！！

「ファイナーレには早すぎますよ隊長！！！！」

けたたましい銃撃音と共に、人間の声と化け物の絶叫が聞こえる。絶望銃弾が来た方向をパッショーナが向くとAチーム最後の一人である

レナがこちらに向かって走りながら体を起こそうとしているのが見える。

クワア・・・ク・・・ワア・・・

Aチームのレナが放った弾丸は化け物の頭部を突きぬけ

化け物は衝撃の勢いにそのまま流されるように、パッショーナの横の床を

地面を引きずるように吹っ飛び、気色悪いつめき声を小さくあげている。

「隊長、立てますか！？」

「だ、だめだ・・・化け物の体液が・・・かたまって・・・」

戦闘服の関節部を通り越し、すでに床にひりつくように固まった化け物の体液をどうにか振り落とそうとするが

まるで強力なゴムのように引っ張る力を吸収され、力の分だけまた戻る。

まさに暖簾に腕押しといった様相である。

グビヤボオオオツ！

「・・・あつ!?」

「しまっ・・・!」

それまで床に頓挫していた化け物の死骸から体液が吐き出される。

警戒していなかった方向からの攻撃になす術も無く、ゼリー状の液体が

レナとパツシヨーナに降り注ぐ。

その瞬間、液体が当たった時の衝撃に耐え切れず

バランスを崩したレナは、その場に勢いよく倒れこんだ。

…クワアーツクワアーツ…

薄暗い閉鎖された空洞内を飛び回る化け物の姿が粘着液に包まれて身動きの取れず横たわるAチーム二人の目にチラツと映ると

銃を構えることも忘れたレナとパツシヨーナは再び絶望を眼にする。

空腹を満たすための餌を見つけたように飛び出す貪欲な瞳、

我先にと飛びつくように羽ばたかせる翼の音、ギラリと鈍く光る爪と嘴

そして化け物が二人目掛けて向かってくる、恐ろしい奇声をあげながら。

クワアアアーツ！クワアアアーツ！

ガリガリツ！バキバキツ！グシャグシユ！・・・ゴトン・・・

熟れた果実を貪るように化け物たちが横たわる餌2匹に群がり  
薄暗い闇の中、赤と黒と肌色の化け物達の一方的な悦楽の世界が広  
がった。

地獄と表すには余りにも過酷、残酷と表すには余りにも無碍。  
少し経ち悦楽の世界は終わりを告げ、興味の無くなった化け物は  
再び暗闇へと飛び去る。

後に残ったのは、薄汚れた戦闘服の破片と、無残に手首だけに握ら  
れた突撃銃と、褐色に濡れた床だけだった。

「・・・ツツツツツ！」

冷静なはずのレンの表情がその光景を見るに一瞬にして歪み、  
その目に映った全てを否定するかのように声無き声がこだまする。  
陣形を乱すまいと思わずその場に足を思いつきりけりたてるが  
一度溢れ出した衝動はまだ押さえきれないといった感じだ。

「・・・全員、神経を集中させる・・・死ぬぞ・・・あいつらみたいになー!!」

フツと冷静さを取り戻すように静かに言い放ったレンだったが  
口調、表情共に震えていた。冷静さを事欠くことなく  
任務を達成してきたDチーム隊長のあのレンが、眉間に皺を寄せて  
感情が噴出すのをガマンしているのだ。

『イエッサー!!』

三人の生存者の場違いな大きな声が張りつめた空気にこだまする。  
これが隊長の辛さに対しての思いやりだと思っていたからだ。

(俺たちは踏み込んだじゃいけねえ、とんだ樂園に迷い込んだ  
みてえだな)

レンの表情を見つつ、フィクシーは思い出していた。

『俺たちが進んできた道は、

命ある者が狩られ、命亡き者が栄える

絶望と地獄が調和する化け物の樂園』だと。

…昇降機は未だ下降を続けている。

## キャラクター設定項

アヤカ＝ユメノ（21歳）

コードネーム：D - Queen

C・B・S・F（対バイオハザード緊急処理部隊）

Dチーム（ダイヤモンドチーム）所属隊員。日本人。

事件後、日本政府に抑留され特殊部隊CBSFに半強制的に入隊させられる。

しかし民間人の彼女が軍の訓練を受けたことにより一年前の彼女とは違う、どこか冷徹とも思える雰囲気がある。

・Main firearm（主銃器）

シグ SG550 / Sig SG550

H&amp;K MP5&MP5K DTC

・Second firearm（副銃器）

ベレッタ M8000 / Beretta M8000 " Cougar

ar”

フィクシー＝ウルズ（33歳）

コードネーム：D - Jack

C・B・S・F・Dチーム所属隊員。アメリカ人。

長くアメリカの特殊部隊デルタフォースで任務を行っていたが

FBIの陰謀で大きな事件に巻き込まれて退役を余儀なくされる。

あてもなくさまざまに迷っていたが、CBSFにスカウトされ現在にいたる。

銃器戦闘と柔術のプロだが、性格は、いたって温和。  
ウィットにとんだジョークが得意。

・ Main firearm (主銃器)

コルト M4 カービン

FN F2000

・ Second firearm (副銃器)

FN ファイブセブン / FN Five-seven

レン「アーチャー」ミハイロフ (53歳)

コードネーム：D-King

C・B・S・F・Dチーム所属Dチーム隊長。ロシア人。  
元ソビエト軍特殊部隊を歴任し、輝かしい武勲をたててきた男  
ソビエト解体後、軍を退役するが潜り抜けてきた事件、  
戦場においても緊急事態を冷静に判断し  
優れた指揮能力を持つ軍人としての能力は高い。狙撃銃と大型火器  
に精通。

厳格な性格で、国に息子が2人いる。

・ Main firearm (主銃器)

USSR AKM

USSR RPG7

VSS - Vintorez -

バレット M82

・ Second firearm (副銃器)  
マカロフ / Makarov

ケリー // ファンク // オブライト (30歳)  
コードネーム: D - Angel

C・B・S・F・Dチーム所属隊員。アメリカ人。  
一年前の事件でパートナーの賀居を失い、アメリカ軍を退役。  
その後、何ヶ月かアメリカの地方紙で新聞記者として働いていたが  
政府要人に居場所が判明し、召集される。  
CBSFでアヤカ達と再開し、  
一年間、アヤカたちの訓練にトレーナーとして付き合う。

・ Main firearm (主銃器)  
ベネリ M4 スーパー90 (US M1014) / Benelli  
i M4  
H&K G36c

・ Second firearm (副銃器)  
シグザウアー P226 / Sig Sauer P226

キミコ // コウノ (27歳)

コードネーム：D - Clown

あの事件から一年後の貴美子。  
アヤカと共に日本政府に抑留され、CBSFに半強制的に入隊させられる。

相変わらずの腕力と脚力に、ポジティブな性格から  
部隊に必要な協調性と戦闘能力を持つようになった。

・ Main firearm (主銃器)

FN P90

・ Second firearm (副銃器)

デザートイーグル / Desert Eagle

デリンジャー 410 calibre (口径) / Derringer

パイロドオンカ (25歳)

コードネーム：D - Ace

C・B・S・F・Dチーム所属隊員。中国人。

中国裏社会の暗殺集団『亞屢飛胃』の元工員で

特殊な手裏剣やナイフやクンフを得意とする。

飛びぬけた身体能力を持ち、銃器を使わせても一流。

爆発物の知識や、ウイルスに関しての知識も高い。

・ Main firearm (主銃器)

IMI ウージー / IMI UZI

タボール AR21 / Tavor AR21 (TAR21)

・ S e c o n d f i r e a r m (副銃器)

I M I ジェリコ941 / I M I J e r i c h o 9 4 1

トカレフ / T o k a r e v

タングステン・カーバイト製コンバットナイフ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5896d/>

---

バイオハザード・OB・FILE 『K』 ~ Nightmare without end ~

2010年10月9日22時22分発行